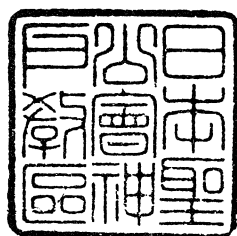


The Fellowship Letters

(上)

八代斌助主教の前任者、バジル・
シンプソン主教が在英・神戸後援会
にあてた書簡集



日本聖公会・神戸教区
歴史編纂委員会

序

まだ私が明石の牧師の頃、ある日、神戸にでかけて、親父と一杯飲んでいた。

「オイ、欽！ 仏教のお寺や神社では簡単に世襲ですますが、キリスト教では、たとえばミカエル教会の牧師の場合、同じケラムで修業したキャソリックの立場の神学を身につけた者、あるいは似た立場のキャソリックの聖公会正統神学をもつ者が後継者になるもんだ！」

と、親父はポツリと云ったものである。たしかに英国の有力教会や大聖堂の主任司祭も、ギリシャ正教の総主教の座も、ローマ司教（ローマ教皇）*Episcopus Romani* の教座の後継者問題にも、よほどのハプニングがないかぎり、同じ神学の立場をとる者が後継者選ばれている。

聖ミカエル教会の初代牧師であったフォス主教は、ケンブリッジ出身の正統神学者であり、オックスフォード運動の影響を受け、神戸で聖公会出版社、英国聖書協会を設立した。その後継者バジル・シンプソン主教も、ケンブリッジ出身のキャソリックの立場をとる聖公会正統神学者であり、かつ修

練神学も心得た霊的指導者であった。このバジル主教が親父の八代斌助牧師を見込んで、英国の神学校に留学させ、友人のケレ－SSM神父のもとで修業研修をさせた。

ケレ－SSM神父は親父の生涯の恩師恩人であり、戦時下の合同問題の折、軍市政権に抵抗した非合同派の中心はケレ－会であると、特高警察が見抜いたのもさすがである。

「オイ、欽！ 留学前にはどの西洋人も立派に見えるが、留学後もやはり立派に見える宣教師や外人主教がホンモノの立派な奴だ。だが、つまらん宣教師と英語でケンカするな！」と親父にたしなめられたこともある。

前任主教、後継者との関係を抜きにしても、バジル主教と親父との間の、戦前、戦時下を通じての一貫した友情は尊いものであった。

今日、神戸教区歴史編纂委員会が刊行したバジル主教書簡集実現の喜びにあたり、序文のかわりに駄文を呈する次第である。読者諸君は若き日の八代牧師の姿を、このバジル書簡集の行間から読み取って欲しいと願うものである。

一九八五年十月十日（親父永眠十五周年）

✠ 神戸教区主教 パウロ八代欽一

書簡集山出版の経緯

このたび翻訳をしたバジル・シン普森主教書簡集(上)は、
 原名を「K O B E L E T T E R S」というもので、伊神努
 司祭(現浜田キリスト教会牧師)が英国・ケラム神学校に留学
 (1971-73)中、同校が閉鎖されることになり、付属図書館の整
 理が行なわれたさい発見されたのがこの書簡集で、留学を終
 えた同師が譲り受け、持ち帰られたものである。

バジル主教は、一九一〇年(明43)S・P・Gの宣教師として
 来日。いったん帰国。一九二五年(大14)9月ロンドン・ウエ
 ストミンスター大聖堂で神戸地方部主教に聖別され、12月再
 来日、一九四一年(昭16)9月、病をえてやむなく日本を離れ
 るまで十六年にわたり、神戸地方部主教として、神と人に仕
 えられた。この間神戸地方部は主教の指導のもとに霊的にも
 数的にも顕著な発展をみせた。本来ならシン普森主教とよ
 ばれるところを、終生バジル監督さんと呼ばれ、多くの人々
 に愛された方であった。(聖公会人物史『あかしびと』より)
 残念ながら神戸教区には、教会史に関する資料としてま
 まったものは全くない。そこで、これを手掛かりに、今日の
 教区に至った過程を勉強しようと、有志で手分けをして翻訳
 を始めたのがこの書簡集出版のきっかけとなった。

戦中戦後、教区に吹きあれた嵐の時代をくぐり抜け、今日
 の教区の基礎を築かれた若き日の八代斌助主教の姿を、多く
 の同労教役者の方々の姿とともに紙上に偲ぶことができる。
 これら書簡は、日本におけるバジル主教の働きを、日本伝
 道の尊い使命感と大きな犠牲とともに支えた在・英国「神戸
 後援会」(K O B E F E L L O W S H I P)のメンバーにあ
 てた同主教の報告書簡で、全部で四十二通ある。

第1号は、一九二五年(大14)来日途上の船中からのもので、
 最終号は、日中戦争突入の年一九三七年(昭12)2月の日付で
 ある。一年に平均四通発送されたことになる。

従って今般のものは全体からみれば約半分である。私が教
 区の歴史編纂委員長であった時代からその翻訳に取り組ん
 できたが、このたびようやく出版の運びになった。翻訳を分担
 して下さった八代教区主教をはじめ、主にある同労者の方々、
 信徒の方々に心から感謝している。

とはいっても、今やつと半分を終えたにすぎない。残り半
 分の翻訳も既に始まっているとか、一日もはやく完訳され、
 書簡集(下)として、皆さんに読んでいただく日が一日も早く
 くるようにと希求するものである。

一九八五年三位一体後第十五主日

前神戸教区歴史編纂委員長 司祭 西川正文

目次

—序—

書簡集出版の経緯

書簡 第1号	【1925年(大14)11月】		1
書簡 第2号	【1926年(大15) 2月】		6
書簡 第3号	【1926年(大15) 5月】		10
書簡 第4号	【1926年(大15) 7月】		15
書簡 第5号	【1926年(大15)11月】		20
書簡 第6号	【1927年(昭 2)顕現日後の8日目】		25
書簡 第7号	【1927年(昭 2)聖週】		30
書簡 第8号	【1927年(昭 2) 7月】		35
書簡 第9号	【1927年(昭 2)10月】		40
書簡 第10号	【1928年(昭 3) 1月】		44
書簡 第11号	【1928年(昭 3)復活前日】		48
書簡 第12号	【1928年(昭 3) 7月】		53
書簡 第13号	【1928年(昭 3)10月】		59
書簡 第14号	【1929年(昭 4) 1月】		65
書簡 第15号	【1929年(昭 4) 4月】		68
書簡 第16号	【1929年(昭 4) 7月】		73
書簡 第17号	【1929年(昭 4)11月】		79
書簡 第18号	【1930年(昭 5) 2月】		84
書簡 第19号	【英国旅行中】		90
書簡 第20号	【1931年(昭 6) 1月】		95
書簡 第21号	【1931年(昭 6)昇天前祈祷節】		100
書簡 第22号	【1931年(昭 6) 8月】		105

人名・地名・教会名索引		112
-------------	-------	-----



【バジル主教 (左)1932年 高知聖パウロで。(右)年代不詳】

書簡 第1号

【第一部】

一九二五年(大14)十一月二十二日

私の友人ご一同様

皆さんは地球の反対側まで旅する私の旅行見聞談を恐らく知りたいでしょう。そこで私も、船中、一番最初の手紙を書き始めることにしました。日本到着をもって旅行見聞記は終わることになります。

リバプール港碇泊中の「モントローズ号」の事務室は私の郵便の問題に好意をよせてくれました。しかし、お船にはK様、S様と区切った客用の郵便受けはありません。しかしお船の好意によって航海中も皆さんと文通できるのは有り難いことです。

大西洋はいつも荒れていました。日曜日の主日礼拝の他に、海員援助のためのチャリティー・コンサートの司会も頼まれました。聖職さんだからきつと募金のオネダリがうまいだろうと高く買われたものでしょう。

カナダは寒いところで、あとひと月もすれば冬になります。吹雪のなかを船はセント・ローレンス湾を横切りました。ケベックで二、三時間、上陸を許可され、日本駐在のエピファ

きました。

私は日曜日の晩、夜行列車でトロントへ行き、トロントから月曜日にまた汽車の旅をしました。トロントでたった一日を過ごし、そしてカルガリーにも行ってクライスト・チャーチの牧師となった友人にも再会しました。時間をかけてゆっくり視察したわけではありませんが、私の印象ではカナダ聖公会には活気があります。これはハッキリ云えます。トロントでは以前、日本で知りあった一カナダ人司祭とゆっくり話しあいました。私はこの人をいつか神戸へつれて帰りたいと思っています。ただしこのカナダ人司祭のことは、私が英国から呼び寄せて主教邸で私と一緒に住まわせる心算の二人の司祭とは別の話です。バンクーバー出帆前に、このカナダ人司祭から承知のハッキリした返事をもらいたいと願っていましたが、返事は来ませんでした。残念でした。(訳者註：12月8日付バジル書簡によると「彼が来神することは確実だ」とある)

その晩、聖ユダ教会で説教をしました。実は私の友人が幾多の困難を乗り越えて、この教会でのよき働きを始めたのです。そして何よりも大きな驚きであり、喜びであったのは私がロンドンの聖マリア・マグダレン教会で働いていた同じ時期に、同じロンドンのソマーズ・タウンの聖マリア教会の助任司祭であった男が、このカナダのモントリオールの聖ヨハネ教会の助任司祭として着任したばかりであったと云うことです。全く不思議なことに、カナダのどこの教会や集会に行っても、聖マリア・マグダレン教会、諸聖徒教会あるいはボストンからの昔の仲間がいて、古きよき時代の思い出話がで

土曜日の夜、バンクーバー到着。三十年以上もこの土地に住んでいる叔父が自動車で迎えに来てくれて、六、七マイルも離れている叔父の家に連れていかれました。日曜日の朝、フレイザー河の河口の大きな島にある小さな教会で聖餐を献げました。その教会のまわりの風景は全く私の故郷を思い出させてくれました。それから別の自動車でバンクーバー市に

もどり、大雨の日曜日にもかかわらず、聖パウロ教会の大会衆に説教をしました。この教会はバンクーバーの日本人伝道のためにとってもいい働きをしています。戦争終了記念の日曜日(訳者註：第一次世界大戦終了)にあたっていたため、午後には街頭行進の大行列がありました。

その晩、ある日本人教会で通訳付の説教をしました。通訳は神戸地方部から迎えられて、日本人教会でいい働きをしていた小穴師でした。小穴師はすばらしい名通訳でした。

日曜日がすんでケネデー夫妻の家に泊まりました。私が前回、日本で働いていた時からの知り合いです。ケネデー師はブリテッシュ・コロンビアに来てから日本人伝道のため十一年間働いて来ました。実は九年前、帰英途上、ここに立ち寄ったことがあります。九年間のあいだにすばらしい前進を見せていました。まさに神への感謝であり、大いに勇気づけられました。

戦争終了記念日には聖ヤコブ教会での唱詠逝去者記念聖餐を司式しました。この聖ヤコブ教会はバンクーバーにできた一番最初の教会ですが、はじめからアングロ・キャソリック主義の伝統をもっていた教会です。創立以来、いろいろありましたが、今や著しい前進を見せております。この教会で晩禱の時、神学校の学生たちに説教をしました。また晩禱前の午後のひとときを割いて、神学生たちに講演もしました。

霧にスッポリ掩われ、高い煙突から吐き出される黒煙だけが私の視野に入った唯一の神戸の風景でした。しかし翌日から晴天に恵まれ、海と山にはさまれた神戸は、どこでもいい風景を見せてくれます。

法憲法規というものは窮屈なもので、日本での「主教着座式」をすまさないければ、どんなよいことも公式にはできません。そこで神戸で二晩過ごしたあと、汽車で上京して東京に四日間滞在しました。そんなわけで自分の任地である神戸で降臨節第一主日という重要な日を迎えることはできませんでした。東京へは急行列車で十二時間かかります。しかし汽車は乗り心地よく、おまけに食堂車では洋食も注文できます。

東京では多くの旧友に会いました。中でも聖アンデレ・ミッシェンのウイリアム・ジェミル師に再会できたことは大きな喜びでした。私は一九一〇年に、この聖アンデレ・ミッシェンに派遣されたことがあります。その後、帰英した者あり、新たに着任した者ありで人事の異動はありましたが、ジェミル師のみが、ひき続いて働いて来たわけでした。

先週の月曜日はジェミル師にとって最後の日曜日でした。彼は病を得て、健康回復まで帰英するように命令されています。私はジェミル師献祭の最後の聖餐に列席し、またその後、東京の英国人教会である聖アンデレ教会で説教をしました。説教しながら、昔の日本での思い出にふけりました。い

「エンプレス・オブ・エイシャ号」乗船後のはじめの三日間、船酔いでひどい目にありました。そのお陰で乗船後の最初の日曜日に礼拝もお祈りも何の奉仕もできませんでした。船にも慣れて、聖ヒューの祝日には聖餐を献げました。本日も聖餐を献げた次第です。これは後日の話になりますが、太平洋横断の時と同様に、神様について説教もやりました。

太平洋の地図を見られるとわかりますが、アリューシャン列島と云うのが、北の方にあります。このアリューシャン列島の五マイル内の諸島に近づくだけで、出帆後二、三日かかります。それでも、北太平洋航路はバンクーバー、日本間の最短距離になります。と云うのは地図はとも角、平面で北太平洋航路は曲線の廻り道に見えますが、地球はほんとは丸いので、地球儀で見れば直線の最短航路になっていることがわかります。もう一つ不思議なことは、11月18日の水曜日を迎えたこと。グリーンニッチの正反対の子午線を航行した際、極西からいきなり極東の世界に飛び込んだのです。

【第二部】

神戸のオール・セイন্ツ司祭館にて

11月25日の水曜日の朝、神戸に入港。朝8時半の時間にかかわらず、二十名以上の出迎えがありました。運の悪い朝で、

い忘れましたが、前日、英国皇太后陛下御逝去の記念式にも参列しました。

火曜日に神戸に帰りました。水曜日は朝の9時から夕刻の6時までの一日中を、地方部(註：教区)の財務委員会で過ごしました。なんと私は、この日本語の会議で一日をつぶしたのであります。

昨日が私の「主教着座式」の日でした。聖ミカエル教会で聖餐が捧げられ、10時から始まった「着座式」はゆうに二時間かかりました。四人の他地方部の主教が列席され、九州の主教(訳者註：ミス・リーの御父君アーサー・リー師)はものすごく長い説教をしてくれました。私の「主教聖別の証」は英語、日本語でそれぞれ読まれました。そして通訳付の私の説教の出版となった時、私は簡単に説教を短くすませました。日本の国外で主教職に聖別された者がするように、私も日本聖公会への忠誠を誓いました。

まったく偶然の一致ですが、私の「着座式」の日は12月3日の聖フランシス・ザビエルの祝日にあたります。九州の主教は日本語が如何にむずかしいかについて語ったフランシス・ザビエルの言葉を引用して説教をしました。しかし私自身と、私が前にふれた一司祭以外には、私の「着座式」の日が誰の祝日にあたるか知っていた者はなかったと思います。第一、説教者の九州の主教自身がフランシス・ザビエルの言葉が、

言行録のどの部分にあるかは御存知あるまいと思います。

主教以外に二十人ばかりの聖職が式服を着て参列していましたが。礼拝後、会食がありました。この会食がまた二時間かかりました。この会食の時に、おやまあと思ったのですが、実に十二人の偉い人から歓迎の辞を受けました！それから地方部の常置委員会の集りを簡単にすませました。そのあと、女学校で一時間の歓迎の式典がありました。この会合も女生のための集まりでなく、むしろ会食に來られなかった偉い方のために持たれたようなものです。そして4時から夜の8時半まで御親切でハイカラな「主教会」があり、これに出席しました。このお陰で遠方からも、主教様達が私の「着座式」に御参列遊ばすことができたと言うものです。だがこの二日つづきの行事のお陰で、私の頭の状態が、ちとおかしくなつたと云うことを想像して下さい。

地方部のすみずみから地方の代表が神戸に來ていました。お陰で、いろいろ地方部の模様を承り、また地方部内巡回の予定もきめました。クリスマス以前の巡回予定は北の山陰地区の六日間の巡回です。山陰の1月、2月は寒いぞとおどかされたのがその理由です。

山陰巡回前後から主教邸の整備にとりかかります。私は別の機会に主教邸に関してお知らせしますが、1月までに主教邸に引越してできるかどうかが問題です。新しく塗りかえるた

書簡 第22号

一九二六年(大正)二月十三日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ經由

私の友人ご一同様

年三回の手紙の心算でしたが、もう少し回数多くお手紙を差し上げても御異存ありませんね。

何よりもまず、暮れのクリスマスにお寄せ下さった皆さんの暖かいお手紙を感謝しています。多くの方々にお返事できなかったことをお詫び申し上げます。オール・セイন্ツの狭いチャプレン室の一部屋しかないものですから万事雑然としており、その上、地方部の仕事の忙しさにかまけ、それやこれやで、クリスマス・プレゼントと一緒にお手紙が別々に出てきたりして、本当にすみませんでした。私にプレゼントを下さった方々は、途中で紛失したか、私がありがたがらないんじゃないかと思われるかも知れませんが、そんなことはありません。御好意の品々は今も続々やって來ています。1月の中頃にクリスマス・ケーキが到着しました。今週ですらクリスマス・カードが届いている有様です。

一時的にせよ満州の内乱がおさまって、シベリヤ經由の郵

めには各部屋の壁や天井を修繕しなければならず、屋根や他の所もおさなければなりません。そして最後の詰めとしてチャペルは設置しなければなりません。一体、そのチャペルは献堂式をしなければならぬかと数人の者に聞かれました。そりやもちろんチャペルは献堂しなければなりません。「聖マリア蒙告記念礼拝堂」と名称をつけたいと思っています。

さてその主教邸補修期間中オール・セイন্ツの英国人司祭ジョージ・ブライドルは親切に自分の教会に私を住まわせてくれることになっております。だが皆さんは私宛の手紙は「ザ・ファーズ、シノミヤ、コウベ、ジャパン」としてください。通常郵便や印刷刊行物なら「シベリヤ經由」と表記されたらよろしい。しかし重要な内容物の場合にはやめて下さい。ひよつとするとシベリヤの人たちが非常な興味をもって内容検閲するかも知れません。いつもそうとは限りませんが、シベリヤ經由郵便物は大概、一週間ぐらいで到着します。

今晚の郵便受付に間に合わせるために、もうこの手紙をおしまいにします。それから皆さんのお祈りをお願いするため、代祷表を同封します。四回目のコウベ会の集まりを感謝しています。また皆さんの御加禱を深謝する次第です。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

便事情はよくなったようです。1月25日にロンドンで投函された手紙が、三週間かかって昨日配達されました。普通便ならシベリヤ經由がいいと思います。

なお郵便物に関して一言申し上げれば、リネンのような小物でしたら封書便で送られた方がいいでしょう。しかし封書便には重過ぎるものでしたら、小包郵便の方がましです。とにかく船積貨物だけはやめて下さい。大抵、恐ろしいほどの通関税をとられますから。

1月25日に私の主教邸ザ・ファーズに引越しました。まだ全部修理が完成していませんので、一部しか使用できません。英本国の「白い巨象」と茶化されている主教宮殿にくらべればまだまだチャチなものです。それでも独身の私には大き過ぎます。一階には書斎、食堂、居間とチャペルと四部屋があります。居間とチャペルはまだ使っていません。ハイ・チャーチの皆さまにちよつと申しわけない次第ですが、あわててチャペルを使用する考えはありません。イースターまでの現段階では毎週、二日ないし三日しか自宅にもどれません。しかもそのうちの毎木曜日には松蔭の寄宿舎のチャペルで、そして金曜日には英国人教会でミサを献げなければなりません。今月と来月、毎金曜日から土曜日に地方巡回へ出発。毎火曜日から水曜日に自宅にもどると云う日程でつまっています。

主教邸の二階に五部屋あり、そのうち三部屋は修理完了。

言行録のどの部分にあるかは御存知あるまいと思います。

主教以外に二十人ばかりの聖職が式服を着て参列していましたが。礼拝後、会食がありました。この会食がまた二時間かかりました。この会食の時に、おやまあと思ったのですが、実に十二人の偉い人から歓迎の辞を受けました！それから地方部の常置委員会の集りを簡単にすませました。そのあと、女学校で一時間の歓迎の式典がありました。この会合も女生のための集まりでなく、むしろ会食に來られなかった偉い方のために持たれたようなものです。そして4時から夜の8時半まで御親切でハイカラな「主教会」があり、これに出席しました。このお陰で遠方からも、主教様達が私の「着座式」に御参列遊ばすことができたと言うものです。だがこの二日つづきの行事のお陰で、私の頭の状態が、ちとおかしくなつたと云うことを想像して下さい。

地方部のすみずみから地方の代表が神戸に來ていました。お陰で、いろいろ地方部の模様を承り、また地方部内巡回の予定もきめました。クリスマス以前の巡回予定は北の山陰地区の六日間の巡回です。山陰の1月、2月は寒いぞとおどかされたのがその理由です。

山陰巡回前後から主教邸の整備にとりかかります。私は別の機会に主教邸についてお知らせしますが、1月までに主教邸に引越してできるかどうかが問題です。新しく塗りかえるた

書簡 第22号

一九二六年(大正)二月十三日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ経由

私の友人ご一同様

年三回の手紙の心算でしたが、もう少し回数多くお手紙を差し上げても御異存ありませんね。

何よりもまず、暮れのクリスマスにお寄せ下さった皆さんの暖かいお手紙を感謝しています。多くの方々にお返事できなかったことをお詫び申し上げます。オール・セイন্ツの狭いチャプレン室の一部屋しかないものですから万事雑然としており、その上、地方部の仕事の忙しさにかまけ、それやこれやで、クリスマス・プレゼントと一緒にお手紙が別々に出てきたりして、本当にすみませんでした。私にプレゼントを下さった方々は、途中で紛失したか、私がありがたがらないんじゃないかと思われるかも知れませんが、そんなことはありません。御好意の品々は今も続々やって來ています。1月の中頃にクリスマス・ケーキが到着しました。今週ですらクリスマス・カードが届いている有様です。

一時的にせよ満州の内乱がおさまって、シベリヤ経由の郵

めには各部屋の壁や天井を修繕しなければならず、屋根や他の所もおさなければなりません。そして最後の詰めとしてチャペルは設置しなければなりません。一体、そのチャペルは献堂式をしなければならぬかと数人の者に聞かれました。そりやもちろんチャペルは献堂しなければなりません。「聖マリア蒙告記念礼拝堂」と名称をつけたと思っています。

さてその主教邸補修期間中オール・セイন্ツの英国人司祭ジョージ・ブライドルは親切に自分の教会に私を住まわせてくれることになっております。だが皆さんは私宛の手紙は「ザ・ファーズ、シノミヤ、コウベ、ジャパン」としてください。通常郵便や印刷刊行物なら「シベリヤ経由」と表記されたらよろしい。しかし重要な内容物の場合にはやめて下さい。ひよつとするとシベリヤの人たちが非常な興味をもって内容検閲するかも知れません。いつもそうとは限りませんが、シベリヤ経由郵便物は大概、一週間ぐらいで到着します。

今晚の郵便受付に間に合わせるために、もうこの手紙をおしまいにします。それから皆さんのお祈りをお願いするため、代祷表を同封します。四回目のコウベ会の集まりを感謝しています。また皆さんの御加禱を深謝する次第です。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

便事情はよくなったようです。1月25日にロンドンで投函された手紙が、三週間かかって昨日配達されました。普通便ならシベリヤ経由がいいと思います。

なお郵便物に関して一言申し上げれば、リネンのような小物でしたら封書便で送られた方がいいでしょう。しかし封書便には重過ぎるものでしたら、小包郵便の方がましです。とにかく船積貨物だけはやめて下さい。大抵、恐ろしいほどの通関税をとられますから。

1月25日に私の主教邸ザ・ファーズに引越しました。まだ全部修理が完成していませんので、一部しか使用できません。英本国の「白い巨象」と茶化されている主教宮殿にくらべればまだまだチャチなものです。それでも独身の私には大き過ぎます。一階には書斎、食堂、居間とチャペルと四部屋があります。居間とチャペルはまだ使っていません。ハイ・チャーチの皆さまにちよつと申しわけない次第ですが、あわててチャペルを使用する考えはありません。イースターまでの現段階では毎週、二日ないし三日しか自宅にもどれません。しかもそのうちの毎木曜日には松蔭の寄宿舎のチャペルで、そして金曜日には英国人教会でミサを献げなければなりません。今月と来月、毎金曜日から土曜日に地方巡回へ出発。毎火曜日から水曜日に自宅にもどると云う日程でつまっています。

主教邸の二階に五部屋あり、そのうち三部屋は修理完了。

一度に二人の司祭をお客として迎えることができました。そのうちの一人の司祭はわざわざ八百キロの遠方から、一年ぶりの秘密告悔の目的で来神しました！

主教邸には庭があります。あまり広くはないんですが樹木を数本植えてあります。春になるとそれは美しい風景を見せてくれます。特にすばらしいのが主教邸のベランダをカバーしてくれる古い藤の木です。とにかく庭の美しさを私はエンジョイしていますが、私の目に映る楽しみ以上にバツハの五十八番、八十四番を聴く喜びが私にあります。皆さんも意外に思われるでしょう。何事も望みのままにならないと云うことは、これは非常によいことです。

私自身の活動にいろいろ不便はありましたが、英国人司祭館に二ヶ月滞在したことはほんとによかったと思います。嬉しいことに英国人教会のいろんな人と知り合いになりました。イースターがすんで英国人チャプレンは半年間の休暇をとり、猛スピードでカナダ経由で帰英しました。それでも彼にとつて、5月から8月まで四ヶ月しか英国に滞在できません。私はとにかく聖マリア・マグダレン教会を見てこいと、一応、彼に云いました。このチャプレンは以前、韓国で働いていました。だから韓国ミッションについてオール・セインツ教会で一度説教をしたはずですが。

6月から英国人教会のために働いてくれる聖職がいますが、

て下さったわけですが、私どもにとつては悲しいできごとでした。どうか皆さんも、健気な奥様のために祈ってあげて下さい。船員協会本部がよき後継司祭を派遣してくれる日まで、一ヶ月やそこら、神戸で夫の意志を継いで頑張ってください。顕現日の週に神戸地方部のS・P・G宣教師団の年度総会を開きました。全部で十四名のS・P・G系の宣教師が活動しています。しかしその十四名のうち、男子学校の助教師であつたミス・ヒューズは退職帰国の予定で、他にも数名が休暇で離日します。まあ何とか一年以内に帰日してもらいたいと願つてはいますが！しかし嬉しいことに補充の面も実現可能です。英国より神戸着任途上で、パンクーパーからブリティッシュ・コロンビヤ州のビクトリヤまでわざわざ私がくどきに行つたミス・メーベル・エッセンが松蔭女学校教師として、今週中にも神戸に着任します。

復活後第一主日まではミス・ヒューズの後継者としてミス・エバ・スミスが男子学校に着任するはずですが、もしS・P・Gが年間給与を保証してくれば、その男子学校に一年契約で、ウオーカー先生が男子教師として来てくれるはずですが。そして有り難いことに、老齢でちと疲労気味ですが、ミス・アリス・パーカーが二年間の約束で、初夏の頃に神戸に帰ってくれます。

今年の12月のクリスマス頃には私と一緒に主教邸に起居を

それまではイースターから三位一体主日までの日曜日には、私が直接英国人教会で礼拝司式をしなければなりません。恐らく皆さんはブラック・ホーキンス神父のことを覚えておられると思いますが、英国人チャプレン不在の半年間、奉仕をしようと申し出てくれました。しかし、健康上、医者は駄目だと云ったそうです。今日、私は彼からエンジェルバーグの雪景色の中の彼自身とベキングガム神父の写真の絵葉書を受け取りました。今の司祭団と、かつての司祭団とを強く結びつける意味でベキングガム神父の存在は大きいものです。貴教会の盛大なニュースを嬉しく拝読しました。クリスマスの深夜ミサに私も出席したかったと思いました。

今まで以上に英国人の働きに私を強く結びつけたもう一つの事件がもちあがりました。それはアルフレッド・ガーニー・ゴールドスミス司祭の急逝です。この人はオーストラリヤでいい働きをしていましたが、昨年4月に神戸に着任しました。退職の年齢にかかわらず、船員伝道協会（ミッション・ツリー・シームズ）の本部よりの緊急要請に応じ神戸港で働きを始めたばかりでした。

ある日曜日、早朝ミサの司式に行く支度をしていて心臓マヒで召されたわけです。この人は神戸で相当な成果ある働きを軌道にのせていました。それこそ善玉にふさわしく神の栄光をあらわす召されかたでした。神様は彼を平安にいこわせ

ともにしてくれる若い司祭があります。これは素晴らしいニュースです。この司祭、つまりジョージ・ノエル・ストロング司祭は多分、この夏、英国出発直前に皆さんにお会いすると思います。どうか皆さんも、もう一人、私と起居とともにしてくれる聖職が与えられるように真剣に祈って下さい。私と三人で、この主教邸で修道生活ができるようになれば、それこそ、この主教邸は神戸地方部の信仰と生活の中心になります。実際、人材確保と云うものはむずかしいものです。しかし信仰をもって祈り続けていることが、どんなに私どもを助けてくれるかは、やがて、わかつて頂けると思いますが。この神戸地方部には難問題がいろいろあります。しかし難問題処理にはどうしても主の御名によって祈る祈りの力がどれほど必要かは、皆さんにどの程度わかってもらっているか、私にはわかりませんが！

それからどうもあまりパツとした話ではありませんが、うちの地方部の最年長の司祭が来年、退職した暁には、後継者として迎えたいと思つていたカナダのトロントの一司祭から依然として、来るとも来ないとも何の手紙もありません。

しかしいいニュースもあります。昨年、S・P・Gのもとで訓練されたミス・ドリス・パーバーが神戸に配置転換されることになりました。遅くともこの晩秋にはパーバーさんは来神してくれます。そうすると、女性に関するかぎりは、私の

構想の婦人宣教師団は充実します。私もS・P・Gに現在、訓練中の人材も予算増額して神戸にまわしてくれと頼みました。しかしこれはあまりあてにならないでしょう。

皆さんもあまり長い手紙は嫌いでしょう。それで私の地方巡錫やちょっとした体験については次回の手紙に書くことにしましょう。しかしこれだけはどうか覚えて下さい。私は堅信式を二回しました。またイースター前に三度、堅信式をすることになっています。また来たる聖職按手節には日本人執事のなかで、秋田哲三師を司祭職に叙任する予定です。

もう一つ申し上げますが、私が日本へ向けて出発する頃、すでに三つ、四つの伝道所から教会設立の要望がきていました。もちろん、英国にあるような大きな教会でなく、ごく小さな木造建築の教会の意味です。しかし金の工面で御配慮がいただける、これは助かります。呉、姫路、須磨では既に建築計画もできています。

日本海軍の基地の一つである「呉」では教員が教会建築の意欲を燃やしています。呉の伝道はC・M・Sによって支持され、土地も購入しました。今月中に建築も進められます。他の二ヶ所はS・P・Gの伝道所で、「姫路」でも前から教会の土地がありました。今や建築計画が討議されています。

「須磨」は神戸の西側の郊外地区で、ここは新しい伝道の中心地であり、非常に熱心に教会は活動しています。現在、一

書簡 第30号

一九二六年(大正)五月一〇日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ経由

私の友人ご同様

大変な産業危機のただなかにある故国の皆さんをおぼえて、一日に五回も六回も、心よりお祈りしながらこの手紙を書きはじめました。この手紙が皆さんのお手許に届くには一ヶ月以上かかります。その間にいろんなことが起るでしょうから、この問題をあれこれ書くのは無駄なことだと思います。私はただお祈りをしております。私は、このたび来日してみても、皆さんの祈りが私の心の大きな支えになっていることを知り、英国のためにも一生懸命お祈りしているのです。

このまえ、後援会の皆さんにお手紙を書いてからというもの、沢山のお返事をいただきました。有難うございました。私にお手紙を下さるときには、どんなことでも結構ですから書いて下さい。「多分、これについては、皆が書くだろうから自分はやめよう」と、皆さんが思われると結局私はそのことを全く知らないということになります。どうぞ、どんなことでも書いて下さるようお願いします。

軒の小さい家を借りています。日本人の若い執事(訳者註: 八代斌助師のこと)が住んでいます。その借家の二階で礼拝が献げられています。

三週間前に堅信式で須磨に行きましたが、急な階段をあがった二階で、満堂の会衆で、小さな祭壇のところまで行くのに、会衆の頭を踏んでいかななくてはならないかと思いました。須磨の教会は土地購入のために借金を契約しましたが、とりあえず、もっと大きな家を借りることになります。

一週間前、初めて地方巡錫に出て、四国の東部に行くのに瀬戸内海を船の長旅で出かけました。本日、この同じ島の西南部に、もっと長い船旅で行かなくてはなりません。幸い今日は静かな海ですが、寒くてもう一回風邪の引きなおしをしようです。

1月27日の皆さんの集会はもうすぐやって来ますが、私も祈りのうちに会のことを覚えます。御加禱を願う代禱表はすでに送りました。この代禱表が皆さんの祈りに役立つと聞いて嬉しく思っています。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

聖マリヤ・マグダレン教会での大斎、聖週、イースターは素晴らしいものであったろうと思います。イースターの日の海外伝道のための献金は素晴らしいものと思っています。神戸地方部の基金の援助をして下さった方々に、心からお礼申し上げます。これは特別の使途、または通常の使途のいずれにおいても、私が自由に使うことのできないものです。

私は英国から、もう一人司祭を迎えたいという望みをまだ捨ててはおりません。もし、この司祭がみつければ、そのために、私の手許にある準備金以外に、支度金と日本までの旅費として、さらに六〇ポンドが必要になります。もしこの特別出金のためにどなたかが援助して下さいるか、皆さんがそうして下さいなら大変助かると思ってこの点にふれてみました。昨秋、来日時に私がトロントで会った司祭は、いま来日の途についております。八月下旬には神戸に到着するはずです。この司祭は、ウイリアム・ヘンリー・ゲイルという人ですが、このニュースは皆さんもきくと喜んで下さるものとおもっています。この前の手紙でお知らせしましたように、彼は一年後に引退する司祭の後任になることになっております。結婚しており、S・P・Gの正式メンバーになる予定です。

皆さんに引き続き祈ってほしいことがもう二つあります。その一つは、今は前任者の未亡人がミッシェン全体を取りしきって、健気な働きをしておられるものの、いつまでもこの

ままにしておくことはできません。かといって、後任者も未定です。そこで、神戸港のミッシン・ツー・シーメンで働く人が一日も早く与えられるようにと祈っていたきたいのです。

もう一つの話は、エピファニー修女会の日本での働きに近い将来結論を出したいのですが、そのための知恵と聖霊の導きを祈っていたきたいということです。

私は十六年前に、東京の聖ヒルダ・ミッシンを通じてこの修女会との関係ができました。以来、聖教主病院とエピファニー修女会とはとても親しい交わりをもっております。私が出さなければならぬ結論は非常に大事なことです。私にそれだけに、急いではないとも思っております。修女さん方は日本の教会のためにたいへん大きな働きをしてくれるものと思います。

私は多くの皆さんが定期地方部会のために聖霊の導きを求めてお祈り下さったものと確信しております。皆さん方は、教会関係の新聞で、この時討議したことをお読みになったと思います。4月9日付けのチャーチ・タイムスが送られてきました。そのなかに「プロテスタント・ミッシン間の協力」に関する問題と、全宣教師大会報告書のなかに「いまとるべき態度」について話し合われたとありますが、これが、この前の地方部会で熱心に語り合ったことがらでした。意見百出

を想像されると思いますし、また「春の花に歓声をあげても、今は何にもならない」、宣教師とは関係がないと云われそうだからです。しかし、本当はそうではないのです。私にはストロング司祭が与えられましたし、もう一人の司祭も私とともに生活することになっていきます(私の願ひですが)。本人もここに二晩泊まりました。心が依怙地になったり、素直にない聖職のためにはリトリートのために、都心のこのように美しいところは理想的なのです。主教邸とその庭園が、主と私どもの出会いの場となり、魂の疲れを癒すところになるようお祈り下さい。

委員会その他の集まりなど、誰にとっても大事なこともここで行なえます。

先週の土曜日、地方部(註:教区)の婦人会大会では、七〇余名の主席者は午後の会議、そのあとのお茶の時間を着いひざしをさけて木陰でいました。昇天日の午後、在神の英国人の皆さんと庭でひとときを過ごしましたが、「故国」にいるようでした。また、次の土曜日には、神戸の日本人の教会の皆さんがここでバザーをします。このように都心の主教邸は私どもの働きにとっても役立っております。

英国人のチャプレンのブライドル司祭が休暇中は、私が彼の預かっている会衆の責任者です。6月から8月まで、彼は私に山ほどの仕事を依頼しております。その前は、聖霊降臨

で結論が出ず、結局、三年後に開催される定期地方部会までの懸案にするということになりました。英国にいる時、折にふれて話しましたように、英国カトリック教会が、今のまま自教会だけしか援助をしないのであれば、この種の問題はますます大きくなるだろうと思います。皆さんの場合はそうではなくて、神戸地方部のために一生懸命尽くして下さっており、心から感謝しております。

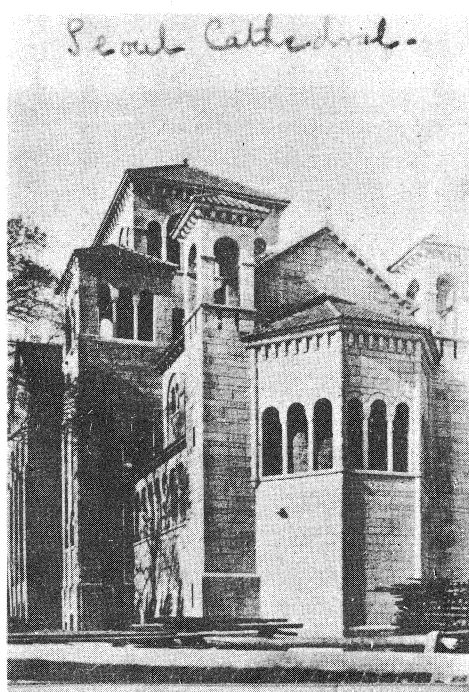
もっと身の回りのことに話題をかえましょう。聖マリヤ蒙告記念礼拝堂での初めての聖餐式執行についてはすでに書いたとおりです。まだ何も整ってはおりませんが、かねてからの念願どおり処女聖マリヤ蒙告日に聖餐を捧げました。まず祭壇の飾り付けをし、カーテンをつけ、最後に入堂路にカーペット(特製です)を敷きました。これは神戸の英国人教会の二人の祭壇奉仕者から贈られたものです。以前、この礼拝堂と主教邸の写真を送ったことがありますから、多くの方はごらんになったものと思います。

つばき、もくれん、桃や桜の花、クロッカス、水仙、忘れな草、においあらせいとう、フリージア、とりかぶと、すみれ、しゃくやく、けし、藤、バラ、つるばらとまっすぐにのびた立木、花盛りのいちばつ、それに雑草、主教邸の庭の色彩あふれる春の風景は私が思っていたもの以上でした。この話はもうやめましょう。これ以上続けられれば、皆さんは「天皇」

節まで英国人会衆のための礼拝は私が守ることになっているのは、皆さんよくご存じのとおりです。

定期地方部会、主教会、京都の主教按手式以外に、いま申し上げてきたようなことが私の仕事です。イースター以後、私が神戸を離れたことといえば、韓国の首都・京城の大聖堂聖別のため韓国を訪れた時ぐらいのものです。この大聖堂はとても立派で、極東のキリスト教関係の建物では最高のものと思います。申し分のないカトリック的雰囲気のおかげで数日疲れを癒すことができ、そのうえ、この地で働く主の同労者ほとんどと面識があるという点でも、韓国を訪れることができたのは嬉しいことでした。

京城では懐かしい日本人信者の方々にも会いました。この



【京城大聖堂】

方々のために、歌ミサを執り行なったり、説教をしたり、サブ・ディーコンの按手をしたりもしました。韓国の主教は病気で、かなり良くなっておられますが、今月中に英国に帰国するようにとの命令を受けており、これ以上の聖務の遂行は不可能です。それで、私は6月の下旬に再度韓国に渡ることになりました。いうまでもなく私は韓国語はわかりませんので、按手式は日本語で執り行なうつもりです。韓国の学校の授業はすべて日本語ですから、若いひとたちは日本語はペラペラです。

私は来日以来、イースターまでの四ヶ月の間に地方部内の主な伝道所をすべて巡回できるような予定を組みました。旅は、汽車旅行が約八〇〇キロ、船旅行が約三八〇キロというものでした。最も遠い船旅は、四国北西部の町「長浜」行きでした(私が述べている場所は、四枚目の地図にあります)。金曜日の夜8時に、小さな汽船で神戸港をでて、翌日の土曜日の夕方5時に長浜港に入港しました。二十一時間かかったわけです。そのほとんどは瀬戸内海の航海でした。瀬戸内海はとても美しいところなのですが、この時は吹き降りのためかとてもよごれておりました。船にはベッドどころか寝棚すらないので、床の上で寝る広い部屋だけしかありませんでした。

私はボーイに「ここで寝なければならぬのなら私は死

ました。

私が初めて巡回をしたところではどこでも、皆さんは床の上に坐り、真面目くさって挨拶をし、日本茶を飲むという形で歓迎してくれましたが、ここでも晩禱のあと、そんな形の「歓迎会」をしてくれました。

月曜日、私は公営バスに乗り、かたほうはそびえ立つ岸壁、反対側は落ち込みそうな、しかも何キロも続く曲がりくねった道を、いくつもの山越えをして「松山」に行きました。松山には僅かですが信者がおります。途中、バス停にとまった時間も入れて、大洲から松山まで三時間かかりました。この道はどちらかといえば、ぞっとするようなものでしたが、自然の美しさはありました。その夜、高浜港から素晴らしい汽船に乗り、火曜日の朝、帰神しました。またの機会にその他の地方の巡回について書きましょう。

皆さんがこの手紙をお読みになるよりもずっと前に、英国の異常事態が素晴らしい解決をもって終っているようにとお祈りしております。

申し上げるまでもありませんが、7月22日には特別に聖マリア・マグダレン教会のことをおぼえて祈ります。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル



【スコット師夫妻の送別会。徳島で1927年2月】

でしよう。デッキで寝てはいけなかつたねました。すると彼は真面目くさって「デッキで寝ればまちがいに死んでしまいますよ」といいました。云うまでもありませんが、この会話はすべて日本語でした。日本人のことをよく知っておられるかたはご存じのように、かれらは本当に夜を恐れます。ですから、夜はたいがい戸をしめてしまいます。ともあれ、この時のボーイはとても親切で、彼自身の部屋だったと確信しておりますが、一、五フット巾のベンチが備えつてある小さな部屋を提供してくれました。私はこの部屋で船窓を開けたままで一夜をあかしました。

船は、途中あちこちの港に寄港し、長浜の港に入った時は海上には風があり波や高く、上陸するために乗り換える小舟の出迎えがあるのかないのか心配でした。私は迎える小舟に、舟の揺れに合わせてうまく乗り移りましたが、もう一人の下船客は、年寄りでしたが、私よりずっと身軽に乗り移られました。

予定より一時間遅れましたが、ここに住んでおられる歯医者さんご夫妻に按手をしました。四国にはあちこち港がありますが、そんな中で、教会があるのは中都市「大洲」だけです。ここに行くのに、歯医者さん夫妻の按手のあと最終便の汽車に乗りました。小さな汽車で沢山の人は乗れそうにもありませんでした。日曜日の朝、聖餐式前にここでも按手をし

書簡 第4号

一九二六年(大正)七月二十九日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ経由

私の友人へ一同様

私はまだ休暇をとっておりません。そのわけはこの手紙の日付けをごらんになればおわかりのように、今日は聖マリヤ・マグダレンの日からまだ八日目であり、過去四年間に学んだ良い習慣を守っているからなのです。

私はまだですが、他の宣教師たちはみな休暇に入っております。私は来週休暇を取ろうと思っております。日本の7月の湿度の高い暑さにはまったく参っておりません。室内の寒暖計が夜間ですら25度を下らなくなつてから二週間になります。

マンスタール広場でのお祭りは盛大であつたろうと思っております。6月28日には、神戸後援会が盛大に開かれたそうです。今週と先週頂いたお手紙から知りました。当地からそちらに行きました三人の司祭からまず最初にこの集いについて知らせるであらうと待っております。

ストロング司祭は、私が神戸に帰る8月下旬頃神戸に帰るものと思います。そうすれば主教邸での一人ぼっちの生活は

曜日10月3日、世界の諸教会はアッシジの聖フランシス七百年を記念する晩禱をしますが、その日私は、九州・熊本の癩病院で信徒接手することになっております。

私はよその手伝いをするために、10月一杯神戸地方部を留守にします。このことと関連して皆さんにぜひ考えて頂きたいことがあります。私が来神する以前の神戸地方部のことです。私の来神前二年半、他地方部の主教がここを助けて下さいました。このことは忘れてはなりません。特に南東京のヘイズレット主教のことは忘れてはなりません。三地方部を管理し、その上、大地震により一番大きな被害をうけたご自身の地方部復興に日夜努力されました。このヘイズレット主教のことは、常に覚えておいて頂きたいのです。

以前に代禱を求めました目下建築中の三教会、これについてこの前の手紙で触れませんでした。S・P・G系の伝道所として二ヶ所の建物は間もなく完成します。二ヶ所とも教会と牧師館が備えられています。

「姫路」は、神戸の西、五十六キロのところにある大きな地方都市です。ここは永年にわたり、チャールズ・フォックスレイ司祭が定住牧師として奉仕しておりました。かれは、ケッテウエル師が一年の休暇で帰国したおり神戸にきて、以来神戸におります。その間、東神戸の教会と姫路の教会の管理司祭を兼務しております。

終ります。とはいふものの、もう一人の司祭が来日し私と起居を共にし、日本語を学ぶという知らせの来るのを一日千秋の思いで待つております。というのは、ご存じのように私はよく旅に出ます。そんな時、ストロング司祭だけでは、かつての私以上に淋しさを感じると思うからです。

6月に韓国に行ったとき、三週間ほど滞在しました。あちらでは信徒接手以外に、施洗者聖ヨハネ誕生日に一人の韓国人執事の司祭按手式を執り行ないました。このことは、聖職按手節の9月19日に執事按手をしたと思つて徳島の小林貞治郎伝道師のために皆さんに代禱をお願いしていることを思いださせました。幸いにも神様は私どもが間違つた発言をしても許して下さいと思いますが、日本人の名前は、発音しにくく、長いので申し訳なく思っております。

神戸地方部(註：教区)の半分の宣教師と、在日英国人全部は目下休暇中です。韓国の主教と同じように、南東京、中部九州の主教はいま英国におられます。南東京や中部の主教の留守中の必要なことは、日本人主教が行っておりますので、私の働きにはすこしも負担になっておりません。

私は10月に、韓国へ接手に行きますが、そのまえに九州でお手伝いをする約束をしております。韓国でも九州でもリトリートを考えております。

ついでに、ちょっとしたいいお知らせをしますと、次の日

そんなことから私は、月に一、二度は姫路に出かけております。そのうえ、フォックスレイ司祭はミッシェンの会計の仕事もしてくれております。これは11月にケッテウエル師が帰任するまで続けられるはずで。

聖職按手節に接手した日本人司祭は、いま東神戸の教会の管理をしております。また須磨の教会の管理者ウエストン師は休暇帰国中ですが、帰任すれば、フォックスレイ師が須磨(西神戸)に赴任することになっております。もし、こういったことが混乱を生ぜしめるならば申し訳ないのですが、それにもかかわらずお知らせしたのは、持ち胸が少ないときの休暇というものは、伝道活動をとて難しくするということを皆さんに知っていただきたいということからです。

カナダ人司祭ウイリアム・ゲイル師が来日すれば、彼は姫路に居住するようになり、フォックスレイ師が9月から姫路の管理を解かれることになっております。

姫路には宣教師館と古い日本家屋がありました。この日本家屋には日本人の伝道者が住んでいて、一部屋で礼拝が守られておりました。しかし、この家屋が非常に古くなり、危険になりましたので使われなくなり、フォックスレイ師が神戸にやつてこられたのを機に、伝道師の方が宣教師館に移り、そこで礼拝が守られるようになりました。

今年、古い日本家屋は取り壊され、目下、小さな礼拝堂と



【姫路頭栄教会の会衆、中央に牧野与三郎師。1938年頃】

別棟の牧師館とを建築中です。

私は、復活後の第二主日にこの姫路の定礎式に行ってきた。礼拝堂と牧師館とは9月下旬に完成するものと思っています。この教会は「姫路頭栄教会」との名称にしたいと思っています。この新任地で新しい働きを始められるゲイル師の上に神様の御祝福をお祈りいただきたいのです。

またトルロ・シスターズと聖救主病院の患者と職員のために御加禱いただければと願っております。

もう一つの新しい教会は、神戸の西、「須磨」(SOMO)と発音します)にあるものです。この牧師館は私たちのものではなくて借家です。そしてここから少し離れたところに日本人執事のために、二、三年の間、小さな家を借りております。そしてここで礼拝をおこなっております。

この信者数はそんなに多くはありませんが、求道者が多く、冬に按手に行ったときには、小さな祭壇に近づくのに会衆の頭の上を歩いているようでした。加えて、最近須磨付近は急速に発展し、どんどん建物がたちつつあり、早くここに土地を購入する必要があります。こうして今では土地も購入し建物もできつつあります。

聖餐感謝日の次の日曜日に定礎式を行いました。姫路の場合、すでにお金はほとんど集まっておりますが、須磨の場合は準備金は僅かしかありません。以前借家を借りるときにミ

ッションのお金を借りました。これがまだ当分返済できそうにないのに、ある方が損得抜きで土地購入代金を貸して下さいました。とはいえ、返済完了までにはまだかなりの年数がかかるものと思っております。

この教会は「聖ヨハネ教会」との名称にしたいと思っておりますが、8月29日の聖ヨハネの祝日には間にあわないのではと心配しております。

聖ヨハネ教会は、階上が礼拝堂になっている二階建ての建物で、一階は幼稚園及びいろんな形の集会に使われることになっております。執事の新しい家はそのすぐそばにあります。第三は「呉」に関してです。この宣教師はC・M・S派遣です。呉は神戸の西方三二〇キロの所にあり、牧師館の建築がちょうど終わったところです。でも教会堂の建築がいつ始まるのか、そのめどはついておりません。

この第三の場合、私の主教基金から五〇ポンド拠出することにしております。神戸後援会のどんな方々が私どもに捧げて下さるかとはかくとして、いまだに前主教の友人たちから少額とはいえお金を送られてきております。このことには心から感謝しております。

聖マリヤ・マグダレン教会の少女と少年グループが昇天教会の場合と同じように須磨の幼稚園も助けてくれております。始まったばかりのもうひとつの地方部内の働きについて、

皆さんにご報告しましょう。

これは、神戸から四三〇キロほどのところ、本州の最西端にある「下関」のことです。この下関には韓国航路の母港があります。ここにはかつて伝道者があり、何年も前には家も借りておりました。でも今はそんなものは何もありません。しかし、その時以来、少人数ながら熱心なクリスチャンがここに移住してきております。かれらは、自分たちのためには何もしてくれないのかといっております。ここでの働きは多分、月に二回以上は聖餐にあずかることはできないと思われるほど孤独なものと思われまます。それを承知の上で、S・P・G派遣の宣教師であるミス・オリブ・ケニオンが、私が行ってもいいですよと申し出てくれました。

そこで、私も小さな借家を一軒借りました。彼女は二ヶ月前に赴任して行きました。そして、ときたまの聖餐のために私、または他の司祭の訪問を受けつつ、この家で日曜礼拝をし、日曜学校その他の集会を始めました。6月、韓国に行く途中、日曜日に私はここに立ち寄りしました。その時、ここには一〇人の陪餐者がいました。また一人の男性を洗礼志願者として受け入れました。

下関についてもうひとつお知らせしたいことがあります。それは、ここに大勢の韓国人がおり、その関係からか、韓国ミッションは親切にも下関に在住できるベテラン宣教師を派

遣してくれたということであり、下関に住んでいる韓国人に對する私どもの働きがどんなものになるか注目しているということ。この韓国から派遣された宣教師の名はモーセ・ホンです。ようするに下関での出来事はちよつとした珍事といえましようが、皆さんの御加禱をお願いします。

これに関連して、最後に大事なことを書いておきます。

今のところ俸給は出ませんし、働き手は不足しておりますが、下関でも日本人の働き手がほしいのです。聖霊が伝道者として訓練を受けた日本人青年を召し、その青年がそれに応えるよう繰り返し繰り返しお祈り下さるようお願いしたいのです。この前の私の手紙をお読み下さってからのというもの、このためにお祈りして下さいというものと思います。その意味で志願者が一人でたということは、私同様に皆さんも喜んで下さるものと思います。

今、会社でかなりの月給をとっている一人の青年が、その仕事をやめ、訓練を受けようという気持ちになっております。

もうかなり書きましたので、彼については次の機会にまわします。とはいえ、8月下旬にはこの青年は今の会社をやめ、その後は来春まで実践経験を積み、かつ、学校卒業以来忘れてしまっている科目を復習することになっております。そして、その後三年間神学校に行くということだけはお知らせしておきます。どうぞ、いま急を要する日本人伝道に召される

書簡

第50号

一九二六年(大15)諸聖徒日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ経由

私の友人ご一同様

三週間以上神戸を離れていましたが、先日帰ってきました。別の後援会への手紙を書いたその時です。

今月中、私は四千キロほどの旅行をしてきました。これよりさらに千六百キロ多かった8月よりは距離的には短いわけですが、そういうわけで今ではすっかり汽車に慣れたのが当然といわなければなりません。多分、皆さんのうちにご存知の方もおられると思いますが、日本では鉄道は幹線も支線も等しく狭軌方式で建設されております。そのことが今になってたいへん悔やまれておりますが、時すでに遅しというところで、莫大な出費と不便さは想像以上のです。車中だけでなく車高においても汽車は非常に小型だと皆さんもお考えになるでしょう。しかし、人間の方もまた比較的小さいので、私には寝台等も大変に短く、窮屈ですが、この国の人々にはそれほどでもないわけです。

日本人はあらゆる面で非常に礼儀正しいのですが、汽車の

者が他にもありますようお祈り下さい。

皆さんのなかの多くの方は、イタリヤのジェノアで、現在チャブレンをしておりますフレドリック・ワッツ司祭が、神戸のミッシェン・ツー・シーメンのチャブレンに任命されたことをご存じのことと思います。彼は秋には来日することになっております。

炭坑問題がデッドロックにのりあげ、英国は大変お困りの様子、心よりご同情申し上げます。私はいつもこの問題についてお祈りしております。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バ ジル

【追伸】 この手紙はまだ投函しておりませんので、いま私が一生懸命に耐えようとしている悲しみを知っていただきたいのです。今、休暇で帰国途上のドロシイ・ケイスさんが、モントリオールで急死されたという電報をカナダから受け取りました。この先生は、女学校の宣教師の中では主任格の人であり、神戸駅で沢山の女学生たちとともに私も見送りましたが、それは僅か四週間前のことでした。

主が、彼女に永遠の安息を与え、絶えざるみ光をもって照らしたまわんことを。

中では自己本位になりがちで、例えば他人が座席を探しているのに、自分たちや荷物で幾人分もの座席を占拠しようとするのが如きです。しかし、これは日本人に限ったことでないことは私も知っております。列車の混雑ぶりはひどいもので、近郊列車も、多くの遠距離列車も変わりありません。神戸は最も人口密度の高い地域の西端に位置しており、神戸と大阪の市街地間には、省線のほかに、二つの高速電車系統があり複線の鉄路が今複々線に建設されています。そのほかに、市街電車軌道が通ずる広い新自動車道が建設されております。しかもこれらすべてが混雑しているのです。

8月中のこの様な旅行事情は書くより想像する方がよいようです。車内では一度ならず33度を越えました。30度を越えることは普通で、実に蒸し暑く、従って車窓は全開され、安っぽい粗悪なアイスクリームがいろいろな種類の冷たい飲料水とともに、主だった駅毎に販売されております。

軌道巾が狭いために英国の急行列車のようにはいきません。しかし、時間だけは正確に運転されております。雨期には度々洪水がありますが、十分な警備が危険箇所に対してとられているので、9月にこの地方部内で起ったようなひどい事故は非常にめずらしいことです。

8月に私が訪ねた所は実にすばらしいところでした。山に囲まれた標高三千フィートの高原にあって日本人と外国人双

方のための有名な避暑地の一つです。私はそこで8月中の日曜日、英語の晩禱で説教を受け持ちました。その間の一週間は別の宣教師達の小グループの静想日(quiet day)を指導するために出かけました。その場所は北方に数百キロの所で、直径が数キロで中心部の水深が千二百フィートもある大きな湖のほとりにあって、彼らは夏の避暑中に用いるために、小川のほとりの林の中にある静かな空地に、小さなチャペルを建てております。ただそこにはまだクリスチャンの日本人はおりません。

按手式その他の目的で地方部内外を旅行する時は、大体においてそこに居住する宣教師宅か日本人教役者の家で宿泊することにしています。そのほかに今月は仕事の都合で離れた町に住む英国人(彼はその町の高校で英語の教師をしています)の家で泊まることにしております。しかし、時には日本の旅館に宿泊することもあります。日本の旅館では客は各自の部屋を与えられ、その床の上で友人等に面会したり、食事をとったり、宿泊することは皆さんもご承知のことと思います。

ところで最近私が滞在した一つの町で、偶然に起った一つの啓蒙的な事件についてお話ししましょう。

その町では私どもの教会の宣教活動のほかに幾つかのアメリカの新教の教会と、強力なローマカトリック教会があるこ

山口は、神戸地方部の十県のうち最西端に位置する県の県庁所在地で、下関もこの山口県にあります。ケニヨン先生もこの山口市に幾人かの信者さんが居住しているので時々訪問をしてもらえますが、下関から汽車で八十キロ以上の距離があります。最近「下関」での私どもの新しい働きに一つの現実的に困難な事態が生じております。その司祭が不在になつており、その影響のほこ先がケニヨン先生の肩に負わされているのです。下関が丁度三地方部を結ぶ港となっている関係で最近、九州と韓国への旅行で三度そこを通りましたので、その都度、私は僅かながら何らかの助けができたと思っております。一日も早く正常な軌道に乗ってほしいと望んでおりますが、どうかそこの働きと教役者のために熱心に祈り続けていただきたいと思います。

29日夜の日曜日の晩禱説教を最後にして、8月の私のそこでの勤めをおえました。そして月曜日早朝帰途につき、その日の昼すぎに東京の英国チャプレン館に着きました。予定より遅れて着きましたので、チャプレンは(キャノン・フォスターという方でランカシャー時代の古い友人です)すでにカナダから船で来日したストロング司祭とゲイル師一家を出迎えに横浜に出かけた後でした。事前に何の打合せもなかったのに、ストロング司祭とゲイル師一家が偶然にも同じ船で到着するということは本当に不思議な一致でした。私が到着し

とを私はたまたま知りました。旅館の二階の部屋に案内された時、私は十字架のついた小さい尖塔が数街路向うに屋根越しに見えるのに気付いたものですから、私はその女中さんに、彼女がそれをキリスト教会だと当然答えるだろうと予想して、それについてたずねてみたのです。ところが彼女は全然知らないのです。それだけでなく、その尖塔や十字架に対して何の関心も示そうとはしなかったのです。つまり、要点はこれです。都会であろうが田舎であろうが、このようにキリスト教に直接的な接触を持つとしない、そうしようとする関心も意欲も持たない人々が多くこの国にいるということなのです。どうか、主を知らないこれら一般民衆のために、そしてこのような人々の只中で、キリスト者として生きようとしている少数のクリスチャンのために御加禱をお願いしたいと思います。

一方、先月、聖フランシスコ・ザビエルの国家的記念碑の除幕式が日本でのザビエルのゆかりの地、「山口市」の郊外でありました。スピーチが現知事と前知事によって述べられ、首相や外相からの祝辞がそれぞれ代読されました。ところがそこには宗教的儀式は全くなく、その祝辞もスピーチもザビエルがキリスト教宣教師であったことには一応触れたものの、おもにヨーロッパの科学、数学の紹介者であったことに強調点を置いておりました。

て間もなく、彼等もキャノン・フォスターの家に帰ってきました。ただお茶と夕食を共にしたに過ぎませんでした。私どもにとつて、その日は実に楽しい日でありました。その後、彼等は船で神戸に向かうために帰って行き、一方私は夜行列車で帰りました。その二日後に神戸に彼等を迎えた次第です。ストロング司祭(彼は6月の会合で私に手紙を送って下さった方々の素晴らしい名前リストを持って来てくれました)は引越も完了し落ち着かれました。彼は今、週五日、一日三時間日本語学校に通っており、言語の初期の段階で苦闘中で、沢山「宿題」をかかえております。それは私に日本に来た頃の日々を思い起こさせます。

彼はまたタイプライターを購入して、礼拝堂の細かい管理と共にその方面の大きな助けになってくれています。今週彼は、故国の三人の仲の良い友達が私達のために送ってくれた三枚の美しいメデイチの版画をチャペルに掲げてくれました。また私達は、ホックストーンにいる仲の良い友達から、クルーデンス・テーブルの上に置くクルエットの代わりになるものを手に入れました。

私達は後援会の第一回目の年次報告を受理したところです。私の家を住めるようにして下さったり、ストロング司祭が来日できるようにして下さったり(誰かが私と起居をとむにするということが大変なものです)あるいはもう一人の司祭を受

け入れられるようにと必要なお金を送って下さったりして、皆さんが神戸のために下さったことは、どれほど感謝していいかわからないほどです。

10月14日の皆さんの会合で、ワラスイのウイリアム・ワイアット・ウイルソン司祭について凡てのことをお聞きになったと思います。彼がクリスマスの直後英国をたつというのは、噂であろうと思いますが、彼がいつ来られるか、私がまだ知らないことを皆さんは既に御存じでしょう。(訳者註：不幸にして本国での災難の結果、ウイルソン司祭は英国にいることになった)

皆さんはまた、いろいろな種類の小基金でもって私を援助して下さいます。かつて手紙で訴えた日本人学生のために、一年五〇ポンドの十分な約束を頂き大変感謝しております。できるだけ早く他の人々を助けるために、別の方を見つきたいと願っております。どうかそのために祈って下さい。ところで、ケッテルウエル司祭に(彼が到着したとき)借家と、彼の新しい働きを助けるための日本人教役者のための援助をお願いしたいのです。ケッテルウエル師夫妻は、ここ一週間か十日以内にバーバー先生とともに到着の予定です。

9月中旬に八人の司祭達がここで二日間の黙想をしました。私が願っていたものの第一回目のもので、聖マリヤ蒙告記念礼拝堂の長い将来の働きの第一歩となることと思います。

2月中旬に地方部内の按手式の巡回を持つ予定です。その中には「呉」の訪問も含まれております。自分達の教会を独力で建てるために必要なお金のめどがはっきりしてきております。その建設もほどこなく開始されるものと思います。

それから12月には長らく待望していたロンドン主教の訪問がやってまいります。そのことについては次の機会に、終わった段階で報告したいと考えております。彼は11月29日から、12月16日迄、日本と韓国とに滞在される予定になっております。

それから12月21日、使徒聖トマス日に執事のヨハネ栗飯原亀一師を司祭に按手したいと願っております。彼のためにご加禱下さい。

この度は特に女学校を覚えて祈ってほしいのです。その現在の建物と運動場の面積は教育関係当局から改善を求められております。隣接地の購入も近い将来に計画されており、一、二年のうちには再建にこぎつけるはずですが、しかしこれは莫大な資金を必要とすることです。それでも本国の多くの教会の学校が実施しているように、勇気をもって直面すべきことです。私は、まだそのために財政的援助を具体的にお願いはしておりません。まず、現在そこに勤めている私達の宣教師たちのために皆さんのお祈りをお願いしたいのです。ケイス先生の死は、残り三人の中での主任の問題を残しました。こ

ブライドル司祭が、聖ミカエル及び諸天使日の前夜、大変元気な姿で帰任されました。英人会衆での働きは、9月中はストロング、ゲイル両司祭が交代で受け持たれましたが、その月の下旬にゲイル一家は「姫路」に転出されました。前回の手紙でそこに建築された新しい教会堂について報告したと思います。9月25日に私はゲイル師一家を訪ね、26日の日曜日の朝、頭栄教会として聖別しました。西側に小さい鐘楼のある大変に簡素で木造の小さな教会ですが、内部は非常にデボーションナルにできていて、ウイリアム・ゲイル師のような敬虔な司祭にはまことにふさわしいものです。

それから後、ほぼ一ヶ月間、御承知のように私は地方部を離れておりまして、10月23日の夜、帰ってまいりました。

その次の朝、10月24日の日曜日に、私は「須磨」にある別の新しい教会を聖ヨハネ教会として聖別するためにまいりました。この時にはストロング司祭をチャプレンに命じました。そこでは他に四人の聖職が列席されておりました。須磨の人達は聖別する以前からこの礼拝堂を使用しておりましたので幼稚園が園児で一杯になっていたほか、すでにその近隣には或る数の求道者がおりました。この両教会のために、皆さんがご援助下さり、又特に祈りで支えて下さったわけです。新しい教会の写真に近いうちにお送りしたいと思います。

私の帰りを待つ多くの又様々な委員会のほかに、私はこの

の三人の宣教師達はいずれも日本ではまだ二年にもならず、日本語を十分に使えないのです。その意味でこの先生方を助けるもう一人、立派な先生が与えられるようにお祈りいただきたいのです。日本語学習が可能な若さの人で、できれば三十才迄の人がいいと思っております。

クリスマスまでにお便りを差し上げることが難しいと思います。どうか皆さんがよき楽しいクリスマスをお迎えになられますように。そして皆さんがこの便りを受け取られたらすぐ私にクリスマスのお便りを下さいませでしょうか。御子の祝福が皆さんすべての上にありますように。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

書簡 第6号

一九二七年(昭二)顕現日の八日目
日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて
シベリヤ經由

私の友人ご一同様

クリスマスに神戸に便りしていただきたいという私の提案に対して、皆さんが素晴らしい方法でお応え下さり感激で一杯です。多分すべての手紙に個人的にご返事を差し上げることはできないと思います。皆さんの手紙を通して個人的な消息を知ることができたことは私にとって実にうれしいことでした。

今度の日本でのクリスマスは、先の天皇(訳者註：大正天皇)のご病氣と崩御でもって著しく憂鬱にさせられました。皆さんの多くは、最近日本の事情について深く学んでこられたので、多分私が申し上げるまでもないと存じますが、日本人は天皇に対して特別の畏敬の念をもっております。六日間にわたる服喪期間の守りかたは十分で、しかも全般的なもので、すべての娯楽地は閉鎖され、音楽や浮かれ騒ぎや楽しそうな声も一般家庭からさえも聞かれないありさまでした。殆どの教会はクリスマスの聖歌さえ歌いませんでした。そうい

ようとしている私達が、その平和の君ご自身によって祝福されるように祈っていただきたいのです。

日本の郵便局のスタンプの日付けに注意されますと、西暦の年号を用いていないこと、昨年はクリスマスまでが大正15年であり、クリスマス以降は昭和元年になっていることに気づかれると思います。そして現在、元日以降はもう昭和2年と数えているのです。年と年号は新年で変わります。日本人の数え方に従えば、12月生まれの赤ん坊は次の元日にはもう二歳になります。日本では英国にいるのちがって、人は常に一歳年が多いという理由がここにあるのです。

私達の信経の中で「三日目によりみがえり」というの言葉がありますが、これも実は、この東洋的な時の数え方によっている次第です。

さて、この前、諸聖徒日に手紙を差し上げて以来、私は確かに多忙の日々を過ごしてまいりました。特に、11月中はほとんどこの地方部(註：教区)の按手式のための巡回旅行に出かけておりました。これも10月中、他地方部に出ている結果です。

11月29日にロンドンの主教が到着されました。主教の日本での旅行に関しては、私がチャーチタイムス誌に寄稿しておきましたので、それが掲載されることを望んでおります。そうなれば、私がいちいちそれを繰り返して申し上げる必要が

うことは公式の決定を越えたものでした。

私は降誕日の朝、特別の按手式を司式するために「神戸昇天教会」に参りました。ここでは志願者達が按手式を待ちこがれており、クリスマスに初聖餐にあずかりたいと望んでおりました。そこで私は、The Late Mass をうたい平常通り特別な記念の祈りを付け加えて、祝賀礼拝を守りました。しかし、どことも子供達は例年のようなクリスマスの祝賀会を持つことができず、正月もいつもの陽気さはありませんでした。六日間にわたる公式の服喪期間が、2月初めの天皇の御葬儀の際に今一度持たれることになっております。

日本では、新しい天皇が即位されますと、新しい年号に変わります。天皇が崩御されたクリスマスに終わった時代は、「偉大なる正義」を意味する「大正」と呼ばれましたが、新しい年号は「昭和」とよばれます。これは「輝く平和」の簡潔な訳です。ただ日本字を完全な意味を表わすように翻訳することはそう容易なことではありません。

「昭和」は二つの漢字で構成されていて、その一つは、王と民の間の近い接触という意味を持っており、もう一つは国と国との間の平和を意味しております。事実上、この前のクリスマスより始まりましたそういったことを含む新しい時代が、その平和の君のかいばおけの玉座の前に、この地にきて、この国民への主の奉仕の業に心を新たにしてい身を捧げ

省かれ、ただ皆さんがお知りになりたいいくつかの個人的な事柄を伝えねばすむからです。

十七日間にわたって私は一行に同行いたしました。このことは私の時間を費やすことになりましたが、そうする方が、いちいち通信でもって一行のために細かい手助けをするよりは、ある意味では容易なことでした。

主教はチャプレント、世話役のオーモンド・ブレイス氏及び彼の運転手を同伴して来日されました。この運転手は一行の旅に大変な働きをしてくれました。とはいっても、主教の世話役の方々に大変な忍耐をいただいたということと、人々の一行に対する思い遣りには驚きました。どうして彼らはそんなだったのでしょうか。

一行が神戸に滞在中は、部屋の不足という理由で、主教チャプレンが英人会衆付牧師館で宿泊したほかは、全員私のところに受け入れました。ロンドンの主教は快活な楽道家で、このような方と一緒に過ごせたことは、私にとって大変に素晴らしい体験であり刺激となりました。神戸の英国人も日本人も、共に心からこの主教を歓迎いたしました。私は主教に、年に一度でもいいから本国での後援会員の集いで、議長席に着いていただけないだろうか願ったところ、喜んでそうしたいと話されていました。どうかこれが実現されるようお願いしております。

また海外の各地域が今年のアングロ・カトリック会議へ代表を送るよう要請されておりますが、私はオーモンド・ブライス氏に私どもの代表の一員として出席して欲しいと願いました。というのは、今まで彼は、私達の希望についても困難についてもある程度の理解を持って下さったからです。そのほかに、近く休暇で帰英される南東京地方部のロナルド・シヨウ司祭にも代表の一員になっていただくようお願いしております。彼が前の休暇で英国に滞在中、私はマーガレット街の諸聖徒教会の一教役者として、彼はときどきその教会を訪問してくれたもので、私は随分前から彼が日本で活躍していることを知っておりました。ロンドン主教の一行と一緒に歩いているうちに、これまで私が知らなかった多くの場所において、日本での私達の教会の事情に関して多くのことを学ぶことができ、知識を与えられたことを嬉しく思います。

主教一行との旅行の後、クリスマスまでの所定期間内に、相当過密なスケジュールを組まなければなりませんでした。一行に別れを告げたのは下関で、上海に向かう一行を迎えるために停泊していたP&O汽船までランチで見送りました。その後すぐ丘の上に立っている私達の小さな伝道館におもむき、クリスマスのための告悔を聞き、その夜、夜行列車で神戸に帰りました。

次の日曜日、朝は日本人、夜は英国人会衆のため二つの按

ます。

3月13日の大斎第一主日に、二人の日本人を執事に按手したいと願っております。彼らのためにお祈り下さい。彼らの名前は代禱表に出ております。この按手を受けんとしている人達はながい間伝道師として働いてきた人達であり、訓練をした候補生として特別な訓練をしてきましたが、彼らの決心はかわりませんでした。ここにくるまでに、一人だけ落伍しました。どうぞこの人達がいつまでもかわらぬ決心でありますようにお祈り下さい。

英国からの新しい聖職についてですが、前に私が手紙をさしあげて以来いくつかの打撃をうけました。ウイルソン司祭が父上の逝去によって日本に來られなくなったということは残念なことですが、神戸地方部と共に、彼も私達の祈りを必要としております。

その後まもなく、フランク・ウエストン司祭、この方は初夏のころ妻子とともに休暇で本国にむかいましたが、私のもとに辞任したい、そして日本に帰る意志のないことを伝えてきました。またウォルトン司祭が文通していた若い司祭も健康上の理由で駄目になりました。このように私に臨む一連の不運を切り抜けるためには、まさに皆さんのお祈りが必要と存じます。特に皆さんが新しい司祭の派遣が実現するよう祈って下さることを確信しております。

手式を司式、そして月曜日の朝、再び日本海側（地方部の北の海岸）に位置する「米子」にまいりました。ヨハネ栗飯原師の司祭按手のため、彼のことにについては皆さんにお祈りを求めています。

ここへの鉄道の昼間の便は各駅停車で、神戸からなんと十二時間かかるのです。

按手式は、聖トマス日の朝6時におこなわれましたが、種々討議すべきこともありしたのでその日はそこに滞在し、その晩、夕拝と説教をした後、駅に直行し、神戸行き夜行列車に乗りました。この線の夜行は日中の列車より速く、いくつかの駅で停らず、十二時間が十一時間に縮まったわけです。この夜は、実は車中で寝た一連の三夜の第一夜であったわけです。と申しますのは、続いて聖公会神学院の年度末の理事会に出席のため東京へたたねばならなかったからです。

二夜の夜行列車泊の一日を、私は東京で過ごしました。会合はその他にも主教達は主教会、教会出版社の理事会、祈禱書改正委員会の会合、あるいは総会の常任委員会の会合に顔を出せるように上手に処理してまいりました。

多少報告が詳細にわたり過ぎたと思いますが、このことが疲れた主教達のために理解をもって皆さんが祈って下さる助けになればと思います。英国人主教は現在のところ私一人で、ご承知の通り三人のアメリカ人、二人の日本人主教がおられ



ゲイル、ストロング両司祭を現在擁していることは大きな恵みです。私とともにストロング司祭がいて下さることが、どれほど助けになっているかは十分に筆舌に尽くしえません。私の留守中もチャペルでは聖餐式が守られており、その他チャペルの管理を初め多くの仕事は彼によって処理されております。そして私が疲れて神戸に帰ってきたとき、私の世話をしてくれ、しかも鬱憤を晴らすべき人としていてくれるのです。勿論ことばの不充分さがまだ日本語による働きを妨げてはおりますが、彼は日本語学校で一生懸命がんばっております。クリスマスには短い休暇をとるはずですが。

ケッテルウエル司祭も大変に精力的で、彼だけしか知らない地方部史や組織に関する多くの資料があり、目下私がそれを学ぶための力となってくれております。彼は東部の郊外に伝道の新しいセンターを開設しようと、それに相応しい家屋を見つけてまして、ここで私と三週間過ごした後、夫人とともにそこへ移転されました。

ところで一つの現実的な朗報があります。

一ヶ月ほど前のことですが、エピファニー修女会の将来についてはつきりしたことが決定しました。来年夏の終わり頃に神戸に支部を開設する計画をたてました。先日、東京在住の霊母が適当な場所を検討するためにこられました。エピファニー修女会は修女の移住のための資金、そしてこの地での

運転資金の準備にかかっております。私たちも彼女らの家屋の家賃とか税金を提供しなければならぬだろうし、又来客を受け入れるための援助をしなければならぬと考えております。この事業を始めるためにすでに百ポンドものすばらしい寄附をいただいております。そのほか額は少ないが一、二の寄附をいただいております。皆さんの中からもこの事業を援助下さる方がおられることを望んでおります。

1月2日、新年の第一日曜日に私は再度上京しました。英人会衆の礼拝を司式するため、その英国人チャプレンが大きな手術を受けるため本国に帰っており、大変に喜ばれました。その日の夜、私は修女会の近くに宿をとり、その時から顕現日の朝まで婦人伝道師方のためのリトリートを指導いたしました。三十人を越える参加者があって、多くの良い告解をききました。これは修女会が日本にあって行っている素晴らしい働きの一つの例です。

ところで、修女会に対する援助のほかに、女学校（訳者註：松蔭高等女学校のこと）での伝道館の再建に対しての多額の援助をお願いしたいのです。隣接地の購入と校舎の移築自体については日本の友人達や校友会の人々が着々と準備を開始しております。しかし、宣教師の先生方の住宅、それに寄宿舎とその礼拝堂は、ミッシェンの所有であり又今後もあるべきと思います。そのために完全な移築を私たちの手で

行う必要があります。多額の資金を必要としております。（マリ

オット遺産を通して）S.P.Gは二八〇ポンドを約束してくれました。そして私は後援会が只今、聖パウロ・ギルドを通してご送金下さっているものの百ポンドをその目的に用いるつもりでおります。しかし、まだまだ沢山のお金が必要です。この募金は当分の間、私どもにとって最大の財政的な必要のためのものとなるでしょう。

ロンドン主教がこの学校を訪問された時に撮った一連の写真を#四に送っております。彼は学校で演説をし記念の植樹をされました。

この学校への新しい教師が見つかりそうです。しかし、まだ決定されてはおりません。その他のお知らせしたいことは次の機会にしましょう。この手紙はすでに相当長いものになりました。

ストロング司祭が皆さんによりしく。皆さんのすべての祈りに対して心からの感謝の意を伝えていただきたいとのことです。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

書簡 第7号

一九二七年(昭二)聖週火曜日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ経由

私の友人ご同様

始めに、前回のお便りより丸三ヶ月経たことをおわびいたします。先月は九日間神戸にいただけで、一ヶ月ほとんど外へ出ていました。実際、時の流れは重く我々にのしかかってまいります。イースターが終るまでは、とても手紙が書けるとは思ひもかけませんでしたが、先日、神戸に帰ってみると、3月7日の大地震についての急ぎの問合せがあまりにも数多く届いており、これについてお便りする次第です。

ショックの強烈さとは無関係な誇張された報告が飛びかっているようです。ある日本人地震学者の述べているところによれば、三年半前、東京、横浜を襲ったものよりも強烈だということです。京都、大阪、神戸に限ってその被害を考えると、その影響は大きいと考えられましょう。

これら三つの都市は、日本の教会の中でそれぞれ主教座聖堂があるところです。ただ、これらの中で、最も大きな被害を被ったのは京都地方部(註：教区)の一隅でありました。京

都地方部主教はアメリカ人で、他の宣教師団や日本の役人

(彼らは九十九%機敏で、熟慮された復興にたずさわっています)と共に、荒廃した小さな町の復興に取り組んでいます。その町では、教会は壊れ、信者は併発した火災によって家や財産を失いました。幸いなことに、人命に関するようなことはありませんでした。

荒れ果てた地域の中に、大きな町は含まれてはいませんが、小さな町々村々は被害をうけ、人命も多く失われたにちがいありません。一九二三年9月の大被害では十万人が亡くなりましたが、この度は三千人が亡くなりました。この恐ろしさの後、今度は家を失った人々に、数日間の雪や雨が厳しさをともなう襲いかかっています。

震源地から七〇マイル離れた神戸で、地震が襲ってきたとき、私はシーメンズ・ミッシェンの年次総会に出席しておりました。東京にいたとき何回か地震に出くわしたことがあり、その度毎に外に飛び出さねばならぬほど危険でもありました。が、今回のその気力さえ失わせるようなもので、こんな危険なのは初めてのことでした。垂直、水平に揺れ動く震動はまるですべてを崩壊させるようなもので、それは激しいものでした。数時間後も、私の膝はガクガクしていたくらいでした。

この事務所の中心の部屋は、何本かの柱で支えられていま

したが、それらはまるで狂ったように上下に揺れ動いていたようでした。ペンをとって書くこととする間もなく、全員外に飛び出しましたが、電気も消えていました。ショックの後、我々は部屋に帰り、ローソクの灯で必要な仕事をすませましたが、意見交換もできず、早々に各々の家に帰っていきました。

ブライドル司祭と私は、二人で帰途につきましたが、住民は暗闇の中に飛び出しており、興奮し、ひとかたまりになつて話し会っており、市の消防隊は全員出動で、火の用心を注意しながら人々の間をゆくり巡回していました。ガラスは割れ、町の壁もいくつかは崩れ落ちていましたが、被害はさほどではなかったようです。

主教邸では、ストロング司祭が二階の彼の書斎に、私の日本人の秘書と共にいましたが、地震がきたとき驚いて、二階から二人とも暗闇の中に転げ落ちたそうです。この屋敷の中に大きな危険がなかったことは幸いでありました。私の書斎、居間の壁には汚ないジグザグの亀裂がはいり、一年前、せっかく直したばかりなのに、悲しいことでありました。

地方部内の諸教会やその他の建物の中には、小規模な修復をしなければならない所もあります。この中で最も被害が甚大であったのは、休暇を目前にしていたミス・ポールズ、ミス・ホームズが奉仕している「岡山聖オーガスチン教会」で

ドスミス師記念のために、メルボルンの友人たちからの協力によってできあがったものです。ゴールドスミス師は、長年彼の地で働かれたお方でした。

たえず神戸を留守にするため、一年前にきて以来、ここを訪れる機会に恵まれませんでした。新チャプレンのワット師は、実に精力的な方で、小さなボートを手入れされ、いちいち波止場からでなくとも船に立ち寄り、人々を連れてきておられます。また事務所に小さな寢室を設けられ、下船した船員たちがかんばしからぬ所に迷いでないよう配慮しておられるわけです。彼にはもともと力が必要とされましよう。この神戸の施設のために、パーミング師が経済的支持をもって努力しておられることを聞いて喜んでおります。

今夏の終りには、ミス・ポールズ、ミス・ホームズそしてウォーカー氏が再び日本に帰ってこられる由、お待ちしております。英語学校の男の子たちは、ウォーカー氏の帰日を首を長くして待っている様子です。おもうにウォーカー氏ほどこの学校に合った校長は見当たりますまい。

この学校にはいろいろな国籍の人が在学していることは前にも書いた事と思います。その中で多勢を占めているのは中国人であります。ミス・スミスの指導よろしきを与えて、その中の何人かはクリスチャンたらんと欲してはいますが、普通は家族の同意を得ることが難しいのです。しかし、この中で

あったようです。パーム・サンデーの朝、私は堅信式のためその教会におりましたので、おおよその見当はつきまします。その他の、地方の諸教会では自力で復興に当ることができると思っています。そして特筆すべきことは、これらの諸教会が、荒廃した京都地方部のために献金を捧げているということです。

おおげさな新聞の記事を考えるにつけ、S・P・Gに打電する意志はありませんでしたが、何人かの説得に促されて知らせた次第ですが、多くの人々に心配をかけていたことを知り、この電報が人々の心配を和らげたことを考えるにつけ、よかったと思います。特別に私達のことをおぼえて聖餐式を執行して下さった司祭方、我々のために代祷をささげて下さった人々に心から御礼申し上げたいと思います。

このような事態が生じた場合、日本国のある処置には目を見はらせられるものがあります。またこれらの被害に対して救援し、熱慮された再興の手段がとられていく中に、驚くべき復興の力をみるができます。

ところで、シーメンズ・ミッシェンの働きについては、しばらく前にお便り申しあげました。

新任のチャプレン到着まで、勇敢にも砦を死守されたゴールドスミス夫人は今年初め帰国されました。彼女が帰国する直前、詳しくは彼女のご主人が逝去された一年後、この事務所内にあるチャペルの祝別奉獻にいきました。これはゴール

最も熱心だった一人は、とうとう数ヶ月前家族の同意をとりつけ洗礼をうけました。私はパーム・サンデーの夜、諸聖徒教会で他の志願者とともに堅信式を執行いたしました。彼は私が按手した初めての中国人です。

気の毒な中国！ いま中国は、あまりにも多くの混乱と悲哀、不安に襲われております。この状態についてはここで述べようとは思いません。理解に苦しむほどの混乱が存在しています。確かにこのような広大な地域における宣教活動は至難のものとなっています。聞き及ぶところによれば、南方の教区では意外に働きが進んでいる由。近々上海の主教がイースターに、東京の中国人会衆をたずねて来訪されるはずですので、その途中、一晩でも当地にお迎えしたいと考えています。中国南方よりの避難民が神戸を通過していきますし、その中の数人は神戸に仮の宿をとることも屢々です。

前回の手紙の中で、ミス・ケイス逝去にともない、彼女の後任について女学校の新しい教師に関する事に触れましたが、今日九州主教リー師父の御息女ミス・リーの着任の確実性が与えられ喜んでおります。彼女はロンドン大学卒の学士(B・A)で、五年間トロントで教鞭をとっておられました。

3月上旬に到着され、東京の修女会で一ヶ月滞在されますが、その間、今月より始まる新学期のための準備がなされることでしょう。十五才まで日本におられた御方ですので、少

なくとも我々よりは上手に日本の方言に対処されていくことでしょう。

今年、女学校は昨年より四〇名も増え、新しい校舎の増築の必要性が生じてきました。この増築計画は、すでに文部省の許可が与えられていますが、現在のところ、その敷地のことで折衝にひまがかかっています。こうした事柄については、日本では我慢強さが求められるものであります。日本の寄宿舎の再建に関して二十五ポンドが送付される由、今後もより多く続けられるようお願いしています。

不幸にして、あの地震により古い崩れかかった建物は安全ではありません。今年のイースター休みの間に、広範囲にわたる復旧作業が営まれねばならず、生命の危険なく授業が続けられるように配慮されねばならないのが現状です。

今年の三位一体主日に司祭に任ぜられんとする二人の日本人執事のためにご加禱下さい。覚前信三、八代斌助の二人です。昨今、この二人（昨年の冬期聖職按手節に執事に任ぜられました）について、彼らはしっかりした正統派（キャソリック）か？との問合せもありました。この二人は、三位一体主日に司祭に叙されることからも判断されますように、二人とも熱心な人で、この中の一人はケラムで学んだ経験の持ち主です。二人はいずれも大家族の父親であり、長い間様々の訓練のもとにあって伝道師の生活を送った人々たちです。



【主教と神戸地方部の聖職方。1927年】

神戸地方部は、いろいろなチャーチマン・シップを持った人々で彩られています。これは母国においても同じことでしょう。信者に対して真の師父たらんと欲する主教は、こうし

た多様性に対して同情と助力を惜しむことのないように努力しなければならず、かつ、キリストにある希望の故に柔和と畏れをもって教え、諭すことに熱心でなければなりません。私が、我々の主の働きのために、臆することなきよき働き手となるよう、主のお恵みにあずかれるように御加禱下さい。

当地方部の北方地域はC・M・Sの働きのもとにあります。

昨今、この地域において堅信式を司どってきたところですが、毎日汽車にゆられての巡錫の旅。汽車から見る海岸の風景は美しいものでした。瀬戸内海よりは野性味があり、岩にあたり白い飛沫をあげる大浪。崖にそびえ立つ松の美しさなどは、実に美しいとしかいようがありません。ここでの働きはなかなか有望であり、これから先が楽しみです。我々が良き友C・M・Sの働きの人によるじれったいような側面を感じさせられるようなところもありますが、もっともC・M・Sがその財政上、働きを縮小せざるをえないような局面もでてくるようです。

この旅の前、下関における初めての堅信式に出かけました。この地でのミス・ケニオンの働きは着実に前進しております。これは私にとって大変な幸せであり、勇気づけられたことでした。この地の老いたる韓国人の伝道師は私のために一生懸命誠意をもって仕えてくれました。

下関はまた、韓国との諸関係について引き続き重要な働き

をしていくことでしよう。キャンドル・マス（訳者註：2月2日被献日）にこの地下関を訪れ、人々のためにミサを捧げました。そのおり、ちょうど下関を通って韓国に赴任される途中の新任の補佐主教ヒュー師父にお会いすることができました。ミス・ケニヨンの話によれば、先週休暇のために帰国途上のハント司祭も下関に立ち寄られ、ミサを捧げられた由ヒュー主教着任によって、堅信式やその他のことで私が韓国を訪れる機会もなくなっています。ただ九州主教は目下不在ですので、先月は同地方部の堅信式のために訪れました。母国の司祭が発奮して、日本のために捧げられんことを祈ります。求めている人々のところへ、多くの人々が遣わされることを怖れることがないようお祈り下さい。

神戸で二つの幼稚園にたずさわっておられるミス・キャサリン・ストークスは二週間前、休暇のために当地を出発しました。他の人々同様、皆さんが彼女を通して我々の働きをよく知って下さいますようお願いいたします。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

【追伸】 次回にも岡山の教会についてもっとお知らせすることができましょう。おそらく完全なまでの修復は望めずまいが。

書簡 第8号

一九二七年(昭2)七月十五日聖スイザンの日
日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ経由

私の友人ご一同様

先週は主教邸において会議に明け暮れる一週でありました。ご承知の通り、同じ週、京都においては一日がかりの会議をもった次第です。この会議は有意義なついで、邦人聖職の六分の一が参加し、正統派(キャソリック)が時代はずれのものではなく、正統派信仰とその実践が、我らの主への崇拜と愛に結びつく熱心さをもって真剣な方法であることを示すよき機会となりました。時を同じくして、彼地においては英国における祈禱書改正の問題が、日本においても、いにしえの敵意を再燃させる危険があると説く人々もでてまいりました。英国内で生じている事柄について、日本人たちが如何なる見方をしているかについて、ここに一つの例をあげてお知らせしたいと思います。

この地方部には一人の、とても熱心で不屈の魂をもったC・M・Sの司祭がおりますが、ある機会から漁村出身の青年と知り合いました。六週間後この青年は、彼の漁村を訪問し彼

るだけのことです。

ただ私が母国における出来事について偏見をもち、いずれかについて批判を下しているかのよう誤解をしないようにお願いをしたいのです。この地にあつて二つ(訳者註：一六六二年と一九二七年版)のうちどれが好ましいなどと語ったことはないはずです。

かつて第一次大戦後、在英中、時折「チャーチタイムズ」に掲載された海外の主教達が、この問題について投書された記事が多くあつたことを思い出します。そして時と共にこうした手紙は時代遅れのものとなり、こうした主教が帰国するにつれて忘れられていったものです。いづれにせよ、こうした事柄を邪魔することは場はずれであることを認識するには賢明なのが我々であります。私もまた、このようなことをしたくはありませんし、海外派遣の主教たちとてもこのような過ちは犯さないことでありましょう。だからといってこの問題に無関心であるというわけではありません。皆さんもいづれ、私やストロング司祭が如何なる意見をもっているかを聞く機会を与えられるでしょう。(ところでストロング司祭よりもよろしくのことです)無論、日々この問題については祈りの中におぼえていますし、特にオールターを中心に銘記してまいります。

どうか主なる神が母国の指導者に知恵と導きを与え、ます

の友人たちにキリスト教の話をして欲しいと要望しました。こうしてこの司祭は同村を訪れ、語り終えたのち、今まで話したことについて疑問はないかとたずねたところ、かえってきた第一の質問は「英国においては何故祈禱書を改正するのですか」と云うものでありました。彼は、近年英国を訪れた日本人が新聞に掲載した英国の暮しの項目を読んでいた訳です。更にその新聞は日本人大半によってよく読まれているものでありましたし、その項目の中で、祈禱書改正によって英国の信仰生活は混乱しているというものでした。

皆さんには英国における祈禱書改正は当面、日本の教会には直接必要なことではないことはおわかりのことと存じます。日本聖公会は独自の祈禱書を有しておりますし、一年前、総会において二つの小さな改正をしたばかりです。あるいは、皆さんの興味をひくことかも知れませんが、一つのことを申しあげますと、日本の祈禱書の内には二つの聖別禱が入れられており、その中の一つは英国よりのもの、他の一つは米国の祈禱書よりの挿入されたものであるとのことです。多くの教会ではある時は一つ、またある時は他の一つを用いるようなことをしないで規則正しく、二つのうちいずれかを用いているのが普通であります。神戸赴任以来、私はある教会では英国型のものを用い、また、ある教会では米国型を用いております。それはもちろん、各々の教会の慣習にしたがって

ます神の栄光と人々の魂の救いのために熱心たらしめたまわんことを。

今年、日本全国にわたって大運動(General Mission)が起こされていることについてはお知らせしたことを思い出します。この運動は今年の秋、最高潮に達することになりますが、神戸地方部の北方の伝道地ではすでに彼地なりの大勢が決りつつあります。

神戸地方部の最も西にあるのは「浜田」ですが、さらに西にのびた所に、「益田」という小さな町があり、毎週伝道師が訪問を続けております。少人数の信者と熱心な伝道師の信仰的な働きによって、何年間ものあいだ、この地は「種の落ちた地」でありましたが、この運動の炎が折よくこの地にものびて「芽生え(Spring-time)」がおとずれようとしています。この結果、毎週「求道者会」が開かれ、平均八〇名の会衆が集まるようになっております。他国においてはこの数はたいしたひびきはないかもしれませんが、日本では実に大きなものです。

この地のある医者が、自分自身求道者であり、彼の病院の中の一番大きな部屋を提供してそこで礼拝や集会が営まれております。この夫人は今年、接手を受けられました。この地の人との接触は以前よりもありましたが、この運動とその結果、この地の人々がますます熱心になったことは申すまで

もありません。この地における展望は明らかに有望です。

これらの人々のため、特に伝道師小池師のためご加禱をお願いします。

海岸線にそって東方に離れたところに「隠岐島」があります。神戸地方部の南岸には大小さまざまな島がちらばっていることはご存知と思います。しかし北方に入り韓国側にそっては、多くの島はなく、私自身かつてその地を訪れたことはありませんでした。隠岐は四つの大きな島といくつかの小島から成り立ち、本州からは五〇マイル離れたところに位置しています。この島に行く汽船は小さなもので五〇マイルを六時間かけて運航しており、その船路はスムーズではありません。私は船には強くない方ですが、今度はその困難な船路をゆれることになりました。七つの島には定住民がおり、三〇マイル四方の最も大きな主港町には五千人の人々が住居しています。この港の入り口は実に美しいながめを供するものでノールウエーの縮小版とでも申せましょうか。そして海は島に向かって時にはせまく、また、時としては丘に囲まれた湖のように、ようようと続いていきます。

この港町には少数の信者が在住しており、一年に一度ないし二度、司祭や伝道師の訪問を受けるだけの状態です。この度、5月の終り、私は一司祭と共にこの地を訪問し、四日間当地に滞在し、このような働きをするためには不十分すぎる

日本語を用いつつ、この働きのお手伝いをした次第です。

四夜つづけてある金物店（この主人と家族は全員信者でした）で、8時から伝道集会をひらき、様々な質問や個人的な話がつづけられ、11時に終る毎日でした。もっとも昨夜は汽船が10時半に出航するので早く終ることができましたが、二晩つづけて参加した人々の中に仏教徒の商人がいました。その人のいわく、キリスト教が間違っているのは、神と人との間に仲保者が必要だという教えなのだ。そこで私は、これは別段新しいことではなく、逆に、世界中至る処で、これに似た考え方や教えがいかに多くあるかを示して論じた次第です。

この地に於ては男女共に幾つかの学校が先生のなり手を求めております。私は最近、日本に於ける教育界に対して人々が抱く不満が大きくなっていくことを聞いて驚いています。即ち、現代の教育に於ては物質的見地に立つ教育の所産と見込みしかないというものです。未だ宗教心の必要性の認識まではいきませんが、今日成し遂げられたものに対して少なからず不満を抱いているのは明らかです。試験用紙を印刷する業者とある学生の両親との間に賄賂行為があり、テストの前にその試験用紙を前もって見せるといふようなスキヤンダルもありました。政府招聘のもとに英語を教えるために派遣されてくる英人教師達もいつの日かは、先生達の実際の努力

の結果よりも高い試験の結果に点つけをすることにかかわり、良心との戦いも起こりうることを思います。最近起ったことですが、一人の方はこれに反発、辞任し、六ヶ月勤めて帰国した人もあります。

隠岐島には地方の商業船舶乗組員養成のための寄宿舎があり、私もそこに出かけて講堂で授業が終ると全くキリスト教的な講話をいたしました。出席者は自由意志によるものでしたが、全校の大半が参加していました。

神戸の女学校に於いては日本人のクリスチャンの先生方は宣教師の家で、月一回集会をひらき、彼らのもつ困難や問題を話し合っています。ここに参加して聖書の教え方を指導するように要請されています。

たいしたキリスト教背景もないのに少女達の教育のためになされるこうした働きは並々のことではありません。先生達のうち九〇十人は信者となっています。こうした人々のためにも御加禱を願います。

この女学校の建設計画は、我々が購入しようとしている隣地の所有者との間で値段の折り合いがつかず、いささか遅れているのが実情です。一方、昨今の銀行関係の混乱から、適切な値段の土地も市場に出ております。こうした間、教育に関心をもつ親切な方々からの支援も与えられ、新しい寄宿舎チャペルのためにさずかってきたものよりも、より多大な支

えが与えられようとしており感激のきわみであります。

これらの働きのため、あるいは修女達のために捧げられるものの可能性が少ないので、このように書いていたのではありません。修女達は9月に出発する予定です。去る3月、かの地震のために痛手を被った岡山の聖オーガスチン教会の修復が終わるまでは皆さんに公式の要請をださないようにしているのが現状です。ただ、S.P.G.、S.P.C.K.、聖パウロ・ギルドには支援を依頼しました。要望に対してこれらの人々からの返答はいまだうかがっておりませんが、それにもかかわらず、皆さんから心暖まる賜物をいただきました。早速、これを二つに分け、一つは岡山のため、残りは主教資金とし、さらにこれを二分し、一つは教会基金、一つは修女会のための基金といたしました。使用目的が記載されずに送られてくる援助金は今後、緊急を要するところに用いていきたいと考えていますが、とにかく皆さんの御好意に心から御礼申し上げます。

さて、エリック・アレン師は、S.P.G.と医師の許可のもとに9月、当地に向かって出発の由。何卒彼師が何にも臆することなく出発されるように祈っていたのだと思います。9月中旬には休暇あけのウォーカー氏、ミス・ボールスも帰って来られるのを楽しみにしています。同じ船には修女達の交代要員も乗船しますが、これからの働きは神戸で分院をは

じめることにあります。うわさによれば九州の主教も同じ船に乗られるとか。もしそうであればこれで全主教が日本に帰られることになり、淋しさも和らげられましょう。

ミス・ホームズの両親が病いのため、その帰国が数ヶ月遅れることは誠に残念なことであります。フォックスレイ夫妻は十八年間の信仰的奉仕活動を終わって、5月に帰国されました。ランカシャーの地方教会での伝道牧会にいそしまれることを望んでおられます。英国が御二人にとって良い処でありますように！

この手紙が母国に着く頃には皆さんは不在となっておられることでしょう。良い夏休みでありますように。一週間も経てば聖マリヤ・マグダレン教会記念日が到来しますが、この日を考える時私の胸の中は思い出で一杯となります。夏が終われば創立七十五周年の祝典ばかりでなく宣教師団の展示会、年次総会も開かれましょう。これらの働きの上に絶えざる神さまの祝福を祈ります。

去る3月休暇のために帰国されているミス・ストークスが宣教師団展示会中、日本コーナーの手伝いをされる由うかがい、大変喜んでおります。御存知のとおり彼女は神戸の二つの幼稚園にたづさわっておられました。そしてこれらの幼稚園は彼女の出発にもなって経営不振におちいりましたが、それは今日、日本に於ける貿易不振と相まっているかのよう

書簡 第99号

一九二七年(昭二)十月十日
日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて
シベリヤ經由

私の友人ご同様

今年は大変素晴らしい夏の休暇を楽しむことができました。ひどいイギリスの天候にもめげず、皆さんもよい休暇を過ごされたことと思います。休暇中に、大変遅れましたが、個人的に皆さんの手紙に返事を書くことができましたので、皆さんの何人かは、私が神戸からあまり遠くない山の上に、小さな山荘を持っていることをご存じだと思えます。大抵はストロング司祭と二人で使っていますが、なかがろに十日間いませんでしたし、ストロング司祭もそのあと二週間留守にしましたので、この時はブライドル司祭も山荘を使っていました。

この山荘から約半時間、電車で行くと、そこから六甲山という山にまっすぐ登ることができます。この六甲山は海拔二、五〇〇フィートから三、〇〇〇フィートの高さがあります。三十年ほど前に、フォス主教と他の二、三人が夏の暑さから逃れるために、山荘の建築を始めました。今ではイギリス人だけではなく、アメリカ人、フランス人、ドイツ人、スカン

です。特に須磨の幼稚園では数多くの差押えの赤札が貼られたりしましたが、ついに当局の許可を得ることに成功しています。

極東では聖スウィザンの天候が影響を及ぼすことは聞いたことがありませんが、いささか暑すぎるにしても今日はよい天気です。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

ジナビアの人々も避暑に行きます。

人数はあまり多くはありませんが、日本人よりはずっと多いのです。ここは避暑地として徐々に開発されています。

第一次大戦が始まったその夏に、小さな木造の聖公会の教会が建てられました。それ以来、毎年夏の二ヶ月間英語の礼拝がそこで守られています。私達も夏ここで礼拝を守り、週日のミサを行います。大変喜んでいます。

この地方の日本人は主として仏教徒です。地蔵という神があり聖バルトロマイ日と同じ日が祝日です。二、三の町育ちの日本人にそのことを聞くと、田舎者のためのものだとのことでした。日本を紹介している最もいいハンドブックには地蔵について次のように書いています。

地蔵は、苦難に会っている仏教徒を助ける慈悲深い助け手ということです。地蔵は旅人、願いごとを持つ母親、子供の守護神です。この像に石が積み上げられています。これはあの世で魔女に着物を取られ、サイの河原で石を積み仕事をさせられる子供を助ける意味があります。彼は慈悲深い容貌の頭を剃ったお坊さんとしてあらわされ、一方の手で石を、他の手で金属の輪のついた杖を持っています。この石の像は、日本中で他のいかなる礼拝の対象物より頻繁に見られます。

このことを前に書いたかどうか覚えておりませんが、今度再来日以来、最も強烈に印象に残ったことの一つは、仏教が

力強さとバイタリティーを増している点です。多くの宣教師は、それはキリスト教の伝道活動に対する反動であらうといっております。しかしそれが全てではないと思います。物質文明の失敗に対する魂の叫びに呼応したのではないかと思えます。日本国民は大変に愛国的で、キリスト教をたやすく外国の宗教と考えます。多くの日本人は宗教を望んでいます。完全な日本的形のを望んでいます。

例の避暑山荘のある山の上に二つの礼拝するところがあります。一つはお地藏さんであり、もう一つはイギリス人の小さな教会です。しかしこれは日本人の目には外国の寺院と見えるようです。

この日本人に、わが主を示す努力が十分でないのではうか。このことはこの静かな夏、私の心の中にあったものに導いてくれます。過去二年間にこの地方部になされた主の御業のゆえに喜びと畏れでいっぱいです。そして、主が皆さんの故郷での祈りをうけられているということです。五〇〇人の神戸後援会のメンバーの信仰深い、絶えざる祈りは私にとって大変な支えであり、勇気を与えてくれており、とても言葉にあらわれないほどです。もしそれが、謙遜な祈りであれば、ことを成功させる力があることを何度も何度も証明してくれました。

さて、今年は我々海外にいる英国人に対する世界的な呼び

かけの年です。第五報告書はまだ来ていませんのでその内容は知りません。しかしそれは英国のことだけでなく、極東についても言及されていることと確信しています。

こちらにいる英国人に対する働きと我々の宣教活動に関して、最近こまかく討議されました。というのは、彼らのチャプレンであったブライドル司祭が最近やめたからです。皆さんの多くは、一九二六年七月に彼に会われたことがありと思えます。この極東のようなところでのチャプレンの仕事は至難の業だと思います。しかし彼は今までのチャプレンの中で一番よくやったと思います。彼の仕事の中心は聖餐式の司式で、陪餐者は普通の日曜日の朝は二人、四人であったのが今では三十人以上に、時にはそれ以上になりました。

彼はまた本当に素晴らしい子供礼拝をやってきました。しかしこれらの港の西洋人はいつも流動的で、二年前来日した時かなり熱心な信者がいたのですが、もうすべて移動していて、一定の固定メンバーをつくりあげてゆくチャンスがありません。ブライドル司祭は二十五年間朝鮮で宣教師として働き、来年のイースターまでで七年神戸で働くわけで、帰国する潮時だと考えたようです。彼がいなくなるのは大変淋しいです。いつも私に親切にしてくれたからです。

彼の後任を見つけるのは大変難しいと思います。英人会衆は新しいチャプレンを選ぶ委員会をつくり、一週間前に会合

を持ちました。任命は彼等がするわけですがサジェスションしてほしい、といわれました。これらの港における英国人を偏狭にならずしかも批判的、そして同情的でなく日本の事柄（われわれの伝道活動を含めて）を見るのは大変困難であります。ごく少数の人々がこの困難に立ち向かっています。極東の港では酒や女などでダメになって地獄への道を歩みやすい。このような状況の中では悪魔の働きが大変強く働きます。英国ではそんなことをしなくても、ここでは悪に染まることが多いようです。

時に英国で人々が、英国はもはやキリスト教国ではなくなつたと言ふのを聞くと、彼らは、わが主のカトリック信仰が染み込んだことのないこの国におけるような恐るべき悪の力を何と思うでしょうか。多くの人々がこれと戦い、勝利する素晴らしさに感動しています。皆さんに、この地、日本にいる西洋人のために祈ってほしいと思います。弱い者が強くなり、信仰深い人が主の力によって真実が保たれるように。この地において、主のより良い道具として用いられるように。神戸以外では、この地方部（註：教区）の西洋人の数は非常に少なく、いろんな団体のアメリカ人宣教師を除いて、全部で五十人位だと思えます。このうちの三分の一は国立の学校の英語の教師として来日したものです。

夏の間、私は日曜日にはブライドル司祭を助けるために、

神戸に出て早朝ミサと晩禱の司式をしました。夏の間はこれ以外の礼拝はやっていませんでしたので、他の二つの日本人教会で、朝の遅いミサと説教をしました。それで日本人司祭も休暇をとることができました。五回の日曜日にわたってそうしました。

この暑い夏の間、神戸は大変な水不足になり、毎日二時間しか水道が使えず、その上、この間に皆が一斉に使うので水滴しか出ません。伝染病が発生しなかったのは不幸中の幸いでした。その上もう一つの試練に直面しています。国鉄が十一マイルにわたって神戸を走っていますが、みな平面交叉なのでこれを立体交叉にし、鉄道を道路の上を通すための工事がスタートしたことです。数ヶ月かかる予定で、大変不便になります。

エピソード二 修女会の働きが神戸で始まったばかりです。霊母が東京から二週間前にやってこられました。聖ミカエルの日の朝に彼女を迎えて大変よかったと思います。そのおりチャペルで二周年の歌ミサをしました。特に後援会メンバーのために祈りました。皆さんも同じ日に、我々のために祈られたと思います。

霊母は二、三の家を見てきましたが、その一つを働きの場所に決定し、すぐ八日後に移り、神戸にやってきました。家には何もありませんので、この三、四人の宣教師達が家具

などを整え、配置する奉仕に奔走しました。

シスター達自身もはじめは大変不便で、苦勞が多かったと思います。霊母自身、一週間こちらへやってこれられ、二人のシスターが落ち着いたかどうか見ておられました。今朝は彼女達のチャペルとなる部屋で、私が初ミサを行いました。月に一回の定期旅行の前に、ミサの司式ができたことを特にうれしく思いました。しかし、残念なことにこの旅行があったために、来神されたエリック司祭を迎えることができませんでした。こんなに早く、同司祭やシスター達を迎えることができ、心から感謝をしております。どうかシスター達、エリック司祭のためにあついお祈りをお願いします。

神戸の東部方面はケテルウエル司祭が一年前に伝道を始め、今ではパリスシユになり、日本人の婦人伝道師が彼を助けています。今回の手紙は神戸とそのまわりのニュースばかりで申し訳ありませんが、これらのことは大変祈りが必要なので書きました。これ以外にも書いてないことが沢山あります。

こちらのミサの時間は八割から九割までが7時開始で、これはイギリス時間で午後9時45分(夏時間では10時45分)です。三位一体主日に私が司祭接手をした二人の司祭の一人、八代斌助司祭が来年イギリスに行きますが、どうか彼のために祈って下さい。もう一人の司祭は接手前に既にイギリスへ行ったことがあり、聖マリヤ・マグダレン教会の牧師館に泊ま

書簡 第10号

一九二八年(昭三)一月十一日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ経由

私の友人ご一同様

三ヶ月前には神戸市及びその問題について書きました。今回は、この地方部(註：教区)について簡単に書きたいと思えます。というのはこの三ヶ月間、私はいろんな所を走りまわって先週の日曜日の夜、過去三ヶ月間に二度目の英語礼拝にやっと出ることができました。一人の婦人に、「また数分間だけ神戸へ帰られたのですか」といわれたからです。前からこんな強行スケヂュールは早く終るように希望していたのですが、結局、九州の主教が英国で病氣になりまだ帰任していませんので、堅信式旅行をしなければなりませんでした。また東京へも会議で三回出かけ、この三ヶ月間で五千キロの旅行をし、三十八回違った所で寝ました。

九州へは10月下旬に旅行しました。この十八日間に十八回説教をし、六十八人に堅信式をしました。これで、春に二十四人にしていきますので昨年の同地方部の堅信式受領者は九十六人になります。みなさんは地方部全体でたったそれだけか、

ったことがあります。聖マリヤ・マグダレン教会で受洗し、接手されたあの日本人海軍士官は11月30日、東京で素晴らしい日本人女性と結婚することになっています。

例の若い司祭を英国へ送る費用はのけてありますが、まだ、百ポンドは必要なので援助していただければ幸いです。また、学校の寄宿舎の再建のためにも続けて援助をお願いします。

九州に大きな被害を与えた台風は幸いにも、この地方部をさけてくれました。私の思いは今月開催される後援会の年次例会とその展示の方に行っています。そしてやがて来る素晴らしいクリスマス郵便を楽しみに待っています。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

と思われるかも知れませんが、神戸地方部で昨年の堅信式受領者は一〇五人で、一昨年は一〇二人でした。この国の人口に比べて微々たる現状がおわかりのことと思います。どうか忍耐強く私達のためにお祈り下さい。そして聖霊が、より多くの人達の心を開き、主へ導くことができるように。

昨年の秋は二、三の伝道の中心地へ行きましたので、それについて書いてみたいと思います。

英国を出る前、私はこの地方部の本州部分は英国の南部、ドーバーからランド・エンド。幅はチームズバレーから海岸まで位だと考えていましたが大体そのとおりでしたが、実際の長さはその四分の三位です。その上にアイル・オブ・ホワイトに相当する淡路島とデボンとコンウオールを合せた位の四国があり、ここには六千フィート位の大きな山や大小さまざまな沢山の山があります。そしてこの島と本州の間には多くの島が浮ぶ実にきれいな海があります。いくつかの島は無人であり、またある島には千人以上の人が住んでいます。

ストロング司祭と私、それから10月に来日し、一生懸命に日本語と取り組んでいるアレン司祭とで、宮島と呼ばれる島で休暇を楽しみました。宮島は世界的に有名なところですが、しかし、クリスマスはここは時期的にはあまりいい所とはいえません。私達はこの島で一番美しく高い山(約二千フィートあります)に登りました。頂上には有名な寺院がありこ

この聖火は一千年以上前に弘法大師によって点され、以来消えたことがないそうです。弘法大師は日本の仏教聖人の中で一番有名です。吹雪の中を登りましたが頂上から素晴らしい景色を見ることができました。他の季節はもっと素晴らしいと思います。コロンの主教は宮島を見るだけでも日本へ行く価値があるといっていました。

私は神戸地方部の両端の地区に格別の興味をもっております。その一つである「御影」は神戸の東にあり、十万人の人が住んでいます。その教会はケテルウエル司祭の家ですが、先月四人の人達に接手をしました。

西の端の「下関」は人口十万人。クリスマスに行ってきました。そこでクリスマス・イブに告悔を受け、洗礼志願者の試問をしました。求道者の面接もしました。クリスマスに神戸におられなかったのは残念ですが、下関に誰もいなかったので仕方ありませんでした。

クリスマスの朝8時にミサの司式。陪餐者は五人でした。この8時と10時の間の休憩の間に、皆さんがミッドナイト・ミサをやっておられると思った次第です。そして皆さんの代祷を思い感謝しました。

10時から日本語の礼拝がありましたが、最初に洗礼志願式、次いで二人の洗礼、説教、ミサと続きました。晩祷の後、提灯礼拝があり、一人の朝鮮人の求道者が提灯をつくり、ミス・

七時間程東上したところにある広島です。

人口は二十万で、日本人司祭とC・M・Sの宣教師ミス・ウオージントンが働いています。広島からの帰りに、例の英国人司祭二人を連れて「広島」の教会を訪ねました。ストロング司祭はその日本人司祭(訳者註：山内豊吉長老)のもつ孤独感にうたれました。この教会は子供と現在受聖餐者を合せると百二十名おります。また牧師は「呉」にサクラメントを持って行く責任を持っております。呉には一人の日本人の求道者と、もう一人のC・M・Sの宣教師であるミス・ローレンスがいいます。

何百万人ものノン・クリスチャンに囲まれているという思いが、この日本人司祭の胸にどっと重くのしかかっています。どうかこの司祭のために、他の日本人の司祭のために祈って下さい。彼の個人生活と証しが強くなるようにとも祈って下さい。呉市は軍港で人口は十五万、百二十人のクリスチャンがいます。

東上して次の中心地は、広島から六〇マイル離れている「福山」で、ここはC・M・Sの働きには歴史的な悲劇があり、憂うべき状態です。いつか、特にお祈りをお願いするために全部をお知らせします。ここにも日本人司祭がいます。

つぎは「岡山」で、ミス・ボールスがいいますが、ミス・ホームズがここへいつの日か帰られるのを待っています。皆さん

ケニオンが絵の説明をしました。ミス・ケニオンは4月に帰英します。今までの人々と同様に彼女も歓迎して下さい。そして彼女の留守の間をどのようにカバーしたらいいかについて折ってほしいと思います。

下関はこの地方部の端ですが、そのむこう一マイルの海峡を越えると九州地方部があります。汽船で十時間行くと韓国があります。この地方部で下関が一番近い大都市は、汽車で



ゴールドスミス師(左端)
1925年11月 須磨寺で

んの大部分の方は、この二人に会ったことがありと思います。この司祭は、ケラムに行っている日本人司祭の父親です。(訳者註：八代欽之允師)

昨年11月のある月曜日に行ったとき、もう一日泊まるように頼まれ、四人で、八十六才で床に伏せている老婦人に接手するために田舎の方に行きました。そこは本当の田舎で、クリスチャンは彼女だけです。しかし彼女の幼子のような信仰は素晴らしいものです。最初は市電、それから汽車、小さな湖をモーターボートで渡り、あとは少し歩きました。外人はこの辺では本当に珍しく、普通以上の歓迎で、礼拝後日本の昼食をいただきました。そのあと、一巻の白い絹をもってきてその一角を切り、私に何か書くようにといいました。漢字で書くように頼みたかったらしいのですが、私は英語で書きました。墨で書かねばならず、出来は普通よりよくありませんでした。その老婦人は初陪餐を受けました。

岡山から五十マイルほど東上したところに「姫路」があります。この間にはかなりの山間部があります。岡山の人口は十四万で、今年皆さんの援助で新しい教会堂を建てるのを楽しみにしています。この教会堂は例の地震で壊れました。

姫路はそれ程大きいところではなく、岡山の半分もないかも知れません。ここにはゲイル一家が住んでいて、新しい教会堂を建て、教会の西の端に二部屋の日曜学校の建物も完成

しております。この教会は、英国の普通の大きさの教会堂のチャンセル位の大きさです。来週の日曜日姫路へ行く予定です。新しい日曜学校の建物の祝別式、按手式をするためです。その教会は「顕栄教会」で、顕現日後の一週は過ぎていますが、今はその祝いの季節です。姫路は神戸から三十五マイルです。

これで、鉄道に沿って神戸地方部の現状を説明したわけですが、他の地方については今度また説明します。

同労者の何人かについて書いてみます。

前の手紙で、神戸で修女会が始まったことを書きましたが、修女の一人イレナ・フランセス修女は、新しい家で転んで足を折りました。そのため何週間も入院しなければなりません。クリスマス前に退院しましたが、彼女は入院中に多くの人達と知り合いになりました。彼女らにとって、かなり悲劇的なスタートとなりました。この最中に女学校の先輩宣教師であるミス・カル（在日三年）が具合が悪くなり入院しました。クリスマス前に退院しましたが経過はあまりよくなく、また入院しなければならないということで、S・P・Gに対して彼女の婦英休暇が早くなるように頼んでいるところです。これは学校にとって大変な痛手です。特にもう一人の先生ミス・ネトルトンは短期間来ただけで、イースターに帰英しますし、新しい宣教師ミス・エニド・ベイリスは2月に

書簡 第11号

一九二八年(昭3) 復活前日
日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

私達は復活日を神戸で過ごすことにしておりますが、これは初めての事です。この日は聖ミカエル教会で早朝聖餐式を執り行い、次の礼拝では説教をすることになっております。その時には特に故国の皆さんに思いを寄せていることでしょう。夜は、ブライドル司祭のお別れ説教を聞くために英国人教会に行くことにしております。ブライドル司祭はイースターの週間に船で帰国の途につきますが、その後任についてはまだ白紙の状態です。ということは、主教邸にいる者のたれかが英国人教会の働きをしなければならないということです。

ストロング司祭は、5月、6月は日本人司祭が管理しております。地方のある教会のため出かけることが決っております。ですから、アレン司祭と私とで英国人教会の働きを殆どすることになると思います。

九州地方部(註:教区)主教の他地方部における働きが終わり

神戸に来ることになっていますが、日本語の勉強を始めなければならぬのです。他の二人もまだ日本語の試験を終わっていません。どうか学校のため、その先生たちのためにご加禱下さい。しかし私は彼らの仕事の着実な進展と好影響を喜んでます。今年この学校の生徒八人に按手し、昨年のクリスマスには三人の生徒と一人の先生が受洗しました。

クリスマスの休暇の終わりに開催されるS・P・Gの年次総会に先立って三日間のリトリートを開催されました。三日間にわたったリトリートは初めてで、朝鮮の補佐主教が親切にリトリートの指導をしてくれました。

ブライドル司祭の後任チャプレンはまだ決っていません。ご加禱下さい。

聖マリヤ・マグダレン教会を訪ねた東京地方部の執事板野さんから便りがありました。しばらくすれば皆さん方の多くは八代城助司祭に会えることと思います。彼は昨日からケラムで生活し始めたところです。

素晴らしいクリスマスのお便りありがとうございました。残念ながら一人一人に返事を書くのは時間がかかりそうですが、この機会に、一言お礼を申し上げます。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

り、帰任されたことは嬉しいことです。

ストロング、アレンの両司祭は日本語がよく理解できるようになりました。

ストロング司祭は、定期的に日本語での聖餐式を執り行なっております。すでに二、三度日本語で説教しました。しかも、私よりもはるかに上手に日本語の読み書きをします。

アレン司祭は、第一回目的の日本語試験をすませました。彼の上手な発音には皆びっくりしております。私は彼の音楽の才能が日本語の発音に大いに役立っていると思っております。彼はオルガンが演奏できます。二ヶ月程前、英国人教会のオルガニストが帰国して以来、この教会のオルガニストもつめております。また、主教邸での毎日の英語の晩禱とコンプリンでは、私達に歌わせます。

ここから十一キロ程離れた西神戸郊外地には小さな英国人村がありますが、そこの人達はオール・セイন্ツの早朝聖餐式に出るには遠すぎるので、そこまで聖餐式執行に来てほしいといっております。今から三ヶ月間位は毎日曜日そうすることは可能と思いますが、ブライドル司祭の帰国後はそれは難しいのではないかと考えております。

一人、二人の日本人司祭が今月中に移動します。私はまた神戸の教会で働いている日本人婦人伝道師の中から一人を、ミス・ケニオンが休暇で留守の間、下関に派遣するつもりで

おります。ミス・ケニオンは孤独に耐えておりましたが、日本人女性一人では生きることが出来ないもので、高齢の未亡人の母と住んでいるこの人だけは下関に派遣することが出来ると思います。

ミス・ストークスは今年、神戸で日本人の働いている所で働くはずで。彼女は休暇を終えて帰任したところであり、とても元気そうです。後援会の皆さんが彼女に下さったご親切、特に彼女の入院中のご厚情には心からお礼を申し上げます。私達の女学校に派遣された新任の宣教師の先生であるミス・ペイリスもまた着任したところです。シスター・エリノア・フランシスはまだびっこはひいてはおりますが、松葉杖を必要としなくなるまでによりなりました。

皆さん方の中にはミス・ホームズのお母さんが2月に立ち寄られたのをごんじの方もおられることでしょう。ミス・ホームズは夏の終わりにミス・ボールズと一緒にいるのを楽しみにしております。このことについて私はミス・ボールズのために感謝をしております。ミス・ボールズは復活後には一人の日本人女性(私達は二人になると思っておりますが)を婦人伝道師にするためのトレーニングを開始しようとしており、これは教会以外の働きとなり、彼女一人では負担がかりすぎるからです。

現在行ないつつある日本人司祭の移動経過の中で、司祭達



【牧杖を持たれた主教】

って下さった主教杖の曲がった部分のところに(マグダラのマリアの姿と聖ミカエルの像とともに)描かれているからです。夜明けの太陽が二つの山のいただきに姿を見せております。そしてその下の平面の盾の上にマルタ十字があります。私はいつもこの二つの山が鉄道が走っている本州南岸の二つの海岸線をあらわしているものと思っております。ここにはこの前に書きました教会があります。本州北側の海岸線(南側が山陽道といわれているのに対して山陰道といわれています)にもまた伝道地が次々にあります。これについては今

や信徒奉侍者達の中に不足の問題は以前のことを思えばずっと良くなっていることに気付く者が出てきました。そして、故国の皆さん方の祈りに合わせて彼らも祈りをささげようになってきました。ですから若い人達が献身するようになると思います。そしてこの祈りがだちに答えられるようなところがあります。私は出来るだけ早い機会に彼にトレーニングを受けさせたく思っております。そのために必要な年間五十ポンドのお金か、何かそれに役立ちそうなものをどなたかお送り下さいませんか。すでにトレーニングに入っている神学生達は神学校での第一回目の試験に見事合格しました。私はまた「協働司祭」としての強力な助け手にも、とっても喜んでおります。彼は第三番目の助け手でチャールズ・ストランクスという人で、初秋までには当地にやって来るものと思われまふ。彼の来日のための費用の用意は出来ますか、今ある聖職基金に出来るだけ沢山の援助金を入れて下されば感謝です。

次のお便りで今まで書き続けて来た神戸地方部の概略を完成させると、前信にて書きました。

皆さん方のうちのある方々は地方部の腕ともいえるし、冠ともいえるようなものを覚えておられるでしょう。マンスタール・スクエアの聖マリア・マグダレン教会の皆さんが私に贈

から書きます。マルタ十字にある四つの面は四国にびったりあてはまります。その理由は「四国」という言葉は「四つの国」あるいは「四つの県」という意味ですがこれは文字通りこの島の県の数でもあります。山陰路の旅にはうんざりさせられます。列車(一、二の夜行列車を除いて)は各駅に停車しますし、機関車からのおびただしい煙に閉口するトンネルがあるからです。神戸から本州北側に出るにはおよそ六時間かかります。それから海岸線にそって鉄道があり、海が見えかくれます。この海岸線は瀬戸内よりも一層はげしくでこぼこしております。またトンネルとトンネルの間からは大きな岩礁のある海岸が見られます。一番近い伝道地に着くまでには、六時間程かかって山越えをし、更に海岸線にそって走る列車の中で五時間過ごさなければなりません。このことは皆さんに、この教区内で私達がまだ伝道をはじめていない所の広さを教えてくれるものと思います。

私が着任する一、二年前からピカード・ケンブリッジ夫妻が「米子」で見事な伝道活動をしております。二人は米子の近くの町や村にも伝道活動を行っております。二人はC・M・S派遣の宣教師で、山陰路全体の働きはC・M・Sによって支えられております。ピカード・ケンブリッジ夫妻は、今月中に休暇で離日しますが、その後は、少なくとも六年半の間は、地方部にはC・M・S派遣の司祭は一人もいないということに

なります。とはいふものの米子には、その働きを受け継ぐ一人の(一年以上前に私が接手した)日本人司祭がおります。

米子のすぐ西に、この付近に沢山ある大きな湖の中で、小島がいくつも浮んでいる最初の湖が見えてきます。本州の岬が、北の方に出っぱってありますが、その東岸を「境港」の方向に十六キロ程行ったところに、米子の教会とは別の小さな教会があります。ケンブリッジ先生はこの管理者でもありません。境港から隠岐に汽船が出ております。第八信で、隠岐への旅行記を書きました。

米子から、西へ十九キロ行ったところに「松江」があります。山陰路の中心都市で人口は約五万人です。松江はその湖や水路から、ベニスにやや似ておりますが、気候はそうではありません。山陰全体は雨がよく降り、寒さは本州南岸とは比べものにならない程厳しいのです。

ここには、日本人司祭パウロ永野が二十年近くおります。彼は、米子より西の山陰の責任者で、たいへんなワンマンです。また有名な名説教家で日本のあちこちに招かれます。これが、彼の牧会の時間を少なくしております。松江にいて彼を助けていた伝道師は、昨年の12月になくなりました。しかし、九州のC.M.Sの聖書学校でトレーニングを終えた二人の青年が、今年からここで働き始めております。

松江から、さらに西に一二〇キロ程行ったところの「浜田」

には、C.M.Sの素晴らしい伝道師が住んでおります。そこでの彼の働き、そして浜田のさらに西の「益田」での働きは、昨年のミッションの総会以来、今までにない成果をおさめております。神戸から益田までは汽車で十八時間近くもかかります。山陰路でのこの最終駅をすぎると、鉄道は本州南岸にまわり再び幹線と合流します。

しかし私は他の場所へ急がなければなりません。

神戸と四国の間には「淡路島」があります。淡路というのは「海の泡の国」という意味です。この島は西洋梨のような形をしており、たては五十キロ程あり、横巾は最も広い所で三十キロ程あります。ここはフォス主教の初期のキリスト伝道活動の場所の一つでもありました。この時は彼がはじめて日本にいられた時で五十年以上も前のことです。この島の主要都市である「洲本港」にある「真光教会」の責任者として淡路島には今、日本人先任司祭がおります。

大きな島である四国は、山の集まり状況によって大きさはまちまちですが、北東部、北西部、東部、南部と四つにわけられております。北東部四国には私達はまだ全く手をつけておりません。東部海岸地帯では、一八八〇年にその主要都市「徳島」でC.M.Sが働きを開始しました。一八八〇年というのはフォス師が淡路で働きを始めた二年後のことです。徳島地区での働きは今五つの部分にすぎませんが、それで

もこれ等を合わせれば半径四十キロにも及びます。町の中心教会には独身生活をしている老司祭がおります。そして小都市にはそれ以上に年をとった執事がおります。彼は六年以上もの間根気よく司祭になるための勉強を続けております。今、ここに住んでいる宣教師は一人もおりませんが、大阪地方部からC.M.Sの司祭マン師が月に一度訪れております。ここが霊的な土壌となることはとても難しいというのが一般の見方ようです。

四国でのもう一つの働きはS.P.Gによって支えられております。南部地区には今の時点では二人の日本人司祭がおります。しかし間もなく行なおうとしている移動で二人が一人になることでしよう。「高知」の教会はかなりの力をもっており、またこの地方の人達は非常に正直で力強いが、しかし短気で難しいといわれております。彼らはまたどちらかといえばアテネ人のようです。働くには面白いところですが、いつでも人を雇うことが出来るし、いくらでもすることがあるからです。しかし、以前にここで奉仕したことのあるミス・ポールズとミス・ホームズは、高知はそんな所ではないといっております。ここは教区では一番暖かいところで、まわりを山でとりかこまれ、米は二毛作です。

高知の中心地にいる二、三のクリスチャン家族にさよならをして四国の北西部地方に行きますと、唯一つの聖公会の教

会が「大洲」の町の小高い丘の上にあります。これには歴史的ないわれがありますが、それが今は便利が悪いという点でマイナスになっております。大洲には、大家族の日本人司祭と婦人伝道師とがおります。四国には居住している宣教師は一人もおりません。私がこの島の教会を巡回する時は、申し上げるまでもなく船を利用しますが、神戸から淡路までは三時間、東部四国には五時間、高知までは十二時間、北西部四国にはそれ以上かかります。加えて皆さんはよくご存じのように私は船にはとても弱いのです。

地方部内を大急ぎでまわったので、興味ありそうなことは書く余地がありませんでした。皆さんをうんざりさせたのではないかと思います。いつか機会をみつけて人々のしていることや生活ぶりを書きます。

大斎節の半ばに、全部で二十余人でしたが、神戸に比較的簡単にやって来られる日本人教役者のための沈黙の日をもちました。聖職接手を受ける前に行なって来たものを除いては、完全に沈黙を守ったのはこのたびが初めてでした。

よみがえりの主が皆さんを大いに祝福して下さいように。お互いをおぼえての祈りが私達を強めてくれますように。

いつも皆さんに感謝している友である

在神戸主教 中バジル

書簡 第12号

一九二八年(昭3)七月十日
日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

英国で二年間を過ごされたミス・ホームズとお別れをし、今ケラムで勉強中の日本人司祭の八代師と友になることを目的としての神戸後援会の皆さんのパーティーは今週ですね。

私達はその日には特別に皆さんのことを思い起していることでしょう。ストランクス司祭が、ロンドンに行った時はうまくとけこむことが出来なかったし、同じ意味で神戸後援会のパーティーでもうまくいかないかも知れないということは淋しいことです。

7月開催のどの集まりの中でも、皆さんは神様が神戸を助ける若い司祭を早く派遣するようにと命じておられると思っておられることは正しいことかも知れません。二年前にストロング司祭が、昨年はアレン司祭が、今ストランクス司祭が、というように毎年助け手が私に与えられているということは主の名による皆さんの信仰と辛抱強い祈りが聞かれたものであると私は確信しております。私が思っていたより多少遅

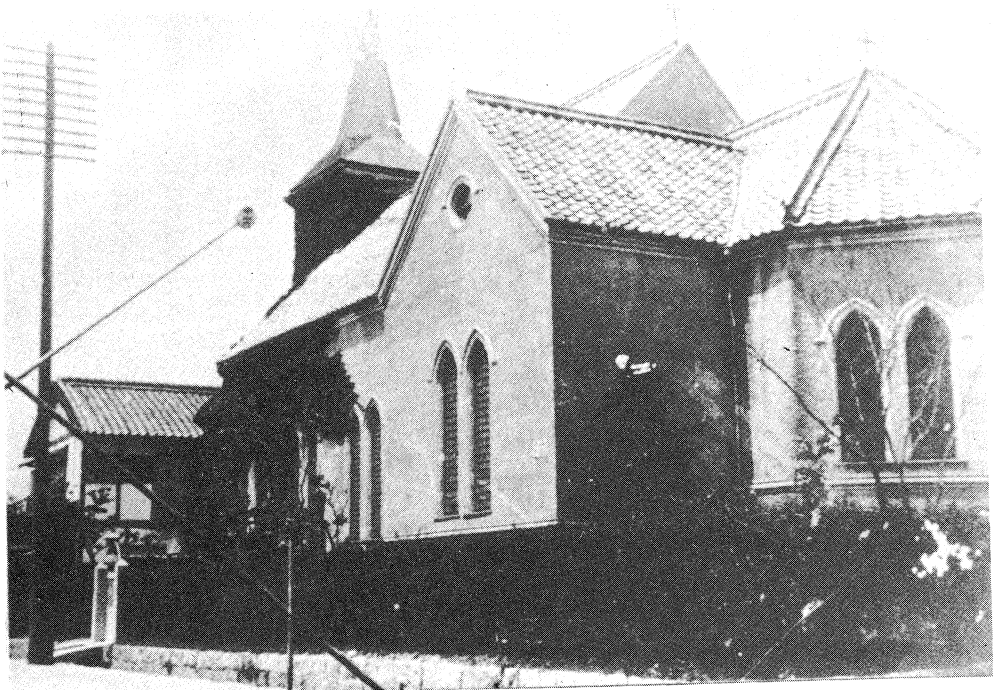
れそうですし、秋の計画を少し遅らせなければなりません、近いものとしては10月中旬までに成果があると思います。

先月、日本語学校の課程を終え、試験に合格したストロング司祭は10月から下関に住み、そこで働くことになるでしょう。ミス・ケニオン(皆さんは年次総会でこの方とお会いになると思いますが)が4月に休暇で帰国して以来、日本人の婦人伝道師の緒方夫人が月に一度、聖餐式のための司祭の訪問を受けながら下関で働いておりました。私にとり一番最初の助け手の司祭を地方部の戦略上の拠点に派遣出来るということは、後援会の皆さんの働きと祈りと贈り物に対する喜びであるということを知っていただきたいのです。どうぞ下関に於ける彼とその働きをおぼえて心からのお祈りをお願いします。

あわせてアレン司祭のためにもお祈り下さい。私は彼を下関に派遣します。ストロング司祭と住ませ、そこで二年目の日本語の勉強をさせるためです。二人が下関に行くということとは非常に淋しいことです。主教邸での彼らとの生活はとっても楽しいものでした。申し上げるまでもありませんが、あらゆる面に於いて、私を手助けする二人の若い司祭に完全に甘やかされました。その意味において私は語学の勉強をしている間、ここで二人のしていたことを引き継ぐストランクス司祭の来日にたいへん感謝しております。

皆さん方は当地の英国人チャブレンに一人の司祭が任命されたというところをお聞きになったかも知れません。ジョン・クリストファー・フォード司祭で、リーズのクライスト・チャーチで副牧師をしていた人です。私は個人的には彼を知りませんが、しかし聞くところによれば働きに対しては素晴らしい人のように思います。どうぞ彼のこともおぼえておいて下さい。彼は9月末までは英国を離れることができず、英国人教会及びその他の仕事は私達が続けることになりました。こういったことから他の者がやって来るまでストロング、アレンの両司祭を下関になぜ派遣出来ないか、その理由がおわかりいただけるものと思います。

今までにお送りして来た手紙の控えをずっと読みかえしてみました。その結果、皆さんにこちらでの働きの概要をお知らせしたのが、第10信と第11信とで地方部(註:教区)内を一通り廻りました。そして、それにつけ加えるかたちで神戸については書いて来ましたが、神戸の街そのものについては、地方部のことに触れたのと同じような意味では全く触れていないことに気がつきました。もし皆さんが、私達がこの町でしようとしていることを思い浮べることが出来れば興味があるものと思いますし、それに伴って地方部内の他のどんな所よりも、大きな苦勞が、この大人口の街に注がれているということがあるとおわかりいただけると思います。



【聖ミカエル教会 1893年献堂、1945年夏焼失】

知事公舎の隣りにある主教邸と庭園は、街の中心地にありとても便利です。また神戸の中心地に新しく出来た繁華街は近くにあります。主教邸から北の方に三分程歩いたところに「聖ミカエル教会」があります。神戸にある聖公会の教会としては一番古く、中心的存在で一番大きな日本人教会です。

一番最初のミカエル教会は一八八一年に献堂されましたが十年後に焼失しました。現在のは一八九三年に出来たものです。現在の日本人牧師は、二十年前に按手を受けて以来ここで牧会をしております。主教邸と聖ミカエル教会との距離と同じ位の距離の所に、付属の女子寮をもつ松蔭女学校と呼ばれる女子高校があり、そのそばに宣教師の先生方の家があります。私達にはこの学校を移転、改築したい思いがあるということです。皆さんは聞くのもいやというほど聞いておられることでしょう。でも申し上げるならば今、日本における時の流れは非常に悪く、父兄や卒業生その他の人達は少しづつお金集めをしているに過ぎず、移転は中止です。

ミス・エッセン、ミス・リー、ミス・バイリース達は、いまこの学校で働いており、あわせて、聖ミカエル教会の手伝いもしております。学校での先任者であるミス・カルは1月に病氣休暇で帰国しました。故国からの彼女についての知らせでは現時点ではあまりよくないようです。彼女がもとの健康をとりもどすようお願いください。

修女は足の具合が悪く十分に歩けないからです。前から神戸にいる修女達が、私達の生活と働きの全ての点で私達とかかわりが出来ているということは素晴らしいことです。修女会とかかわりのある方はご存じのように、氣の毒にも修女達は大きな打撃を受けております。エディス・メアリー修女（東京にいる者の一人ですが）は、不治の病にかかり、ごく最近帰国しました。霊母がケベックまで彼女に付き添っていました。そこからは看護婦が彼女に付き添いました。霊母は今月末までに日本に帰ってくるようになっております。

はじめの頃、西洋人達が住むのを許されていたのはこの付近だけであつたということから、今でも「居留地」と呼ばれている所にある波止場の近くには聖書協会と海員施設とがあります。聖書協会に関して申し上げれば、永年にわたり神戸に住んでいるブリテイッシュ・アンド・フォーリン・バイブルサイエティのパロット氏はごく最近若手助手のアーネスト・カーカムが与えられました。パロット氏もこの助手も非常に熱心な聖公会信徒です。

エネルギーで疲れというものを知らないワッツ氏のもとに、海員施設はかなり大きな建物に移転するところです。この建物では忙しい時はもう少し増やしてもと思いますが、六人の高級船員と二十人以上の一般船乗りのための宿泊施設を準備出来るとワッツ氏は期待しております。これがここで

主教邸から東の方へ十分程歩きますと、「オール・セインツ英国人教会」があります。この教会は三十年前に聖別されました。聖ミカエルより大きい教会です。とはいふものの故国のパリッシュ・チャーチのどれと比較しても小さいものであるということ覚えておいて下さい。この教会は人出が多く騒々しい（海岸から山にまっすぐのびている）メインストリートの一つにあります。

同じ通りで、オール・セインツの教会を少し北の方に行つた所に男子の学校があります。ウォーカー氏が校長でミス・スミスが助けております。十二ヶ国以上の国からの七十〜八十名の子供達がおり、過去五十年近くにわたりウォーカー氏と彼の先任者のもとに、神戸の町に住むいろんな国の人々のために非常な貢献をして来ました。全ての授業は英語で行なわれ、子供達の年齢は八才から十八才までで、彼らの能力はさまざまです。私は昨年この学校の一人の中国人少年を按手しました。ペルシャ人の少年には洗礼をさすけたところです。主教邸と男子校との間にあるものすごく狭い道を北に行きますと、私達がエピソード修女会のために借りた家があります。これは満足出来る建物ではありませんが、近所の騒音の影響はなく、加えて私達の力では今のところこれ以上に満足すべきものをみつけることは出来ません。この修道院は私達の近くにあることが大事なのです。エリノア・フランシス

の働きのスタートです。

主教邸から二キロ以上西の方に「昇天教会」があります。ここでの働きはかなり早くから始まっておりますが、それでもまだ二十年にはなりません。長い間こと密接なかかわりをもっているのは私達の仲間でベテランのミス・パーカーです。

彼女は四十年程前に日本にやって来ました。そして現在でも昇天教会で働いております。ミス・バーバーが彼女とともに住んでおります。ミス・バーバーは（ストロング司祭やミス・リーのよう）に日本語の試験に合格したところです。彼女は秋から昇天教会付属幼稚園を手伝うことになっております。初期の頃から長い間、この教会は日本人教会の中で最も素晴らしい司祭の一人である覚前という名の日本人司祭の司牧のもとにありました。彼が死んだ時、ケラムでトレイニングを受けていた彼の息子が聖マリア・マグダレン教会の牧師館に私達を訪ねて来ました。この息子は司祭按手を受けて一年になりますが今年の復活日以降、父の働いた教会で牧会に従事しております。

父親の覚前師が始めたもう一つの働きは「日本人海員ホーム」でした。これは昇天教会に近く、今でもいい働きをしております。ここでは協会本部の許可を得て、シーメンズ・ミッションの旗とバッジを使っておりますが、本部からの援助

は受けておりません。日本人船員及びこの働きに関心のある人々からの援助を受けております。

昨年秋、昇天教会の執事がやや西の方にあるスラム街の一角に、一軒の家を借り入れました。そしてここで日曜学校をやっております。時おり伝道説教会も開催しております。とはいふものの目に見える成果があらざる苦しい働きとなっております。日本でクリスチャンになった人のほとんどは中流



達師人働きのシモンズ・ミッション（前列中央）ゴールドスミス

階級の人達であり、この地での貧しい人達に対する福音の説き明かしがそれ程効果があるようには思えません。皆さん方のお祈りの中に、非常に困難な土壌に種蒔きをしているこの執事のこともおぼえておいてください。

神戸の中心地から八キロ程西の方に行くと「須磨聖ヨハネ教会」という新しい教会があります。教会が出来て以来二年間、この信徒達は司祭や伝道師のひんばんな交代に悩まされておりました。今は昇天教会の主任牧師であった人がそこに転任しましたので、この教会の信徒は落ち着きを取りもどし、前進するものと期待しております。

ここからさらに三キロ程行ったところは美しい郊外地ですが、ここに住む英国人がこれまでに何度か、そこで礼拝を行なってもらうことは出来ないものだろうかといってきておりました。それに応えて、今年に入ってから彼らのクラブハウスで毎日曜日英語の聖餐式を執り行なってきました。彼らは大変喜んでおります。しかし主教邸で私と一緒に生活する司祭が一人しかいないということになった時に、礼拝を引き続き守ることが出来るかどうか。それは甚だ疑問です。

反対側に移って、神戸という長細い街の中心地から二キロたらず東の「葺合」と呼ばれている所では、牧師館の二階が礼拝堂になっています。ケテルウエル司祭が永年にわたりここで司牧してきました。現在の牧師は私が着任して間もなく

按手をした第一号司祭の者です。それ程大勢ではありませんが、信徒は熱心で教会堂建築のためとして僅かづつですがお金を集めております。私は後援会のお金の中から援助金として五十ポンド出してやりました。緒方夫人が下関に行き不在の間、ミス・ストークスを中心となって働いております。

この前の休暇を終えて帰任したケテルウエル司祭は、ここからさらに五キロ程東に行った所に移りました。かつて手紙で書きましたが、神戸の東のはずれの郊外で、ここで開拓伝道を始めております。神戸での私達の働きについての今申し上げて来た諸事が長過ぎたのではないかと案じます。私自身に関して、またその他の事柄に関して書く機会（今から二年以内だと思います）が与えられるのを楽しみにしております。

この前の手紙でお願いしました二つの点に関する財政上のお願いについて、ここでもう一度書かせていただきたいのです。S・P・Gからの援助のない二人の宣教師が与えられますので、出来ますならば私のもつ司祭基金に一層の援助をいただきたいのです。

また最近神学校に行きました学生は部分的援助程度しかありません。この学生は一学期を終えたところです。夏は昇天教会で実習訓練をうけることになっております。

S・P・C・Kからの多大の援助のおかげで、八代司祭のケ

ラムでの必要な費用のほとんどが私には与えられました。彼は来年帰国させようと思っております。

チャーチ・タイムズ紙は何度も東京の元田主教とその死について書いております。聖ヤコブの日に行なわれる彼の後任のペテロ松井の主教按手式には出席したいと願っております。

この手紙がマグダラの聖マリアの日より一週間以内に、皆さんのお手許に届いて欲しいと願っております。神戸の近くの山の中にある小さな教会でマグダラの聖マリアの日の聖餐式を執り行なうために山に登って行きたいと思っております。どうやらこの夏は、私達の中から一人か二人は毎日曜日に神戸の英国人教会のために、またその他の所でお手伝いをするために山を下りて来ることになるでしょう。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

【追伸】 後援会の方々はフェローシップ一致のための聖餐式が、マンスター・スクエアの聖マリア・マグダレン教会で、聖ミカエル及び諸天使日の6時30分に執り行なわれることをおぼえておいて下さい。

年次総会は10月12日金曜日の夜開催されます。会計報告は9月中旬に届けられることでしょう。

書簡 第13号

一九二八年(昭三)十月二十一日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ経由

私の友人ご一同様

今年の夏の終わり近く、会友の便りを出してから大分時もたちました。少し待って一つ、二つの特別なことについて報告できるようにしたいと思っていたからです。その一つのこととは女子高等学校のことですが、このことについて皆さんに報告できるようになるまでには、明らかに時間がかかり過ぎます。このことについて皆さんに考えて頂き、祈って頂き、皆さんの寛大なお心を頂きたいと思っていましたので残念です。

この学校のことについて、できるだけ詳しくお話したいと思っています。最近ではありませんが、ある方々からそれについて、また再建計画はどうなっているのかという問合せがありました。それで少し振り返ってお話しし、皆さんの知識が最も新しいものになるようにいたします。

松蔭女学校は「松蔭の下」という意味の名前を持ったミッシヨンスクールであります。現在の場所では人数が多くな

により、その他は、主として日本人父兄や友人、学校の卒業生から得ました。

現在の校地の購入者は、我々が一年間その場所にとどまることを喜んで承諾してくれました。その間に、我々は新しい場所を決定して建築を始めます。

神戸市の裏の丘のスロープの美しい場所と、郊外の数マイル離れた安い土地と、どちらを選ぶべきか、なお意見が分かれて議論されています。というのは、もっと出費がかさむということではなく、学校が、神戸における我々の働きに影響を与えたり、与えられたりすることになることを期待するからです。近い方の土地は分割払いでも購入できますが、日本人の援助者は今後年々必要になる金額の重圧を心配しております。ですから場所に就いての最後の決定はまだわかりません。しかし、私の友人たちがもう数千ポンド、もちろん全額を一度にではなく、援助して下さり、私を助けて下さるかもしれないことをその人たちに話したいと思っています。

友の会の皆さんには大きな負担だと思いますが、前に岡山の教会が一九二六年の地震によって破壊された時、その再建にこれこれの金額が必要だということを言った時もそうでありました。

少しづつ皆さん方の援助によって、それに対して秋までに支払いが出来ます。



【婦人宣教師と婦人伝道師。1924年】

り過ぎました。百名の学校としても狭ま過ぎるような運動場が、四五〇名にたいしてその使命を果そうとしているのです。それに、旧式で老朽化した木造校舎は幾度も修理されたり、支柱を施されたりしましたが、特に一年半前の地震以来、この高度に発達した国の公立の学校の堂々たる新校舎と比較しますと、実に貧弱なものに見えるようになりました。

校舎と運動場について、数年前に警告をうけましたが、毎年この警告を引き延ばしてきました。しかし私たちは、もっといい場所に新築することを約束しました。資金が集められ、私が神戸に来る前に土地も購入されました。しかし、予定の市電路線の変更や、他のいろいろの理由から、その場所が全く不適当な場所であることがわかりました。その上、その土地を売ることが戦争ブームの後の不景気によって困難になりました。この不景気は、現在の土地の満足の売却をも困難にしました。

しかし、いま私が手紙に書いていますように、突然二ヶ所を買値よりも少し高く、また現在地を我々の予期しているよりも高く売却する瀬戸際にあります。この二ヶ所の土地をあわせて一七、〇〇〇ポンド入手できるでしょう。しかし新校舎はどうしてもそれより一、〇〇〇ポンドから二、〇〇〇ポンド多く費用がかかります。その間に、校舎と寄宿舎に対して、約四、五〇〇ポンドの新資金を、一部は皆さんのご援助

岡山の「聖オーガスチン教会」は負債が無くなり、11月14日に聖別式ができます。感謝のため、又そこに開かれる新しき会議のための祈りのことをどうぞ憶えて下さい。ミス・ホームズとミス・ボールズが岡山へ帰ってくることは実に素晴らしいことです。そして今や、三人の日本人女性が婦人教役者になるよう訓練を受けるため、彼女らと一緒に生活をいたします。

学校の問題にかえりましょう。私は皆さんが与えて下さる大小を問わずいかなる援助に対しても感謝であります。そしてもし(他の全ての必要なるものとともに)私が休暇で帰国するまでにそれが成就していなかったら驚きでありましょう。

ちょうどいま第三の会計報告を受け取りました。皆さんが今まで神戸のために尽くして下さったこと全てに対して感謝の他ありません。学校に対するこの特別に大きなアップビルをいつかしなければならぬこと、また我々が実際にそれに直面しなくてはならないことをこの三年間、ずっと考えておりました。私は大きな勇気をもってそういたします。

実際にその完成を記録しなければならぬもう一つの新しい事柄は「下関」の事です。それは感謝すべきもう一つの大きな理由でもあります。

皆さんはミス・ケニオンの働きぶりをお聞きになったことと思います。彼女が年会で話したこと、そしてもしその報告

をご覧になっていなかったならば、彼女は「海外の教会」の9月号に魅力ある記事を書いておりますからご覧下さい。

皆さんが年会におられた時、ストロング神父と私は下関のホテルにおりました。そこで二晩過ごし、そして新しい家、まだ未完成で、一部は日本スタイルで一部は西洋スタイルの家ですが、ここで彼の家具や書籍の包装を解き始めました。その家は下関に沢山ある丘の一つのスロープに建っており、冬の健康的な、しかしちよつと寒いそよ風が吹いております。その大きな欠点は小さな家の教会から歩いて三十分かかるということです。

あの土曜日の朝二人共「インフルエンザ」気味のため心細く思いながら、その家に入りました。インフルエンザより他に皆さん達をそんなにしよげさせるものがあるとは思いません。想像してみてください、あなた自身の国でない、見知らぬ町で、まだ片付いていない新しい家でのその感じを。それはまさに一つの唯物的な角度であります。そこから普通の宣教師が直面しなければならぬもの、そして英雄的な事と全く反対の事を見るのであります。しかしながらその日、日曜日の朝としてはかなり長時間のプログラムを消化しました。

告解を聞いた後で、求道者の入門式を行い、四人の幼年聖洗式をすませました。その中に一人の韓国の赤ちゃんがいましたが、その父親の聖名がモーセでありましたのでゲルシヨ

ムと呼ばなければなりませんでした(かわいそうに)。四人に堅信式を、それから唱詠聖餐式をし、説教をして、ストロング神父のため、その土地に於ける彼の働きの上に特別の祝福を祈りました。

月曜日、私は美しい宮島で二日間の休暇をとるため彼を連れて行きました。その後私は神戸へ帰り、彼は下関で彼の生活を始め、かつ働きを開始する為に行きました。どうぞ彼のため、又その小さな信者の群れのためにお祈り下さい。この新しい働きは英国から来る我らの援軍の到着が遅れたので、私が望んでいたより少し遅れました。しかし彼らは近くに来ております。

フォード神父は明日到着、ストランクス神父は反対の方から世界をまわって、その次の日に到着します。フォード神父は直接諸聖徒教会の牧師館に入ります。牧師館はちょうどペンキ屋の手から離れるでしょう。というのは牧師館も彼の来任を迎えるため修理をし、ペンキの塗りかえをしました。私は24日彼の就任式を行います。そして翌朝、再び地方まわりのために出て行かなければなりません。ストランクス神父は松の舎のストロング神父の部屋に入り、アレン神父は彼と一緒に最初の三週間をここで過ごすでしょう。それは外語学校の勉強を始めさせるため、又私がしばらく留守になりますので、まわりを見させるためです。それから11月の半ばにアレ

ン神父は荷物をまとめて、下関のストロング神父と一緒にいるために出て行きます。

私は彼らのどちらもが、この家との特別のつながりを失くさないように配慮しております。我々ブッシュ兄弟団の変わった形のを試みようとしております。下関の司祭達のどちらかが毎月数日ここにやって来る、そしてその事が彼等を助け、又我々の助けとなることを希望しております。然し、一般的にはここで私は二人の司祭ではなく、ただ一人の司祭とのみ一緒にいることになるでしょう。一方私は今や英国人の会衆やその礼拝に対する直接の責任から解放されるでしょう。彼らがもう一度彼ら自身の司祭を持つことは素晴らしいことです。彼は我々が出来なかったやり方で英人会衆を知り、かつ助けることが出来ます。

英国人教会は、先月青年実業家ハンフリー・ラージン・ピアース氏(普通ビリーと呼んでいました)の死によって重大な損失を受けました。彼の乗っていたバイクと市電との怖ろしい正面衝突の後彼は十二時間生きておりました。彼は礼拝のとき侍者を勤め、教会委員会の会計でもありました。また個人的に色々と私を助けてくれました。その中には友の会の金の会計検査も含んでおります。神の御許に安らかに憩わんことを。事故の報せとその後彼の死亡の知らせが、神戸から20マイル離れていた地方部(註:教区)会の途中私のところに

届きました。ストロング神父はその場を離れることが出来たので、彼の所に行きました。そして二日後我々四人は彼の葬送式に列席致しました。

ここでは地方部会と修養会を、聖職者や教役者のために引き続き行おうのが習慣なのであります。それは多数の人々の長距離の鉄道運賃の重複を助けてくれます。そして二つの行事は一括して一週間内に終わります。即ち月曜日の夕方から金曜日の夕方迄。この二つの行事を二十マイル離れた谷間にある有馬と称ばれる場所で開くのが又習慣であります。何故というに、我々六十名を収容でき、何所よりも安い宿屋がそこにあるからです。そしてそこには一週間教会として使用し得る小さな建物があります。

本年の地方部会の主な議事は長い、のろろした議事規則の改正でありました。それに又我々は来春の三年毎に開かれる總會のために四人の聖職と四人の平信徒代議員を選挙しなければなりません。そして、總會には他のキリスト教団と何等かの方法で合同する問題が持ち出されるでしょう。それは何等かの形でいたるところに出てくるでしょう。そして、一九三〇年のランベス会議では激しく討議されるでしょう。私は主教に聖別されてからも、それ以前からも、キリスト教会の再一致を毎日祈ってきました。我々がそのために、また関連した諸問題のために祈ることは急務であります。



【有馬での教役者修養会】

我々はその道に不必要な障害を置かないようにすること、また同時に、我々に伝えられ、代々の聖職者達によって守られてきた信仰と職制を固く保持することも緊急のことです。我々の地方部会も修養会も、両方ともこのたびは全く順調に終わったと思います。地方部は確かに、三年前私が出来るだろうかと思つた以上にその歩みがよくなり、まとまってきました。しかしなお手の届かない広い領域はしばしば心の重荷になります。

アレン神父とウォーカー氏は、7月終わりから8月にかけて、炎暑にもかかわらず地方部の中で長い徒歩の旅行をいたしました。その地方は全く教会もなく、私の働きもないところであります。現在我々はこれらの必要を満たすことを望みませんが、そのことは余分な働き人の訓練をもっとも重要なものにしております。私は今年から訓練を始めた第二の学生のために使う五十ポンドを半分も受け取っていませんから、どうぞよろしく。

もう一つ、新しく始まったことの報告を忘れてはなりません。

シーメンズ・ミッシェンのワッツ氏は、最も暑い時に新しい大きな建物に移転し、整備いたしました。ちょうど私がストロング神父と一緒に下関に行く前にシーメンズ協会の開所式をしました。式の前に短い礼拝をして、チャペルの献堂式

をいたしました。その夕べは本当に「海軍の祝祭」のように見えました。というのは、英国の潜水艦隊が神戸港に入港し、シーメンズの施設は士官や水兵、それに多くの神戸在住の人々で一杯になったからです。

夏休みの間に、たまっている全ての個人宛の手紙の返事を書こうとしましたが、かなりの御返事が書けなかったように思います。それにいたしましても、私は皆さんからクリスマスのお手紙を頂きたいと思っております。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

一九二九年(昭4)一月十八日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ經由

私の友人ご一同様

しばらくの間、私は神戸と神戸での働きについてのリーフレットを作ることに関心を痛めておりました。ミス・ソンドーが秋に送ってくれた昨年の私の手紙の抜粋の関係文書は、ある程度その目的を果しています。少し遅くなりましたが、すこし必要な修正や追加をします。それらを用いて下さって、神戸地方部(註・教区)でされている働きを誰かから尋ねられたら、話せるようにしてもらいたいと思うのです。

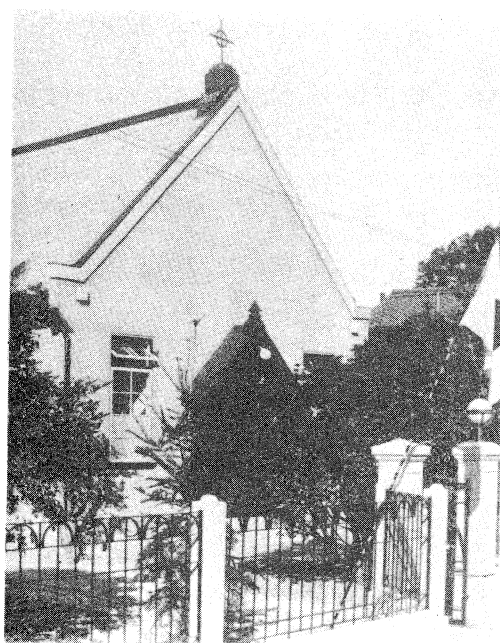
気がついたことは、神戸教区を中心として日本の教会についての一般的な歴史と地図の概略を知っておかねばならないということです。そこで今回は、いつもの半分の長さの手紙にして、地方部に関する注解の序論として加えます。これで注解と序論は一緒に用意されることになるわけです。

秋にお便りしてから、松蔭ミッションスクールの移転と再建築の計画には沢山の浮沈、素晴らしいこの国の法律と政府の両方の遅れがありました。次週学校理事会が開かれ、こ

の問題はこのとき決定されると思います。しかしながら、土地と建物の計画が決ったとしても、最終的な承認は文部省から頂かなければなりません。建築がイースター前に始まり、夏まで待たなくてもいいと楽観的な観測をすることはできません。

とりあえず、ここで皆さんにこのことについてお礼を述べ、セールによって得たものや、今後のセールによってその金額を増したいと考えています。これらのセールを成功させるために働き、奉仕して下さい皆さんにどれだけ感謝していいかわかりません。聖ポール・ギルドからフェローシップを通してこうしているものの中から二〇〇ポンドまでは何とかできるだろうと希望しています。それは学校の一九二八年度末の新しい総計としての一、〇〇〇ポンドに向かってのよい出発です。どうぞ援助を続けて下さい

また神学生の教育のために特別な贈り物をお願いしたいと思います。今春から勉強を始めようとする三人目の若い日本人のために感謝しています。これは素晴らしいことです。三年前までは一人もいなかった神学生が、今日勉強を続けているのです。また、これまでお話ししなかったと思いますが、婦人に対する神学教育を新しく始めました。岡山の宣教師館は広くて、いいセンターです。ミス・ポールとミス・ホームズがそこで教鞭をとっています。彼女たちは、夏が終わって



【当時の聖オーガスチン教会】

から、三人の婦人たちと始めましたが、うち一人はやめて家庭に帰っています。他方、春には東京の卒業生が一人やってくるようになっていきます。私たちのS・P・G基金は、こうした婦人の教育をある程度補うようになっておりますし、これまでは主教資金から年間二〇ポンドをそのために充当してきました。

岡山で、11月14日新装なった聖オーガスチン教会が聖別されたとき、大祝賀会が催されました。この日は皇室の戴冠式に關した国家的祝日でもありました。日本人クリスチャンたちも田舎からきてここに集うことができたわけです。日本人、

英国人あわせて十一人の長老たちや神戸の宣教師たちが集まりました。

皆を前日から泊めることができなかったため、地方から来た人々はいろいろ工夫をし、神戸からの三、四人は、途中強風のため姫路で一泊し、夜明けまで待ったのです。

この日は快晴になりました。新教会は満席となり、外からの行列は一行でないと入れなくなり、だれが行列に加わっていたかわからない位でした。すべてが終わったあと、一〇〇人以上の人たちが教会の新ホールで冷たい料理弁当を頂きました。このホールは古い教会の古材でつくられましたが、これまで日曜学校や他の集会のための適当な場所がなかったため、大きな恵みの場所となったのです。

ファザー・ストロングは下関での御用に忙殺されています。宣教地での日常の仕事を学ぶと同時に、沢山の若い男性の求道者を上手に指導しています。もちろん言葉はもっと十分に習得すべきですが、大変楽しくやっています。

ファザー・アレンは11月末までファザー・ストロングの仕事に加わりませんでした。

この新年早々の十日間、二人は私のところにやってきました。新年はいつものように東京の修女会での静想で始めました。私たちはこの神戸の家で長老たちの静想をしました。参加者は十人でした。韓国で御用に当たっているアメリカ・コ

ウレイ・ファーズのファザー・モーゼに指導をお願いしていましたが、クリスマス前の少し前に気管支炎にかかり来られませんでした。それでわかに私が代行することになった次第です。

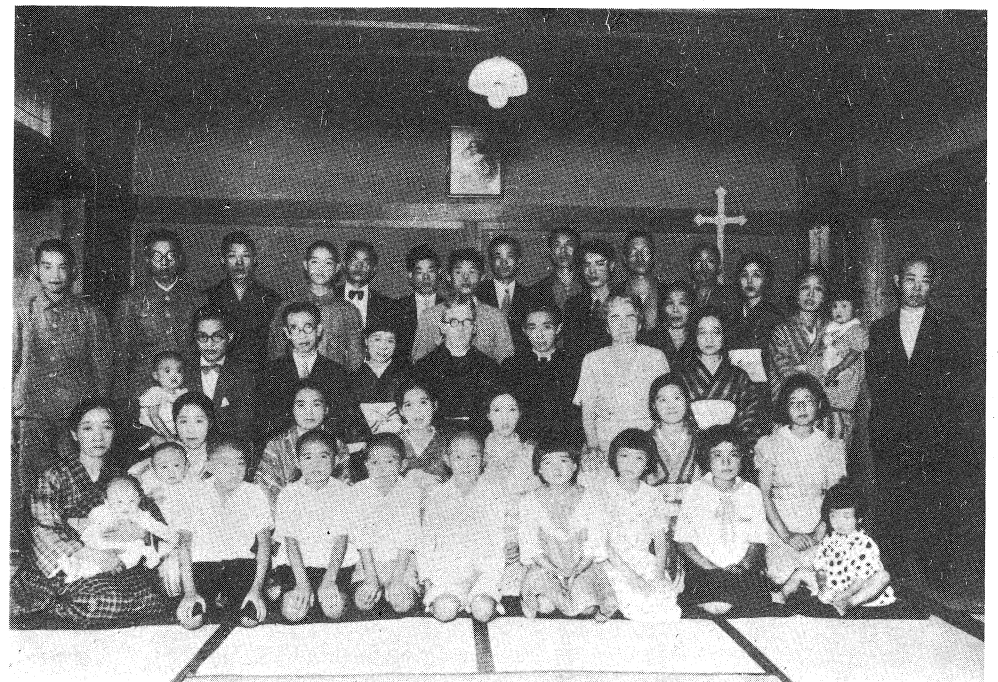
1月7日、8日恒例のS・P・G会議を開き、その後皆それぞれの持場に帰っていきましました。ファザー・ストラックスは日本語の勉強に一生懸命で、あまりいやがってはいないようです。

病氣療養中のミス・カルについては新しいニュースはありませんが、イースターまではミス・ケニオンが帰任してくることを期待しており、そうすれば二、三ヶ月間はC・M・Sの宣教師ミス・ローレンスを除いて、地方部では誰も休暇中のものはいないことになります。

私たちは皆、ミセス・ジョンソンとミス・ジョンソンを懐かしく思っています。あのような立派な働きのために、フェローシップに二人がいてくれたことは素晴らしいことだったと思っています。

最後に、4月の総会のため、ご支配下さる神のお導きのために、特に熱心に祈って下さるようお願いいたします。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル



【下関のストロング師、一人おいてミス・ホームズ。1938年頃】

書簡 第15号

一九二九年(昭四)四月二十三日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ経由

私の友人ご一同様

私は、この手紙を書くのを日本聖公会総会が終わるまで待つておりました。復活後第一主日から十日程私は東京におりました。先ず最初に主教会と各種準備委員会が、その後で日本聖公会の全聖職及び教役者の大会が、そして最後に四日間におたり総会が開催されました。この手紙がお手許に届く前に、これらの会議については、チャーチ・タイムズ紙で読みになることでしょうかから詳細を書くのはさしひかえます。

来年のランベス会議に提案される議題としては、他の宗教団体が特に関心を呼びそうです。私は条件つき議案といえどもこれには反対投票をしました。しかし総会がはじまる前に私が思っていた以上にこれを注意深く見守ることが必要のようです。

大半の宣教師は学校の仕事があるため参加出来ませんでした。が、神戸地方部(註：教区)からは、全聖職と伝道師及び婦

人伝道師達が大会全期間中東京におりました(一、二の例外はありましたが)。アレン司祭と一緒に大会に出席していたストロング司祭は総会が終了するまでおりました。それから後、下関に帰る前、神戸に二、三日立ち寄りしました。

皆さん方の中には、ミス・ケニオンが両眼を手術されたというところをご存じの方もおられることと思います。手術後の経過は良好で、医者がどこでももう一度働けるといっています。その彼女からの手紙に、言い尽くせない感謝をしております。しかし、このことは確実に彼女の日本への帰任が大幅に遅れるということでもあります。ミス・ケニオンが手術を受けたということをおぼえて耳にして間もなく、ミス・カルの日本への帰任に対して許可が出ないというS・P・Gからの公式文書を受け取りました。これには私達全員非常に残念に思っています。最終的には、彼女が故国で再度働けるだけの健康体になることを期待しておりますが、健康回復が非常に遅いということから帰任不許可はやむを得ないことだったでしょう。現時点では彼女の働きの場を補充する者についての連絡はありません。どうぞミス・カルとミス・ケニオンの二人を皆さんの祈りの中におぼえて下さい。

ミス・パーカーは3月に退職して帰国しました。彼女は自給宣教師でしたので、彼女の穴埋めを出来る者は誰もおりません。彼女はミス・バーバーに後を託しました。ミス・バー

パーは言葉その他の点ですぐれた人です。しかし云うまでもありませんが私達皆にとってミス・パーカーのもつ豊富な経験、アドバイス、辛抱強さを失うことは非常に残念なことです。彼女は来日以来四十年の間働いてくれました。私は故国でミス・パーカーが、何らかの形で後援会を助けてくれることが出来るものと期待しております。

以上書いて来ましたことから生ずる人材の不足ということ以外にも、ケテルウエル司祭と私とが同時に帰国することは非常に難しいということがあります。こういったことから、今年の夏のはじめにケテルウエル夫人と子ども達が帰国しますので、ケテルウエル司祭が同時に休暇帰国し、私がランベス会議出席のため帰国する前、つまり来年の復活日迄に帰任できるようにS・P・Gの許可をもらいました。ケテルウエル司祭は、夏すぎまでは会合等でのお役に立つことはむづかしいと思いますが、後援会の年次総会（10月23日）では話が出来るものと思っております。しかし、彼の働きを続ける人はまだ決っておりません。

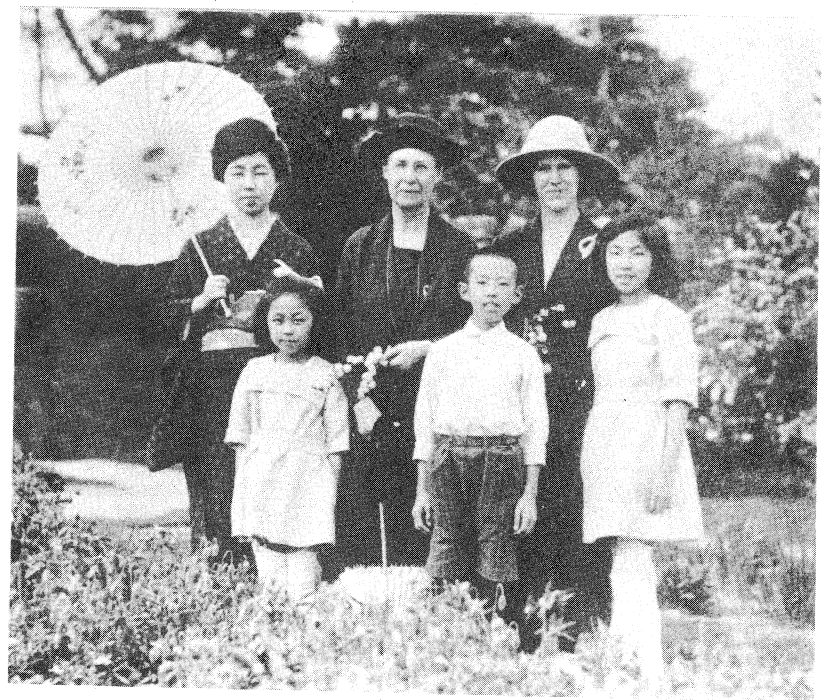
過去三ヶ月の間に、私達は松蔭女学校の長期展望を作りました。現在使用中の土地は実のところを申し上げれば2月の終りに売れました。今後一年間は使用してもよいとの条件つきです。そしてこのことからおよそ二週間後に新しい用地を購入しました。これは私が以前から欲しいと思っていた土地

からそれ程遠くないところです。

四月のはじめに東部郊外地が神戸市と合併しました。それによって神戸市の人口はさらに六万人程ふえました。新都市境界線が出来ましたが、御影はその中には含まれておりませんが、新しく購入した学校用地は新都市内に含まれております。ここは青谷と呼ばれている所で「青い谷間」という意味です。すぐ隣には小さな建物があるだけです。背後には美しい山があります。万事順調に進んでおり、グロスター卿が来神された時に定礎をしていただくよう準備が出来るわけです。

グロスター卿は、今上天皇へのガーター勲章を持って来日の途上にあります。グロスター卿は5月20日の夕方、瀬戸内海から船で神戸に到着されます。その夜は知事と市長主催の歓迎会に出席され、その後は在神英国人主催の舞踏会に出席されます。そして翌日のお昼頃迄に神戸から大阪に向かわれます。グロスター卿はこの神戸から大阪に向かわれる時、三ヶ所訪問されるよう日程が組まれております。その一ヶ所が私達の学校で、定礎のため青谷に立ち寄られるということなのです。

新用地は今の校地より三倍以上の面積があります。今年のはじめから4月までの間に、皆さんは学校基金に百ポンドを新たに下さいました。これによって私が必要としてい



【中央にミス・パーカー。1924年】

る一千ポンドのうち三分の一近くがすでに私の手許にあることになります。これには大変感謝しております。

東京にいる間に、私は二人の神学生と話しをしました。彼らの次に入學した者は、第一年目を終えたところで最初の成績表をもらいました。その次の者は今月神学校生活をはじめましたが入學試験はいい成績でした。しかし一番最初に入學した者は二年目の終わりに入っておりますが（復活節で学校にいない間に）肺結核が発見され早く、しかも長期の療養を命じられております。どうぞ彼ヨハネ古田のためにお祈り下さい。肺病というものは、幾分日本人の習慣や生活様式や、彼らが非常に恐れていることも原因なのですが、日本では恐ろしい流行病であるということは皆さんよく知っておられるものと思います。このことは、姫路からそれ程遠くない海岸に建てられている大きな結核療養所での私達の伝道活動が、徐々にではあるが前進しているということを皆さんに知らせなければと私に思ひ起こさせました。第一回目に接手をした二人の男性も含めて、私は復活日前にここで六人の患者に接手しました。これまではここでの働きの全ては婦人達に對してでした。

私が特に関心を寄せたものですが、大斉中に行なったもう一つの接手式は、聖ミカエル教会で十一名の女学生に行なったものでした。この中の九名は松蔭女学校の生徒でした。今、

松蔭寮には非常に熱心な者のグループが出来ております。

東京での会議への往復の途中、何日間か主教邸に滞在したストロング、アレン両司祭によって主教邸と下関の牧師館との間に思いもよらなかった交わりの時がありました。東京での会議と正月に二人は主教邸にやって来ましたが、その中間頃私は彼らの所に出かけて行きました。下関で接手があったからです。そこでこの機会に私は下関に三日程滞在しました。そして日曜日の礼拝、説教でストロング司祭を助けてやりました。故国の皆さんにとって、来る週も来る週も日本語で同じ会衆に来日以来三年目も、彼が説教してきたことの大変な困難さを知っていただくという事は非常に難しいことです。こんな状況にあっても、彼は受苦日には日本語で「三時間」の礼拝を守りました。ストロング司祭が神戸滞在中のこの前の日曜日に、アレン司祭はじめて日本語で説教をしました。が、ストロング司祭はまだ説教壇にはのぼったことはありません。

この時の下関からの帰路、私はめったに使わないコースで帰って来ましたが、真(ま)ことこの福音伝道にはよい機会でした。私は下関と広島との中間位にある小さな港から汽船に乗り、一晩の間に四国に渡るという計画を立てました。しかし時間について間違いをしでかしました。船に乗り遅れたのです。そのため神戸に帰るための次の列車に乗車するのに五時

間待たなければなりませんでした。

ものすごく寒い夜で、少し歩き回った後で、小さな国鉄駅のストロブのそばに坐って待っていました。田舎の人達がぼつぼつやって来ました(彼らの中には列車が到着する一時間時には二時間も前からやって来る者もあります)。そして暖をとるためにストロブのまわりに集まって来ました。勿論、彼らは外国人について話しました。一つの見方として彼らは、私のように大きな体ではないへんではないだろうかという思いをいだいておりました。私は彼らの仲間入りをし、話し始めました。

彼らが、西洋人は何故日曜日を休みの日としているのだろうかという事を問うてきたのを機に、徐々に私は「イエスとよみがえり」について彼らに説明することが出来ました。私は印刷物等は持っておりませんでした。またその近くではキリスト教伝道は行なわれておりません。そういったことから、少なくとも目に見える形に於いて長く続く交わりが出来ないことに恐れをいだいております。私がともにいた限りにおいては、彼らのうちだれ一人としてこれまでにキリスト教の福音を耳にした者はおりました。

ともあれ彼らのために、また、未だキリスト教伝道の働きがなされていないこういった地方に住む多くの人々のために、復活の主がその永遠の生命を彼らにもたらして下さるよう

また主が私達を、主のために働くようにと召されたことにおいて私達が主を悲しませることのないようにと、お祈り下さい。

日本ではあらゆる所において可能性は限りなくあるように思えます。ともあれ、私達が出かけて行き、一生懸命に働くならば「刈り入れを待つ汚れを知らない田畑」ともいえる多くの場所があるというはつきりした印象を私はもっております。この点については、この地方部では特に山陰が挙げられます。

山陰は前にも書きましたように、私達の働きはC・M・Sミッションと関連しております。かなりの長期休暇が終わり、昨秋帰任してきましたC・M・SのJ・G・スコット司祭とその夫人とが山陰の米子で皆の中心となっております。

「米子」にはかなり力のある教会があります。この教会には彼ら自身の日本人司祭がおりますが、クリスマス以降病床に伏しており、未だによくありません。三十キロ余り北に行った「境」には若手伝道師がおりましたが、彼はここでの任務を解かれ、九州地方部の教会で働きを始めております。ここは彼の郷里からそれ程遠くない所です。また境での彼の働きの穴埋めをする人が、すぐに与えられるという期待は全くありません。しかもこの境の周辺には多くの小さな町や村があり、こういった所にはクリスチャンや求道者、さらにはキ

リスト教の教えを聞いたがっている人が沢山おります。スコット司祭は彼の限界以上の働きをしなければならないのです。海岸線から沖合に九十六キロ程行った所には隠岐諸島があります。ここには小グループのクリスチャンがおりますが、

この一年間誰の訪問も受けてはおりません。今はこういう状態ですので、多分スコット司祭は彼らの所に行くことは出来ないと思われれます。しかも、天候が悪化すれば一週間そこに釘付けにされる危険もあります。スコット夫妻、病める日本人司祭、この地方でのあらゆる働きをおぼえてお祈りください。

山陰路の西のはしには、引退したC・M・Sの宣教師でミスナッシュがおります。彼女は年金で生活をしており、好きな働きを続けるために一ヶ月程前日本に帰って来ました。今は浜田で落ち着いております。浜田にも米子にも私達の宣教師を除いては西洋人は一人もおりません。

皆さんの主にありてのご加禱、特に総会に対するご加禱に感謝します。

いつも皆さんに感謝している友である

在神戸主教 中バジル

書簡 第16号

一九二九年(昭和4)七月二十二日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

平和であるならば、シベリヤ經由

私の友人ご一同様

書簡十五号を出してからまだ三ヶ月たっていないませんが、シベリヤ、満州の国境線上に派遣された軍隊が、シベリヤ・ルートを封鎖しておりますし(もし今日そこが鎮静させられていなければ)この書簡は遠まわりをさせられることでしょうか、これまでに以上に受け取られるのに時間がかかるのではなからうかと心配しております。

私達はまた、ケテルウエル一家もさぞかし不安であろうとちよっぴり心配しております。彼等はシベリヤ經由で7月8日に故国へ向けて神戸を出立して行きました。私はムクデンから10日の日付のついた葉書を受け取りました。彼等が大幅な遅れなしにモスクワを通過した物と思いますが、事態は彼等にとってはそれ程よくはなかったのではないかと思っております。

日本語学校の二年目の試験を終えたところで、アレン司祭を神戸に呼び戻しました。彼を御影の伝道所に派遣し、ケテ

祭をその人達に紹介するために、二人は連れ立ってこの人里離れた村に出かけて行きました。私も彼等と一緒に行きました。三代目の三人の息子達に接手するためでした。

私達は先ず市電に乗り、それから長い距離を列車に乗り、次に大きな村まではフォード型バスで行き、村の宿屋に宿泊しました。ここから農場までは谷間の斜面をおよそ二・五キロのぼります。一般論を申し上げるならば、彼等は彼等の家に司祭を泊め、伝道説教を聞かせるために近所の人達を呼ぶのが普通です。しかし、このたびは大柄な主教と二人の司祭とでは狭過ぎます。そこで私達は、夜は村の宿屋で泊まることになりました。全く家族内のことである按手式に、近所の人達を呼ぶということはしませんでした。どちらも例外的なことではなく、近所の人のうち誰一人として改宗した者はいないという事は、申し上げる必要があることでしよう。このことは時かれた種が実を結ばないということではなくて、日本では、特に山村では霊的土壌がいかに気難しいか、そして実を結ばないかという事を教えてくれる一つの実例といえましよう。同時に、この一軒のクリスチャン・ファミリーは、永年しっかりとした信仰を持ち続けているということも申し上げたいのです。どうぞこのクリスチャン・ファミリーのために祈り下さい。

皆さん方は学校に関する計画がどのように進行しているか

ルウエル司祭の休暇中彼の働きを継続してもらおうと思っております。アレン司祭は私と一緒に住むことになりました。これで、どちらも一人で生活することはなくなるわけです。またストランクス司祭は、夏の終わりに下関のストロング司祭と合流することになり、そこで二年目の日本語の勉強をすることになっております。

御影勤務の司祭は同時に二つの田舎の村の牧会もしなければなりません。これ等の村にはクリスチャンがおります。一つはそれ程遠くない所で「名塩」というところです。もう一つは丹波地方で、九十六キロ以上北に行った所にあり、日本列島を縦に走る山脈を越えたところにある孤立した谷間の小さな村です。ここに、他の場所で改宗し、二十五年以上養蚕で生計を立てている夫婦がおります。この夫婦の間の息子と奥さんとその子ども達と三代がクリスチャンです。ケテルウエル司祭と彼の前任司祭達は、年に六回程彼等に聖餐をさずけてきました。これは回数としては多くはありません。そのわけは、蚕が餌をたべはじめると何ヶ月もの間農家では誰も大いそがしになるということです。どの部屋も蚕に占領され、夜昼を問わず餌を与えねばならず、家族は交代で隅の方で数時間眠るだけです。

アレン司祭は、ケテルウエル一家が英国に向けて出発する二週間前に神戸にやって来ました。そして土曜日にアレン司

についてお知りになりたいものと思います。

グロスター卿は神戸にはお見えにならないという英字新聞の報道がありました。グロスター卿は来神され、私達の学校の定礎をして下さいました。グロスター卿は神戸には合わせて二十四時間もおられなかったのですから、卿のためにはこの報道はよかったと思っております。卿のお供の方々もやって来ましたし、日本人の知事、神戸市長も来校されました。定礎を済ませ、素晴らしいお話をされた後、ある老日本人大工から象牙細工を受けとられ、この学校の一人の生徒の英語による歓迎の辞を受けられた後、場所を移され、学校の本館ホールへの入口正面になるとされている所に記念植樹をされました。

このように申し上げてきて、この定礎以外には建物はまだ全然出来ていないということを申し上げると、皆さん方はびっくりされるかも知れません。しかし日本ではこういったことはびっくりするようなことではないのです。この手紙を書く前に署名入りのはっきりした契約書を手にすることが出来るものと期待しておりました。今月末までには整うものと思えますが、これすらまだ出来ておりません。ともあれ、既に内四百ポンド以上頂いておりますが、千ポンドをいただくことが出来るならば代金支払いの見通しは明るくなって来ているといえます。こういったことから、かつて抱いていたより



【グロスター卿による松蔭の定礎式。1929年】

もずっと明るい気持で夏休みを迎えることが出来ます。女性宣教師館と女子寮とを切り離す計画もまたうまく進んでおります。次の手紙では計画に関する詳細を書きます。日本人の考えにもとずく大袈裟なものは中止することになっておりますが、当局の求めに応じ得る実用的な素晴らしい建物をと私は考えております。

八代司祭は八月の下旬頃帰国するものと思います。彼が船で帰国の途につく前に皆さん方は彼とお別れをされたものと思います。彼が帰国すれば須磨聖ヨハネ教会の牧師になるはずです。彼が英国に行くまでは彼はこの副牧師でした。

これと合わせて二、三の移動を行なうつもりです。この移動で、緒方夫人は下関から帰れるかも知れないと思っておりますが、ミス・ケニオンの帰任がさらに延期されるとの知らせにはがっかりしております。徐々に回復はしているようですが、いまだ帰任のための医者の許可が出ないのです。

病気の神学生であるヨハネ古田はまだ結核療養所に入院中です。米子の牧師であるヨハネ栗飯原はまだ健康になったという兆しがありません。二人の若い神学生はともによくやっております。二人は夏休みに入った最初の二週間を神戸で過ごし、聖職、教役者の働きを学習することになっております。ほんの一時的なことで願ひ、確信していたことが起こってしまいました。確かに一時的なことなのですが大きな損失で

す。神戸の女子修道院が6月下旬に六ヶ月間の閉院に入ったのです。修女達は一般の面、特別な面と双方に於て影響を与え始めていました。これについては表現することが難しいのですが、確かなことです。この手紙をお読みになれる方の多くは、パリッシュ又は地方部(註・教区)内に修女達がいるということは違和感を生ぜしめるということ覚えておられることでしょう。しかし閉院をするということは、十人の小さな黒人の子ども達が一人だけになってしまったように、今は霊母を含めて修女達の人数が、病気とか必要な休暇ということで残ったのは一人だけということまで減っている東京にある日本の本院のためにしたことなのです。しかもこの一人は手術を受けなければなりませんでした。加えて手術後の経過は思わしくなく今月再入院しております。孤児院や刺繍学校等が続けることが難しいだけではなく、礼拝や祈りという本来の生活が不可能なのです。今年の終わり頃までには神戸にもどって来て、修道生活が可能だけの十分な「応援」があるものと私は心から思っております。

私は以前手紙で、公立高校つまり一般には各県又は地方にある中学校と大学との中間の学校で英語を教えるために来日した一人に孤独な英国人について書きました。こういった人達の一人で、私が初めて神戸にやって来た時山口で教えていた司祭でウィリアム・リチャーズという人がおります。彼は

ずっと以前に私が来日した時には日本で宣教師として働いておりました。しかし戦争の末期には、今申し上げてきた公立学校で教師生活に入っております。一年半程前に山口での働きを終え、英国にしばらく帰っておりますが再び来日し、このたびは「松山」に赴任してまいりました。松山というのは四国の北西部地方の中心地です。神戸地方部(註・教区)に關しての覚え書きのある小冊子をご覧になれば、この地方にある唯一つの聖公会の教会は「大洲」と呼ばれている地方都市にあるのみということがおわかりでしょう。松山にはいつも一、二のクリスチャンホームがあるのですが、フォード型バスで行くには(鉄道はありません)大洲にいる日本人司祭にとつては費用がかかり過ぎ、時おりしか行くことが出来ないのです。

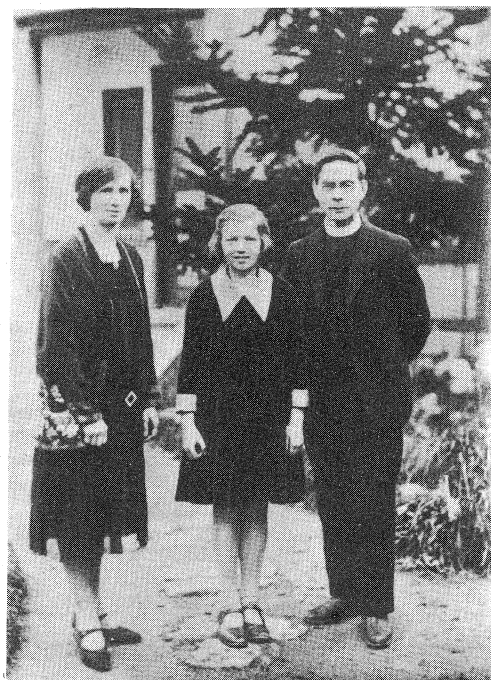
しかし昨今、按手で大洲に行きました時リチャーズ師は、神戸に帰る途中私が彼のところに立ち寄り一泊することが出来るならば、礼拝に数人の者を呼び集めることが出来る、といったことを書いた手紙をくれました。

私達は松山のある敬虔なクリスチャン・ファミリーの家で礼拝をしました。そこに着いた時、ある青年に、初対面の人に日本語でアイサツをするようにアイサツしましたら、その時この青年は「私は二年前九州地方で先生が按手をされた時に先生にお会いしていますよ」といいました。数分た

【追伸】 皆さん方に病者のための代禱をお願いした時、私は神戸のミッション・ツリー・シーメンのチャプレンであるフレドリック・ワッツのことを書き落としておりました。彼は三週間程前にヘルニアの手術を受け今は快方に向かっております。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

ようにこの日、特に彼をおぼえておいてください。
またもう一人、C・M・Sの伝道師が執事になる準備をすめておりますが、聖ミカエル日前に試験をすませることが出来るかどうか私にはわかりません。



【リチャード師と家族。松山で1932年】

ってからまた別の青年がやって来ました。彼に対しても私は同じようにしたのですが、この青年も「先生！ 私は昨年先生が姫路で接手をされた時にお会いしました」といいました。私はどの大都市に於いても働きがなされていないことによつて、どんどんクリスチャンを失っているということの実例としてこのことを書いているのです。もし松山にリチャーズ師が行っていないければ、このような青年達は教会から消えていたか、そうでなければ他教派に行っていたことでしょう。こういったことで私達は年々信者を失っているのです。

リチャーズ師は学校の先生です。ですから松山では伝道活動に時間を費やすことも彼の地位を利用することも出来ません。しかし、私がそこを訪れた時から彼は週一回の礼拝を開始しました。自由に使える時間には彼はここの小グループのクリスチャンに働きかけをしております。この小グループが教会の中核にまで発展して欲しいと彼は願っております。彼は一人の信者の家で毎主日聖餐をささげております。今では十人位の平均出席者があり、小さな家を借りて欲しいし、伝道者を派遣して欲しいと私に申し出ております。私達が三年前に下関で行なったように、このためのベストを尽くしたいと思っておりますが、さて……。

もう一つ是非お知らせしておきたいということがあります。当地での私達の働きのバックボーンとなっているS・P・Gは

収入が「おちて」おります。ということはあちこちでの援助を減らす準備を始めているということです。神戸地方部でも年間四百ポンドのS・P・G援助が減らされます。どうすればこれから生ずる損失を最小限にしたいとめることが出来るかというところで、私達は当地の委員会でも頭を悩ましております。私は世界中の委員会が同じ苦しみをもっているものと思っております。来年のランベス会議に出席するS・P・Gの援助を受けている全主教は、S・P・G側と会議を開催し、この問題についてどんなことが出来るかを検討することでしょう。とはいってもその当地に対する四百ポンド減は確定したことはありません。スタッフを減らし減額分を捻出しようとする方法をとることでしょう。こういったことからどのようにしてカットすればよいかの決定に知恵と導きが与えられるようにお祈り下さい。幸いなことには今受けている年間援助はまだへらされてはおりませんし、来年も大丈夫でしょう。ですからそのことが始まる前に校舎建築を着工したいと思っております。

この前に聖職接手をしてから二年程の年月が経過しました。聖ミカエル及び諸天使日は今年は日曜日にあたり、この日接手があります。二年半程前に私が執事接手を行なった当時六十才であった勇気のあるC・M・Sの伝道師が、この日司祭に叙任されます。バルナバ吉本という人です。彼の主教と同じ

書簡 第17号

一九二九年(昭4)十一月六日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ經由

私の友人ご一同様

この手紙が遅くなり申し訳なく思っています。その理由は一つには、いつも以上に旅行続きであったことと、もう一つは、学校の建物とその建築費について皆さん方にもう少し詳しくお知らせしようと思って、財務委員会が開かれてその詳細がわかるまで待っていたからです。煉瓦やモルタル(あるいはそれに類するもの)や支払いに興味のない方は、これから詳細にお知らせすることをしばらくご辛抱下さい。

私たちは2月に、現在の敷地を一万四千ポンドで売却しましたが、以後一年間は私たちにまだ所有権があります。新しい敷地の値段はそれよりも一千ポンドも上でしたが、私たちはそこを買ったとき支払いました。そして、8月1日、主な建物の建築契約が成立したとき、私たちは六千ポンドの資金を持っている計算でした。しかし建築の契約は、その他の費用も合算して一万五千ポンドになります。私は学校管理職の人たちに、差額の半分を工面する約束をしました。日本人の

出資者たちは残り半分の募金すると約束してくれました。両方が四千五百ポンドづつ集めることになります。この土地建物はミッシェンの財産ではなく、学校を管理する人たちのものです。半数はミッシェンのメンバーであり、あとの半数は日本人です。

ところで、私たちは新しい校地に隣接する土地に、新しい女子学生寮と学校の外人宣教師のための家を建てています。これらの土地建物はミッシェンのものですから、その代金は全額私たちが支払います。この土地は学校の土地と同時に購入しました。そして、建築契約は、最初の費用と税金、その他いろいろな費用を含めて二千七百ポンドになるでしょう。そのうちSPGとSPCKから予定されている援助金を含めて、二千二百ポンド手に入ると思いますが、残り五百ポンドを集めなければなりません。

学校の主な建物のために約束した金額にこれを加えると、私は年末までに五千ポンドを集めなければなりません。

しかし、皆さんは次のことを聞かれたらほっとされるでしょう。私のよく知っているある人(名前を出さないでほしいといっていますが)が、もし私とその金額の半分を集められたら、あとの半分を出そうといってくれているのです。彼はその金額に達するまでは、募金額を二倍にしてあげようといっています。

今年のはじめに、私は神戸フェローシップに、学校のため一千ポンドを募金するための最善の努力をして下さるよう依頼しました。一ヶ月前までに(「十月セール」及び、皆さんが一般的な目的のためにと私に使途を委任して送ってくださったものを含めて)皆さんはそのうち七百五十ポンドを集め、今度も多分もう少し集めて下さったでしょう。皆さんがとてもよくやって下さったと思っています。

いろいろな形で私が受けとった贈り物や寄付金(神戸フェローシップ以外の)は合計七百五十ポンドです。そして、私の引出せる二、三の貯金が他に六百ポンドあります。合計二千ポンドで、これが二倍されると四千二百ポンドになります。残りの四百ポンド(二倍で八百ポンドになります)が今年の末までにできるとはあえて望みませんが、もし皆さんが今まで通り援助を続けて下さるなら、私が帰国するまでに、希望の額に達すると確信しております。

ながながとこんな説明をしてすみません。しかし私は、皆さんが状況を詳しく知るべきだと思ったのです。日本人は彼らの責任を果そうと働いています。彼らが建築契約の完全な支払いのため、相当な金額を借入れしなければならないのは明かです。学校は毎年順調に回っていますし、ローンを順次返済していく彼らの能力については疑念は持っていません。

その間に全ての建築はどんどん進行しています。私たちは、

学校の土地が健康的で、周囲の自然環境の美しいのを何より喜んでいます。新しい学校の向うの丘の上から神戸港の眺望を収めた今年のクリスマス・カードを手に入れたと願っております。

八代神父が元気に帰国しました。旅行の大半をウイリソン夫人と同じ船で過ごしたのです。彼女は世界大戦中アメリカ大統領であったウイリソン氏の夫人で、彼女のいとこは東京にある大きな聖公会の病院勤務のミッシェン・ドクターです。船中で、八代神父はただ一人の司祭でした。彼は定期的に聖餐式や他の礼拝を英語で司式しました。日本の船なのに、聖公会の礼拝のために、式服もふくめて十分な用意がされていたことは面白いと思います。

彼は、須磨の「聖ヨハネ教会」で働きを始めました。この教会は彼の留守中、定住司祭がいなかったのであまり活発ではありませんでした。どうぞ彼のため、須磨での彼の働きのために祈り下さい。

先月、北四国の「大洲」への毎年の訪問の準備をしていたとき、大洲の司祭が、だれかが私に同行して、訪問と同時に特別伝道説教会を催すことはできないかといってきましたので、八代神父が私と同行しました。

日曜日の朝の聖餐式における堅信式の他に、土曜日の夜と日曜日の夜、熱心な会衆とともに大変いい伝道礼拝をしまし

た。私たちは、四国の西海岸の港までずっと船で行きました。そこから大洲まで軽便鉄道があるので。船旅は十八時間かかり、大部分夜の航海でした。満月の夜で、瀬戸内海の島々の間を通り過ぎるのは息をのむような美しさでした。

大洲からフォード社製のバスにのり、引き返して県庁所在地の松山に行きました。しかし、道の途中で前の晩に山崩れが起きていたのです。出発のときには全然そんなことは聞いていませんでした。山の半分が崩れ落ちて、道路を横切り、反対側にある小さな部落の端の家を壊したのです。この家にはまっすぐに立っている柱一本が残っており、家内安全の地方の神社のお守りの札が貼ってありました。私たちは皆下車しなければなりません。バスは障害物を乗り越えようと突進しましたが、どうしようもなく、はまりこんで動かなくなりしました。

四、五人の人が（ケラムで力持ちという評判の高かった八代神父を含めてです）バスを持ち上げて元の固い地面に引き戻しました。そして幸いなことに、他のバスが反対側からやって来ました。そこで旅客たちは互いにバスを乗り換えて旅を続けました。しかし半時間の遅れのため、私たちが松山からの汽車に間に合うかどうかあやしくなりました。そこで曲がりくねった道（日本の道路では数え切れない位です）を通り、村々を抜けて、ぞっとするようなスピードで車を走らせ、あ

と三分というところで汽車に間に合いました。そこから八代神父は私と別れて岡山に行き、その司祭である彼の父とその夜を過ごしました。彼の父は8月かなりひどい日射病にかかったのですが、今はすっかり良くなったことを申し上げておきます。

この前の手紙で、松山にいるリチャーズのおかげで、松山に好機が到来したことをお知らせしました。私はリチャーズ博士のところまで二晩泊まり、一軒の信者の家で六人に接手しました。他に全部で十二人の人々が出席していました。

一年前の最初の礼拝では全部で僅かに六人だったのです。そこにいた二人の青年は非常に熱心でした。ある日曜日の午後、彼らは郊外の森に散歩にいき、そこで近くの村から来た一人の籠作りと話をしました。その結果、彼の家で毎週定期的な礼拝をすることになりました。大変貧しい家ですが、やがて日曜学校も始まり、いま二十人の子供たちが来ています。二日目の晩に私たちはそこへ行って礼拝をしました。彼らは日曜学校の子供たちをみな中に入れて、最初に讃美歌を歌わせました。そのあと十二、三人の大人がやってきて小さな礼拝をしました。この村で親しくなった人たちは皆貧しい人たちです。その籠作りの人の家は、障子で仕切られた二間きりの家で、礼拝のとき彼は障子を外しました。彼は一ヶ月以上何も売れなかったのですが、礼拝のあとで、やって来た人

皆に日本茶とスポンジ・ケーキを振舞いました。こうした全てのことは私たちに、ますます、この成長していく働きを助けなければならぬと決心させました。

しかしこれは宣教師たちが語る例の中でも、特に恵まれた状況の例です。日本においては今、前より福音に対して扉が開かれています。「汝ら、収穫の主に願え」……この問題全体は私たち働き人、特に若い働き人の不足（伝道資金の不足の他に）という悲しい問題によるのです。今回はこの問題をこれ以上展開するのはやめますが、このつぎの手紙でも一度取り上げるつもりです。

皆さんは賀川さんについてお聞きになったことがあると思います。彼は数年前神戸のスラム街ですばらしい働きをし、そのことについて世界的に有名な何冊かの本を書きました。彼はこのような恐るべき環境で生活している間にかかった眼の病気のため半ば失明しています。

彼は最近、彼の時間の大半を伝道活動に用いるようになりました。彼のいうところによれば、日本のキリスト教は信徒の数が少ないため（現在やっと三十万人です）、本来あるべき姿より日本では弱いのです。彼は三年間の伝道活動でその数を三倍にしたいと望んでいます。彼は特定の教派に属する教職ではありませんが、イエス・キリストと十字架について説教し、いろいろな教派の数多くのアメリカ人宣教師に後援さ

れています。

ちょうど今日、東京でこの三年の伝道活動の開始を祝う大集会が開かれています。細かな点では彼らのやり方に同意できないところがありますが、彼自身は偉大な預言者です。現在日本に、私たちの主を宣べ伝える好機が到来しているという大きな希望の顕著な一例として彼をあげたのです。

さきほど松山の近くのある村について書きましたが、そのように扉が特に広く開かれているもう一つの地域は、北の海岸地方の「米子」周辺です。しかし不運にも、米子の日本人司祭がずっと病気がちなのに加えて、そこに赴任している宣教師であり、教区内でC・M・Sによって支えられている唯一人の聖職ジョン・スコット師が盲腸の手術をしなくてはならなくなりました。この前6月に手紙を書いたときから彼は盲腸を病んでいましたが、診断を受けてから、何かの理由で三回も手術を延ばされたのです。手術はとうとう諸聖徒日に満すべき状況で行われました。回復期ののち、この手術で彼はすっかり元気になるだろうと期待しています。

ワッツさんがすっかりよくなったこと、病氣だった学生ヨハネ古田が、9月の終りに非常に病氣がよくなり、療養所を退所して自宅療養をしていることを喜びをもってお知らせしておきます。

バルナバ吉本の司祭接手が聖ミカエル日にめでたく行われ

ました。私たちはその前に、彼のためにリトリートをし、神戸の聖職たちも皆いっしょにリトリートに参加しました。

若い伝道師のヨハネ片山も同時に執事になるはずでしたが、一週間前に突然一ヶ月の陸軍の予備役訓練のため呼び出されました。日本ではこういうことがよくありますが、ちょうどこんな時に、彼がこんな目にあつたのは気の毒です。私に残念がつた手紙をくれました。そして彼は、按手式が必要以上に延期されないよう願っていましたので、按手式を聖シモン・聖ユダ日に、彼の勤務地の呉で行うように手配し、前日の日曜日に準備のために静想日を持つようにしました。

広島日本人司祭と、広島・呉の双方の婦人宣教師たちが私たちと静想日をともしました。この司祭が会衆のための定期的礼拝の司式をしました。按手を受ける彼にとっては、前月、神戸で行われた正式のリトリートほど素晴らしものではなかったかもしれませんが、それでも彼は喜んでいました。

ミス・ケニヨンに、日本に帰任してもよいという医者許可が出たという嬉しい知らせを最近受け取りました。彼女は、今週英国を出発する船の予約をしました。彼女は今カナダを旅行していますので、クリスマス前には帰って来ると期待しています。

「セール」が成功だったことを喜んでいます。また例年の

書簡 第18号

一九三〇年(昭五)二月十八日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ経由

私の友人ご同様

この前の手紙から、また三ヶ月以上たちました。今度も遅くなった理由の一つは、松蔭女学校の管理者たちの会合を待つて、この学校の経営状態について一番新しい報告を入手しようとしていたからです。

最初に、新しい校地への移転は古い校地の購入者たちの同意をえて、今年末に行なわれることを皆さんにお知らせしなければなりません。学校の主要部分と婦人宣教師館、女子学生寮の移転はクリスマスと新年のあいだに行われる予定です。

新しい校地に少々趣を添えているのは、その一つの側にある松の木です。おわかりかと思いますが、この学校の日本名は「松の蔭にある学校」という意味ですから、この場所がまことに相応しいのです。けれども寮の女学生たちは(大部分がクリスチャンで、一部が未信者ですが)この松を大変こわがっていることがわかりました。彼女らの新しい寮はこの松の木のすぐそばにあり、彼女らは、この松に幽霊が何かがつ

定期の会合が素晴らしものであり、ケテルウエル神父を皆さんが暖かく歓迎して下さったことを喜んでいます。

この手紙は大分遅くなりましたが、それでも、皆さんはこれを受け取ってからクリスマスの手紙を書く余裕はあると思いますので、どうぞそうして下さい。

ただ宛名の一部として「シベリヤ経由」と書くのを忘れないで下さい。そうしないとクリスマスに間に合わないでしょう。6月に私が手紙を書いたとき、シベリヤ・ルートは十日かかっただけでした。それ以来、ルートはずっとうまくいっています。以前よりも通過するのに二日ほど長くなるだけです。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

いていると確信しているのです。

そこで私たちは、クリスマス休暇の初めの日、12月23日の朝、宣教師館と寮の祝福をいたしました。一つ一つの部屋を祝福し、最後に新しいチャペルを祝福し、そこで最初の聖餐式を行いました。その後、まだ設備のない食堂で朝食を弁当持参ですませました。それ以後、私の推測では松についての恐怖は消失したようです。

新年早々重大な泥棒事件が起こりました。泥棒は女の子たちの最上の衣服類をこっそりとねこそぎ盗んだのです。ちょうど朝の始業時で、寮はからっぽでした。泥棒が衣類を持って立ち去りかけた時、買物から帰ってきた年とった賄のおばあさんにばったりでくわしました。彼女は泥棒をつかまえて大声で叫びました。そして、人々の応援で全部取り返したのです。たいていの日本人は泥棒を本当にこわがりますから、これは特筆すべきことです。

学校の主な建物の祝福は1月9日、S.P.Gの宣教師たちの毎年の会議の終った次の日の朝行われました。皆このために神戸に一泊しました。今度は寮のチャペルでの聖餐式から始めました。そして朝食の後、主な式典を行いました。日本人の聖職たちが神戸市の教会からやってきました。全ての部屋に祝福の後に、講堂で式典が行われましたが、それはまだ完成にはほど遠い状態でした。六週間後に完成の予定だった

のです。霜や、その他の冬の気象条件のため工事は遅れていますが、3月末には完成すると思います。

最近の学校管理者たちの会合で、二千ポンドまでの銀行借入を承認しました。もっとも、一千七百五十ポンド以上は必要でないことを望んでいます。事業全体は日本人の責任です。

私は、私の引き受けた分を今月末までに完済することを約束しました。私にはそれができます。またミッシェンの財産、つまり宣教師館、寮と土地についての最後の支払いを昨日済ませました。もっともこの前の手紙で私が見積もった額より百ポンド近く多くかかりましたけれども、それは主として、地震の多い丘陵地での十分な安全のための整地作業に費用が余分にかかったためです。要請した四百ポンドは全部受け取ったのですが、普通の基金と、皆さんが聖パウロ・ギルドを通して学校のために送って下さった寄付金の二百五十ポンド全部を実際に使ってしまうことによって、このことが成し遂げられることになります。

私はそのようなお金と、昨年「主教の判断に任された」お金を全部使ったのです。そのことは又、S・P・Gからの送金がおある程度必要であるということです。

状況はこんな具合です。私は一九三〇年の初めから、この手紙がつくまでに、皆さんが、私の予測していなかった余分

の必要額一〇〇ポンドの全額を与えて下さることを期待しています。そうなれば学校のための私の募金はこれで終りです。これを始めてちょうど一年になりますが、皆さんからのすべての援助に対して言葉に尽くせないほど感謝しています。

このような援助の多くは真の犠牲によるものと確信しています。しかし、神戸フェローシップの援助に全面的に、また部分的に依存している小さな諸基金は重大な状況にあります。私は今、この手紙でその名をいちいちあげて皆さんに重荷を負わせようとは思いません。帰国したとき、許されれば口頭でこのことについて話しましょう。

私はいま特に、日本の教会を助けるために来日し、働いている海外からの聖職者たちに対する基金(例えば、ストロング神父はこの基金に完全に支えられています)と、日本人聖職養成のための基金への援助を望みます。この基金は建物のためではなく、生きた要員のためですから、私と同様、皆さん方にも喜んで頂けると信じています。

この二つの基金のうち、特にご指定のない場合は「主教自由資金」に寄付して下さい。

新年はいつものとおり、二つのレトリートで始まりました。一つは婦人宣教師たちのためのレトリートで、東京の修女会の建物で行われ、もう一つは、当地での宣教師聖職たちのためのものでした。今回は十四人の聖職が参加しました。これ

は今までの一番多い人数でした。指導はアメリカの Cowley Fathersの S・S・J・Eのモース神父でした。彼は韓国教区で働いており、私たちのために特に来てくれたのです。

いま何人かの教役者の異動や交代をし、またこれからしようとしているところです。ミス・ケニオンは12月初めに来日し、中旬に下関に赴任しました。日本人の婦人伝道師の緒方さんは、ミス・ケニオンの留守の間、下関へ代りに行っていました。神戸の葺合の伝道所で新年から働きはじめられるように、神戸に帰ってきました。その結果、ミス・ストークスの神戸での仕事の半分が減りました。あとの半分は須磨の幼稚園の仕事でしたが、ミス・バーバーが昇天教会の幼稚園の責任者に加えて、須磨の幼稚園の管理もすることになりました。それでミス・ストークスは勇敢にも松山に行きました。松山に彼女のために小さな家を借りました。この家は教会としても使われるはず。このようにして、この前の手紙で詳しく書いた松山の働きは、それを発展させるためのしつかりした教会のセンターを持つことになるでしょう。

最初に二ヶ月ほど、ミス・ペイリスが彼女といっしょに行きました。彼女をあまり淋しがらせないためであり、もう一方では、より完全な日本の環境のなかでミス・ペイリスに日本語を実習する機会を与えるためです。

彼女がいなかったために松蔭女学校で、他の二人にかかる余分

の仕事は、まだ完成していない新しい学校の一学期がまだ移行段階なのでだいぶ軽減されます。

学校に関連した伝道活動は進展しています。今年の初めから、少なくとも市内の三つの教会で、松蔭女学校の生徒が洗礼志願者になっているということです。生徒たちは勿論同じ教会に行っているわけではありません。住んでいる地域によって違います。

葺合のケッテルウエル神父が帰ってきたら、状況はさらに変わっていくはずです。彼は主教の不在中、当地のS・P・Gの代表者として責任を持ちつつ、御影の教会に帰任するでしょう。そしてアレン神父が葺合の主任司祭になるでしょう。彼は日本人の執事によって補佐されるはずです。この執事は市内のひどいスラム街で働いており、彼の仕事は、葺合からそちらへ転任する定住日本人司祭をもつことによってよりよくなるでしょう。

ちょうど同じ時期にストランクス神父が「山口」に転任します。ここは下関市のある県の県庁所在地です。下関は山口の三〜四倍もある町ですが、山口は教育の大きな中心地です。ストランクス神父が、山口でまず学校で教えることから始めて、リチャーズ師が松山でやっているような形で、土地の人々との接触を始めたらと期待しています。山口は私たちが他の場所に発展する中心地となるべきです。下関もまた、そ

ういう土地であることを示しつつあります。

ストロング神父は現在四ヶ所の集会の場所をもち、毎月聖餐式を行っています。一番最近にできた集会の場所は「宇部」という下関から三〇マイルほどの、瀬戸内海に面した急激に成長しつつある都市です。彼とミス・ケニオンはそこへ毎週行っており、大変熱心な人々がいますので、彼はその人々にスクラメントを授ける準備をしています。

松山は四国の北西地方の県庁所在地です。この大きな島の北東の一角にもう一つの県庁所在地「高松」がありますが、私たちはここではまだ働きを始めていません。私の古い伝道メモ帖には、十年前前に、ここで働きを始めることが緊急を要すると書いてありますが、私はここへ二度、英語での聖餐式をするために行き、英国人教師に聖餐を授け、一人の英国人の子供に洗礼を行いました。

昨年8月、ある日本人家族が最近ここにやってきたこと、その母親が聖公会の信徒であると聞きました。そこで、私は四国の南海岸での堅信式のあと、初めて陸路經由で帰神しました。四国は非常に山が多く、現在はこの島を横断してバスが運行されていますが、延延と長い距離、素晴らしい渓谷を通っていきます。この道の最後の部分は鉄道になっており、昨年夏、開通したばかりです。高松にいる家族は私をその晩泊めてくれました。翌朝、その家の婦人のために聖餐式をし

ました。彼女の夫は二十年前に洗礼を受けているのですが、按手は受けていません。重要な公職についているため、公然と信仰告白することを恐れているのです。そして子供たちも全く洗礼を受けておりませんでした。しかし今では、その訪問後、長男が洗礼の準備を望んでいます。私たち教役者は、岡山から汽車で一時間、それに船で一時間かけてそこへ行っています。そこに他に二人の受聖餐者がいることもわかりました。

八代神父が英国から帰ってきたときに、頼んだことの一つは、神戸と姫路の間にある明石の町にいる数人の信者たちと接触することでした。彼はそれをやってくれました。現在では、彼の司牧している須磨の教会と同様、毎週礼拝をそこで行っています。

あらゆる方面で、日本における働きは拡がり、さらに一層の発展が必要とされています。S.P.GとC.M.Sの両方とも援助金を削減しようとしています。私たちはどうすればいいでしょうか。すくなくとも私たちは、今得ている援助だけで出来ることをして、われらの主のため、もっと多くのことをなしうる力を与えられるように、祈りに祈らなくてはなりません。皆さんご存じのように、日本における伝道の進展は遅くまた困難でした。ですから今でも全体の信徒数は少ないのです。

しかし、一九二七年のこの地方部(註：教区)での堅信礼を受けた者の数は一九二六年の10%増であり、一九二八年は、一九二七年の10%増、昨年は一九二八年に比べて20%増加しているという報告は皆さんに喜んで頂けると思います。

いま必要なことの一つは、より多くの日本人の教役者を訓練することです。ミス・ホームズとミス・ボールズは岡山で婦人会については、この面で素晴らしい働きをしています。そして、そこで訓練を受けて二人の婦人が今年の夏から働きを始める準備をしています。今までは、このような働きをうまくやっていくのに必要な十分な資金がありました。しかし、男子の訓練については資金、それに人的供給の面でも不足です。S.P.Gの金をこれに割り当てようとする私の努力は、援助の「削減」を延期させるかも知れないことの一つです。私がこのことのために神戸フエローシップに特別の援助を望むのも、こうした理由からです。

病気の学生、ヨハネ古田も再び病気が重くなり、勉学の希望をとうとう断念したことは、皆さん方も残念に思うでしょう。どうぞ、もう一度彼のために祈って下さい。

東京の聖公会神学院に勉学に行っている他の二人の学生は、よくやっています。しかし彼らはまだ若いので、彼らが勉学課程を終えるまで、三、四年かかるでしょう。そして今春から実は、二人の新しい聖職候補生を私は受け入れようとして

います。私たちは何とか彼らを支えて行かなければなりません。私は神学院が与えようとしている長期間の教育を全く正しいことだと確信しています。これらの四人は、教区で教育している三人のC.M.Sの聖職候補生(C.M.Sにより援助されている)とは別です。彼ら全員のためにも、どうぞ祈って下さい。

北部の海岸地方で働いているC.M.Sの聖職のジョン・スコットとヨハネ相原が二人とも健康を取りもどしたことを喜んで御報告します。ケツテルウエル神父がそこへ帰任してから(夏の終わりまで英国に滞在しているケツテルウエル夫人は別にして)だれも地方部で休暇中の者はいません。そして私が帰国する以外は今年中、ずっとこの状態でしょう。

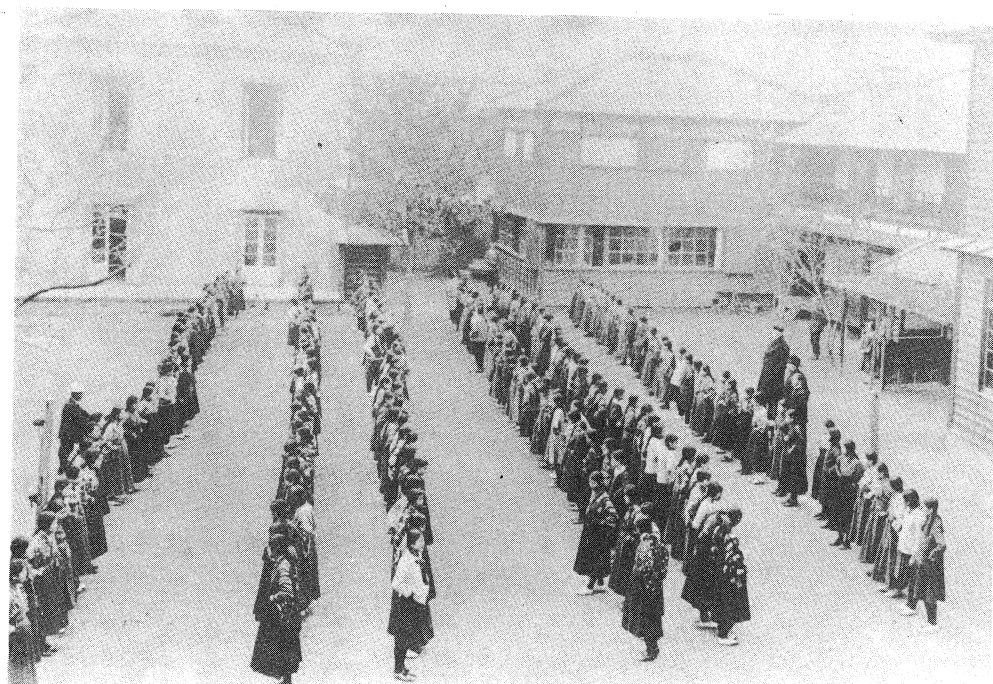
個人的なことを少し書き加えさせて頂くならば、私は5月中旬に日本を出発し、途中カナダと米国のいくつかの場所を訪問し、6月の終わりに帰国することを知っておいて頂くと思います。ホーズ神父は親切にもNWIOスナバフ街58の聖マリア・マグダレン教会の牧師館に私のための部屋を設けて下さるうとしています。

この住所はランベス会議中だけでなく、その後、私が英国中を駆け歩いている時にも最善の連絡先です。

出航前には大変多くの人々に手紙を書くのに忙しくなるのではないかと思います。今まで四年半の間、ご親切に新聞や

雑誌を定期的に送って下さった方は、イースター以後、たとえシベリヤ経由でももう送らないように注意して下さい。
 帰国したら、できるだけ早く、できるだけ多くの方々に
 目にかかりたいと思っています。

いつも皆さんに感謝している友である
 在神戸主教 中バジル



【昭和初期の松蔭の女生徒達】

書簡 第19号

英国滞在中のアドレス
 58, OSNABURGH STREET,
 LONDON, N.W.1.

私の友人ご一同様

最後の手紙を差し上げてから六ヶ月以上もたつてしまいました。次の手紙を書くかわりに、私は英国へ帰国し、6月聖マリア・マグダレン学院で皆さんから素晴らしい歓迎を受けることになったのです。それは、皆さんの熱心さの強烈な証しと、この五年間神戸地方部の上に注がれている祈りでした。私は言葉に言い表せないほど感謝に溢れております。

私は、これが処女航海の新しい日本船で太平洋を横断しました。素晴らしい航海で、予定より二十四時間も早くバンクーバー島のヴィクトリアに入港しました。そして、ヴィクトリア市内や近郊にいる二人の、かつて日本で働いた宣教師の家に泊まりました。その後、バンクーバー市に行き、数日滞在しました。日曜日の夜、ここにある二つの日本人教会の一つ、聖十字教会で説教しました。この日本人司祭は、以前神戸で働いていた人です。

十七年前、キャシリス・ケネディー司祭は、カナダの教会

から、ブリティッシュ・コロンビアで日本人クリスチャンに対する活動を組織するように頼まれました。そして数年後、彼は中国人に対する責任をも負わされることになりました。三ヶ月前、私がそこにいた時、四つの教区の中から彼のスタッフになった仲間は四十人近くになったと、彼自身から聞きました。私は皆さんに特にこのことを言いたいです。それは、日本帝国の外でも如何に日本人クリスチャンに対する活動が進んでいるかということ、そして、この働きを、病氣と苦痛をもとめせず英雄的にやっていたケネディー司祭が、6月23日急逝されたということです。私が彼に会った僅か三週間後でした。どうぞ彼の魂のために祈って下さい。そして、容易なことではありませんが、彼の働きを担ってくれるような立派な司祭が与えられますようにと。

東部カナダのいくつかの町や、米国のニューヨーク、ボストンに滞在した後、6月13日、ケベックを出帆、一週間後にリバプールに上陸しました。大西洋、太平洋の航海ともにかつて経験したどの航海より穏やかでした。

ランベス会議開会二週間前到着には少し遅くなったので、大急ぎでやってきました。会議について、ながながとお話するつもりはありませんが、ただ、委員会でも全体会議でも、私が少数派を支持したことを知っていただきたいのです。これは特に、決議録の11b、15と42についてです。私は、十年

毎にランベス会議が開かれる主な意義と重要性は、全教会の全指導者を引っぱっていくこと、そして私達に、世界に散在するアングリカン・コミュニオンは、神の栄光のため、魂の救いのため、神が用いて下さっている統一体だということを実感させることだと思います。

勿論、皆さんは後援会にとって、初代書記会計のミス・サンダースの突然の逝去がどんなに大きな損失であったかわかりです。後援会は彼女によって維持されていたのです。しかし、彼女が絶間ない痛みと病気の進行の中で、後援会の仕事や他の仕事を立派にやっていたことはご存じないと思います。一年以上前、彼女がこの仕事を辞めさせてもらいたいと頼まれたことがあります。しかし、ミセス・ジョンソンが書記の仕事を受けもって下さることになり、私のたつての願いで、私が帰国するまで会計の仕事を続けることに同意してくれました。彼女は、皆さんとの経緯を始めから知っていたのですから、全てのことを、彼女からよく聞いておくのでした。でも、もう叶わぬことです。しかし、私達は彼女の素晴らしい祈りを持っていますし、エラ・サンダースが後援会のためにして下さったことのゆえに、皆さんとともに神に讃美と感謝を捧げます。彼女が、永遠の光のなかで平安な休息を与えられますように。

英国に到着してすぐ、ランベス会議や全聖公会会議が始ま

る前に、私は、あらゆる面で交付金を減額しているS.P.Gの窮状を助けるために、S.P.Gによって支えられている全主教とS.P.Gの書記や本部関係者とは、S.P.Gと多数の主教会との協力について話し合うための集まりに出席しなければなりませんでした。

私は、この問題について我々ができるだけのことをしなければならぬと思います。私は、神戸後援会も、聖ミカエル祭のあと、我々の来年会計年度の初めから、例えば、韓国やアクラの主教会がやったと同じように、S.P.Gの支部になるべきだと提案しているのです。このことはとりわけ、今後後援会のお金はS.P.Gを通じて私に与えられることになるし、たれもJ.C.A.（かつて聖パウロ・ギルドとして知られた、日本教会援助会）を通じては派遣されないということを意味します。このことは又、我々後援会は、どこでも要望のあるところには地方支部を創立できるということも意味しています。一方このことで、J.C.A.、その他の日本のための働きに不快感を与えたり、ライバル関係になることなく、祈りの力と、増大する全聖公会の捧げものが、日本における主のお働きに加えられることを切に願っております。

このことをもっと詳しく、10月14日の我々の年次総会で説明したいと思っております。しかし、チャーチ・ハウスでの公開の夜の会合を、事務的な話ばかりでつまらなくしたくな

いので、S.P.Gに、この問題に関心のある後援会の会員のために、タフトン通り15のS.P.Gハウスで、3時半から午後の会合が持てるようにしてくれるように要請しました。

貴方がもし一つの会合にしかおいでにならないのなら、夜の会合に、友人を誘っておいで下さるようお願いいたします。会は午後8時からです。会の一時間前に、チャーチ・ハウスに軽い茶菓を用意してもらうように頼んであります。私も参って会の前に、皆さん一人一人にご挨拶したいと思っております。

日本をたつてから今日まで、三十六回も説教をしたり話をしたりしましたが、いよいよ三週間の本当の休暇が始まります。例年の聖ミカエル祭の後、年次総会の間に一週間の静想を守りたいと思っています。そして、南西部地方、中部地方そして北部地方へS.P.Gのため話をするにと、神戸地方部（註：教区）に一年の収入の三分の二を捧げて下さっている後援会の人々に、私の感謝の気持を表わすためにまいります。

これで秋は終わりになるでしょう。そしてクリスマスは自宅だと思うとワクワクしています。日本に帰る日はまだ決まていませんが、来年早々になるでしょう。

ここまで、この手紙には全く日本からのニュースがありませんでした。ニュース全部を省略するわけにはいきません。

4月の終わり頃、なかなか有意義だった私達の地方部の主教たちの会議(Diocesan Synod)があり、好評だった全教役者のための夏期学校が続いてありました。どちらの催しも、地方部の一致協力のため大変助けになりましたし、我々が一体であることを実感させられ、やむなく孤立している働き人に、教会の中に交わりがあること実感させ、共通の問題を話し合う機会を与えられました。

このすぐ後、私が神戸を離れたあと残念なことがありました。若い日本人婦人教役者の一人が辞めていったのです。結婚を理由にこのようなことはしばしば起こりますが、この場合は、伝道の場に年中ある問題の一つ不満が原因でした。クリスチャンではない土地の人々の風習が廃れるでしょうか、教会がそれらを取り込むでしょうか、それら迷信を正したり浄めたりするのでしょうか？ この質問はイエスカノーか簡単に答えられるようなものではありません。それぞれの風習や習慣は個々にその起原を勘定にいれ、現在の風潮を考え、まだ幼い教会の信仰の強さその他を考えて扱われるべきことです。

婦人教役者が去った損失の埋め合わせはつきました。岡山で、ミス・ポールズとミス・ホームズの訓練を受けた最初の二人は課程を終了し、この秋から勤務につくことになっています。一人はミス・ストークスと松山で、もう一人は日本人

司祭のもとで、しばらく婦人教役者のいなかった淡路島で働くことになりました。

今度は男性のこと。私が期待していたことですが、二人の新入生がこの春勉強を始めました。ジョン古田のところにいる一人は神学院に行きました。ここにいる他の私達の学生達にはよくやっています。もう一人は、東京のコースへ進むには学歴が不十分なので、下関のストロング司祭のところへ、一年間の勉強をしています。その後、もっと上の訓練に進んで欲しいと願っています。

私の来日以来、地方部が蒙ったいま一つの損失は、最高齢の司祭サムエル広瀬の死です。しかし、彼は私が神戸に行く以前に退職していましたから、戦力に影響はありません。彼はかつて働いていた姫路（いまはゲール一家がいます）に住んでいました。彼の娘の一人は日本人婦人教役者で、須磨の聖ヨハネ教会で働いています。主にありて安らかにいこわんことを。

松蔭学院は、新しい校舎でたいへん楽しくやっています。

二人の教師が信者になる勉強をしている以外、他の教師は皆クリスチャンです。もし、どなたか寄附先をたずねておられる方があったら、どうぞ主教自由資金にお願いします。それは、学校が当面払わねばならない未払金に充当するために使われることになります。



【須磨聖ヨハネ教会の献堂式。1926年10月24日】

私は、一緒にランベス会議に来るために日本を離れた八人の主教と同じように、こちらに来る前に、地方部内をくまなく巡回しました。私は一年近く日本を留守にすることになります。その間、恐らく堅信式はないでしょう。

最も盛大な堅信式は、帰国して一年、とてもいい働きをしている八代司祭のいる須磨のものでした。

松山での二回目の堅信式について、ちょっと珍しいエピソードがあります。ミス・ストークスは赴任以来、教会は彼女の住んでいる借家の宣教師館の一室です。あるウィーク・デーの夜、私は下関への途上でしたが、本線の列車が神戸到着前に、脱線、転覆するという大事故がありました。お陰で私は四時間も遅れてしまい、四国に渡るのに最終の船便まで待たなくてはならない破目になりました。松山到着は、夜中の11時すぎになります。私は電報で到着時間を知らせておきました。そして、そこには六人の新しい人々の堅信式のために、わが小さなクリスチャンの群れが待っていてくれたのです。真夜中の堅信式など、かつて聞いたこともありません。

下関で日曜日に、宇部で準備の勉強をしていた一家が、全員堅信式をうけました。ストロング司祭からの手紙によれば、この家族は自宅の一室を礼拝室にし、ストロング司祭が行ってミサをするそうです。主人の仕事が朝6時から始まるので、ミサは5時からだとのことです。

皆さんは、この夏日本を襲った台風のことについて読まれたことがあると思います。隣の九州地方部は大被害を蒙りました。神戸地方部の端の下関もやられました。ミス・ケニオンは台風の中にもそこにいて、彼女の家が風で飛ばされないうようにと悪戦苦闘しただけでなく、被災した近所の人二人を迎えてあげました。彼女によると、今この二人は求道者になるうとしているそうです。彼女は他に二十人ほどの求道者を持っています。素晴らしい伝道者です。最新の報告によると、彼女の目の具合は非常にいいそうで、私も喜んでいます。

ストロング司祭は、別の台風の時休暇中の訪問のためにそこに来ておりました。そして、船で神戸に帰るつもりでしたが、船は出航せず、やむなく汽車に乗りましたが、汽車は強風のため夜中に再三立往生し、おまけに船のように揺れたそうです。

夏がすんで、すべての教役者は帰ってまいります。彼らの秋の働きのため、特にどの地区でも福音的説教が語られますように祈って下さい。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

書簡 第20号

一九三一年(昭6)一月六日

(二月六日以降のアドレス)

日本・神戸・四の宮 ザ・ファース

シベリヤ経由

私の友人ご一同様

この手紙を、伝道の意義に満ちた顕現の祝祭日である今日、私達のために書き始めます。なぜなら、神戸で私達は、エピソード・修女会のシスター達に助けられているからです。

今日はまた、私の出航までちょうど一ヶ月の日でもあります。私は2月6日に、ティルバリーをボンベイ行き、S・ムールトン号で出発し、そのカウリー修士会(Cowley Fathers)で二日を過ごし、彼らの働きをみようと思っています。それから、陸路コロンボへ行き、そこで又、主教と二日を過ごし、私が日本に帰って最初のミサが、私の聖マリヤ蒙告記念礼拝堂で聖マリヤ蒙告日に捧げられるように、神戸に3月24日に着く日本船でコロンボから出航するつもりです。

個人的なことから始めたので、ここで、ご親切に私に新聞や雑誌を送って下さっていた方々に、また三月付けのものから送り始めて下さるようお願いいたします。 もしお送り下さる

のでしたら、123, Clifton Court, Northwick Terrace, N.W.8 のミス・パターンまでその旨を葉書でお知らせ願えれば幸いです。そうして頂ければ、以前のように彼女がリストを作っておいてくれますから。それから、私が故国から手紙をもらうのが好きなことはご存じですね。

聖ミカエル日とクリスマス間の間に、主にS・P・Gのために二十五の地方で、一〇〇回以上も説教や演説をした忙しさにもかわらず、英国では大変幸福な時を過ごしました。なぜなら、他の多くの主教方が私以上のことをなさったことを知っていますが、どこへ行っても牧師や、他の人々に大変親切にしてもらいました。また、数はすくないのですが後援会に入ってくる人の安定した流れができています。ただ残念なことは、そのようなことが、ロンドンにいる仲の良い友人たちと過ごせる時間を大幅に縮めてしまったことです。彼らが私を許してくれますように。

聖ミカエル日には大変楽しい後援会の祭がありましたし、十月には大変良い年次集会がありました。私はその午後の臨時集会があったことがうれしかったのですが、それに参加した人が少なかったため、彼らに話した会計準備やその困難についてのことを、今ここでもう一度説明することをお許しください。

何人かの人々は、神戸後援会への援助は今直接S・P・Gに

送らなければならないと考えているようです。これはそうではなく、以前のように会の事務局へ送られるべきで、その新しい住所は皆さんご存知だと思いますが、62, St. John's Wood Court, N.W.8.です。お金は現在S・P・Gを通して、私に送られてきますが、私は以前のように、それを全部地方部(註：教区)内の仕事に使っています。しかしS・P・G自体は地方部や他のものにも同様大黒柱である資金を供給しているので、彼らが私達がどれほどもらっているか、そして、我々が協力して働かなくてはならないということを知ることが大切なことです。

全般的には、会の資金がゆつくりと増える傾向にあり、聖ミカエル日で終わった五年目が、個人から私に直接送られてきたお金を含めると、僅かではありますが、今までで最高の年であったことは大変喜ばしく思います。そして、皆さんに会がどのような仕事を援助しようとしているかを理解していただきたいと思います。

日本では三つの主な支出があります。まずストロング司祭と下関の教会で凡そ年間三五〇ポンド必要です。つぎに養成中の四人の日本人学生(かなうことなら四人以上欲しいのですが)に、年間二五〇ポンド必要です。最後に、神戸のシスター達の家の家賃です。あまり多くの人が、この必要に気付いておられるとは思いません。なぜならミス・サンダースが、

このことを最優先的に個人的に大変多くのことをして下さっていましたので、今まで主教自由資金のある程度のお金で足りていたのです。シスターの修女会は、必要経費は支給するのですが、家賃は支給しませんので、これは今後定期的な支出になります。そしてもし、私の願っているように三人のシスターにいて頂けるなら、さらに年間一五〇ポンド必要です。この三項目の合計は、年間七五〇ポンドになります。そして、この他に、例えば神戸の幼稚園などへですが、少額のお金が定期的に支払われています。

これで、年間約四五〇ポンドが特別な事業(最近には主に松蔭女学校の移築のことですが)のために残るはずですが、しかし私はそれを、現在借家で礼拝をしている日本の人々が、小さな教会を建てるのを援助するために利用できればと思っています。しかし今年は、より重要な特別な入用があるので

私が神戸に行つて数ヶ月後に、神戸に行つた三人の宣教師達は間もなく休暇をとる時期です。しかし彼らはS・P・Gから資金を得ていないので、私が、後援会を通じて、彼らに旅費を用意する責任を負わなければなりません。それが一人片道おおよそ七十五ポンドになります。

一年と少し前に、学校の移築の財政面の詳細について大変長い手紙を書きました。今回は、今働いている幹事達につい

て書きます。皆さんがこのことを理解して下さることは重要だと思ひますし、もう一つ財政上のことで重要なことがあるのです。

先だつての聖ミカエル日まで、後援会の内務支出がありませんでした。なぜなら、それは全て書記のポケット・マネーから支払われていたからです。私は帰国したとき、書記局に我々はこんなことをこれ以上続けるべきではないと思ひきつて云いました。そのことを言つたとき、ミス・サンダースはおられなかったのですが、ミセス・ジョンソンには言ひましたし、10月の午後の集會に來られた方々にも言ひました。

この経費は後援會が払わなければいけません。その内訳は、主に印刷費と郵送費で、最も大きい支出は私の手紙を印刷し、發行することです。一年に四回の發行を、そうすね三回に減らせばいくらか節約になるでしょう。多分、會員の方々が内務支出にたいして何か出そうといつて下さるでしょうが、どうかそれは必要ありませんので……、ただ、そのおつもりでしたらのことです。

日本からのいくつか悲しい知らせがあります。

その一つは、韓國の主教マルコの痛ましい突然の逝去のことです。私の聖職按手式の頃、ロンドンのイースト・エンドで近所どうしでしたし、彼が、聖職會書記(Chapter clerk)として、the Ruri-decanal Chapter of Poplarをまとめ始め

たところから、彼を知っていました。10年後、私の日本での主教に韓國内の日本人のために働くよう命じられたとき、彼のもとで、一九一四年から戦争のため帰国するまで働きました。私が再度神戸に來たのち、彼は三、四度私のところに滞在し、最近のランベス會議について、『エルサレムの平和』というパンフレットを書きました。

彼の最後は神戸港ででしたが、遺体は、彼によつて建てられた素晴らしいソウルの大聖堂に埋葬されるために移送されるまで、聖マリヤ蒙告記念礼拝堂に安置されていたのです。

彼の賢明な助言と堂々たる風采を、懐かしく思ひ出しています。彼の魂が安らかに眠りにつかれますよう、彼のあとを繼ぐに相応しい人が選びだされますようにお祈り下さい。

私が初めて神戸に行きましたとき、二人のC・M・Sの宣教師司祭が地方部で働いておりました。その一人は三年程前に休暇中に辞めましたが、もう一人のスコット司祭は、夫人と一緒に素晴らしい働きをしていたのですが、ここ二年程健康を害しておりまして、昨年の夏休みにも保養になるようなことを何もしなかつたので、療養休暇のため帰国しました。皆さん、どうか彼の健康と体力が回復し、働きを続けていく準備ができますようお祈り下さい。

次に、私の要請で「松山」にある一番新しい伝道所へ行つてくれたミス・ストークス(皆さん、覚えておられるでしょ

うか)のことですが、彼女は、昨秋の初め病気で倒れてしまひました。最初は深刻な内臓疾患の恐れがあつて、しばらく入院していたのですが、幸いそれは誤つた警告だつたそうで、最近の知らせでは、大変良くなつてゐるということで喜んでゐます。しかし私は、今週神戸で開かれるはずのS・P・Gの年次總會で、彼女が松山へ帰任すべきではないという判断が下されることを期待してゐます。

松山で定期的な働きを始められるようにしたのは、その公立の學校で教えるかたわら、日本語がよく分かつたので、市に住んでいるクリスチャンを集めたり、他の人を招いたり、指導したりしていたリチャード司祭でした。しかし、彼がそこで教える任期は今年の春に終わり、彼は帰国します。そうになると、その人々のために、今までのように定期的な礼拝をしてあげるようなことは本當に難しくなります。どうか、この働きを繼續し發展させていく方法が見つかりますように、熱心にお祈り下さい。私達の最も若い日本人婦人伝道師が教育を終えて、昨年の夏、ミス・ストークスと働くために派遣され、秋のあいだずっと一人で働いてきました。しかし、いつまでも彼女を一人にしておくわけにはいきません。

ミス・バーバーも神経痛になやまされており、ついこの間まで病院にいました。これらは全て一連の不幸なできごとで、私がそこについて手助けできないのが非常に残念です。

ミス・ケニオンも、まだ目を十分用心しなければならず、續けて折つて欲しいとのこととです。これら全てのことは徐々に累積してきていたこととようで、帰任したら、各地で主教の帰国を待つてゐる堅信式のほかに、これら諸問題を解決するためにかなりの計画を立てなければならぬでしょう。

他方、各地の働き人、特にストロング司祭と八代司祭から順調で満足すべき進展についての便りがきております。

皆さんご存じだと思ひますが、S・P・G本部で数年働いていて最近退職されたミス・ヒルダ・サウンダースが、神戸の男子校で働いてゐるミス・スミスの休暇の間、ミス・スミスの代りをするためにお姉さんと一緒に神戸へ行きました。お二人の人生の一時、このことを引き受けて下さったことは素晴らしいことだと思ひます。お二人は途中、中国で親類の方と一、二ヶ月過ごす予定なので、私よりずっと早く神戸に着くようなことはないと思ひます。

10月の後援會の年次會合で、ミス・サウンダースを得る望みは無くなつたと思つていました。その時、誰かがその不足を補つてくれないだろうかという私の訴えに、五つもの臨時の奉仕の申し出のあつたことを、記録にとどめたいと思ひます。これは素晴らしいことだつたと思ひます。

靈母は日本から帰国されてゐます。そして、嬉しいことに別のシスターが日本への途上にあります。このかたは、シス

ターになる数年前に日本で働かれたことがあり、かなり日本語にも通じております。

松蔭文学院のミス・エッセンの休暇中、東京で教えておられたミス・ドウリットがその間埋め合わせをして下さるはずで、このように休暇が重なる時、S・P・Gに要請を断られたこと (Block Grant from S.P.G.) による削減の結果のスタッフの縮小の痛手を感じさせられます。

彼をご存じの方々は皆喜んで下さると思いますが、以前私と一緒に聖マリヤ・マグダレン教会にいたことがあり、今はSouthwark教区ラベンダー・ヒルの昇天教会の牧師のベキングム司祭が、ウォルトン司祭、ロジャース司祭に加わって、私の代理者 (commissary) になることに同意して下さいました。ロンドン在住の代理者をもう一人得ることは、いろいろな面で助けになることでしょう。

首都東京での一定の仕事の他に、S・P・GやC・M・Sに支援されている全ての地方部を援助する英国での組織は、日本教会援助会 (Japan Church Aid) として知られています。しかし、昔は聖パウロ・ギルドという名称で呼ばれ、今も毎年聖パウロ日の季節に祭をします。今年は、1月29日午前8時半からウエストミンスターのクライスト・チャーチで、聖餐式が捧げられます。その当日のミサや聖パウロ日に、神戸のための特別な祈りとともに、このことを覚えていて下さい。

マンスター・スクエヤーの聖マリヤ・マグダレン教会の牧師のご好意で、私の出航前の最後の日曜日の2月1日の朝と夕に、そこで説教をし、2月6日朝6時半に、そこで最後のミサを唱えようと思っています。2月5日午後8時に、グレート・ポートランド街の聖三一ホールで後援会の集会があります。そこで、出来るだけ多くの皆さんにさようならをいいたいと願っております。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

書簡 第21号

一九三一年(昭6) 昇天前祈禱節

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ経由

私の友人ご一同様

まず、私が日本への帰途、下船二ヶ月前に書いた旅行に関する短い話から始めましょう。

大変多くの皆さんが、私がイギリスを立つ前に旅路安全を祈って下さいましたので、日本のことを書く前にまずそのことについて少し申し上げなければなりません。船旅は快適で、ほとんど荒れることもありませんでした。私はインドまで、P&Oの定期船で行きました。その船は極東まで行きませんでしたので、インドに滞在する期間は長くはありませんでしたが、その船の中で三週間全くのインド的雰囲気になり、いろいろな考えをもつイギリス人とインド人の両方に出会ったりしました。インドは現在激しい論争の的ですし、神戸にも、たいへん過激な意見を持ち、反英的なインド人が何人も住んでいますから、ぜひにと熱望していたことです。

私はボンベイに下りて、そこでコレイ・ファーズで四日間過ごし、彼らやオール・セインツ・シスターズのそこ

での働きなどをいくつか見ました。そして最後の夜はファーズの一人と院外ですごし、この地方での彼らの働きがどのようなものであるかを少し見てきました。それから、陸路コロンボへ行きました。汽車はつい最近スピード・アップしたのですが、セイロンまでのフェリーでの二時間半を含めて、まだボンベイからコロンボまではほぼ三昼夜かかります。車内はたいへん暑く、身体も大変よごれます。私の任務が熱帯地方にないことをありがたく思います。私は二日間コロンボの主教と過ごし、船が港にいる間に、シンガポールの主教と一日を過ごしました。私はたいしたことはしなかったのですが、お二人とも大層丁寧に送って下さいました。しかし湿気のある暑さは大変こたえました。神戸も夏は同じ位ひどいのですが、それは三ヶ月間だけで、こちらでは一年中そうなのです。

コロンボからは日本の船に乗りました。この中ではインドの雰囲気はほとんどなくなり、私も再び日本語を話し始め、日に日に日本へ帰ったような気分になってきました。船が発動機船だったので、下関の対岸で石炭を積み込む必要もなかったもので、願っていたストロング司祭との早朝のおしゃべりができませんでした。私達は、上海から神戸へ直行し、予定より一日早く3月23日に着きました。

それにしても、六週間半の旅行というのは大変長く、カナ

ダからのルートの方が、少なくとも二週間は早いはずだ。

私は船を下りるやいなや電報を受け取りました。それには、春の主教会は25日の朝から三日間東京で開かれ、私も出席しなければならぬ、とありました。ですから一日早めに着いたのは運が良かったのですが、神戸から夜行列車で出発するまでに二十四時間しかないということなのです。このため、私はこの礼拝堂で聖マリヤ蒙告日のミサをすることができないということになりました。そこでこの礼拝堂での守護聖人のミサを「Low Book」の火曜日まで延期しました。この唱詠ミサには、ほとんどの宣教師たちばかりでなく、クーパー司祭やアーノルド司祭も韓国から出席してくれました。クーパー司祭は、韓国の四代目の主教として聖別されるために英国へ出帆するまで（広島と呉で「Low Sunday」に按手式をして帰ってきた私と同様、彼も七時間汽車に乗って韓国からやってきて）ここに泊まりました。皆さんがこの手紙を読まれるまでに、彼の主教按手式が聖バルナバ日に行なわれることが知らされ、皆さんは、彼の主教職のうえに神の御恵みがあるようにとお祈りなさっていることでしょう。彼は前主教の後を継ぐという大きな職務を目の前にしているのです。自分勝手ですが、彼が夏の終わりまでには韓国に帰られるだろうと思ひ、韓国に按手式をしに行く必要のないことにホッとしています。

アーノルド司祭は（ストロング司祭と一緒に）東京での一

と「暮合」の伝道所（mission church）です。

アレン司祭が、日本人の執事と共にこの暮合で働いていることは覚えていらつしやるでしょう。私は帰任最初の日曜である枝の日曜日、この教会のミサで按手式をおこないました。そして聖金曜日には三時間の礼拝もおこないました。現在では、松蔭女学校が他のどの教会よりもこの教会に近いので、何人かの女生徒が通っています。そしてそのことが、この地域のクリスチャンの数の安定した増加とあいまって、現在の伝道所がその目的のためには小さすぎるということの原因となっているのです。恒久的な教会の建設が早急に決定されなければならぬでしょう。

その間に、もう一つ教会の建設のための特別な援助をお願いしたいのです。それは「高知」のことです、高知は南四国の主要都市です。私が帰ってくる前に私達は飯の伝道所がたっていた敷地を売りましたが、それは小さな病院とかなり騒々しい酒場の間にはさまれていた土地でした。土地を売ったお金で新しい敷地を買いました。現在そこには三軒の古い家が建っており、一軒は礼拝ができるように改修されましたが、あまり便利であるとは言えません。私はその信者達に、私がない間に自分達でお金をためるよう精一杯努力をすれば、私が帰ってきたときになんらかの援助をしようと言いました。彼らは大変がんばり、今年の夏には建築を始めたいと言って

日の会議に出席してからここにいました。会議は母国での会議の動きに同調した日本人達によって組織されたものです。どちらかというと私は、もう会議などは母国でも海外でも十分行なったと思います。そして本当に必要なのは、神への信仰の中で安定した穏やかな話し合いと発展という仕事だと思ふのです。しかしこれは単に私の個人的な意見です。私達はこの運動で確かに、トンクス司祭やこの運動の海外協会のお蔭をこうもっているのです。

そこで思い出したのですが、今年秋のセールで再び神戸の売店を出します。できましたら援助をお願いいたします。聖週に東京で会議を主催した人たちが私を議長にしてみましたので、行くべきだろうと思ひ、行ってハイ・マスをとってきました。そこではいくつかいい演説があり、議題の中心は神の王国についてでした。

しかし、これらの集会と二週間前の主教の会合とに参加しなくてはならなかったことは、私のスケジュールに大きく食い込み、地方部の問題や、按手式などがたまっていたので、どのようにして切り抜けたらいいのか、わからなくなるくらいでした。しかし、帰ってからあちこち回っていると、活力と熱心さの現れを多く見ることができたとと言えることが大変うれしく思います。私は特に神戸市の二つの教会の進歩とその雰囲気におどろきました。それは須磨の「聖ヨハネ教会」

います。私は、このことを皆さんのうちの何人かの方に話しました。そしてこの教会のためにかなりのお金が、私の出席したスタッフオードシャーの素晴らしい家庭集会で集まりました。しかし、彼らを助けると約束した援助は急を要するものです。ですからこのことを可能としてくれる後援会の援助に感謝しています。建築のために私の手許にあるお金は少し、でも大きな伝道協会の特別資金からいくらか援助をうけることになっているので、この建築のために現在後援会にお願いしたいのは約二〇〇ポンドです。この教会のことはについては、次の手紙でさらにお知らせするつもりです。そして次の手紙は、今回の様に長くお待たせしないようにしたいと思っています。何人かの方々が（私の最近の手紙のあと）後援会の内務支出に対して親切に援助して下さいました。しかし、私が提案したこの後援会通信を、年に四度から三度に減らすということに対するご意見の表明はあまりありませんでした。おそらく、このことは二つの案の中間でまとまることと思ひます。日本の産業と農業の不況は深刻で、昨年さらにかなりひどくなりました。しかし実際には、英国のものに比較すればそれほど悪くはないと思います。

神戸市内で、大変熱心で発展しているもう一つの教会は須磨の「聖ヨハネ教会」で、八代司祭がすばらしい働きをしています。聖ヨハネ教会の教会記念日はあまりにクリスマスに

近いので、彼らは5月6日(聖ヨハネ ラテン門前の受難の日)を、教会記念日と守護聖人と奉獻日の意味を兼ねた日としています。私は記念日後の日曜日に、唱詠ミサと按手と説教をしに行ってきたところです。

小さな教会は窒息しそうなほどいっぱいになりました。後でみんなで屋外で昼食をとりました。この教会の最も熱心な信者の一人は神戸の西の明石に住んでおり、八代司祭はそこへ定期的に出かけて行っており、この人の家で毎週日曜学校と晩禱を行なっています。どうか須磨の聖ヨハネ教会と、明石と葦合での働きの始まりと、高知の教会建築計画のことを覚えて下さい。

私の神戸での最初の年にやって来ていた宣教師たちはみな、休暇をとっているか、今からとうとうとしているところです。ミス・バーバーは4月の初めに出発し、ミス・エッセンとミス・スミスは二週間後に出発しました。4月の終わりにはミス・ウォーシントンが休暇に入りました。彼女は、地方部(註:教区)に残っている数少ないC・M・Sの宣教師の一人で、広島で働いていました。退職の年齢に達したのですが、勇敢にも休暇の後、帰ってくることを望んでいます。

6月の終わりには、ゲール司祭とその家族がカナダへ休暇で行きます。彼らはカナダ人ですから、当然母国の人々と過

ごせるところで休暇をとることを望んでおり、おそらく英国にはまったく行かないでしょう。最後に出発するのはストロング司祭で、8月上旬にたち(一年で一番暑いときの熱帯地方をさけるために)カナダ経由で行き、家に帰ってから何日間か休み、ロンドンへ聖ミカエル祭のため、でなければ年次総会のために行くことになっています。

下関では、今年信者が何人か他の場所へ移らなければならなくなつて、大変苦しい立場に立たされています。ここでは、地方部の他のどこよりもしょっちゅうこのように苦しい立場に立たされるのですが、しかし新しい求道者も何人かいます。ストロング司祭がいない間は、できるだけストランクス司祭が山口から聖餐式のために行きます。

ミス・ケニオンは、またも下関に定住牧師のいないまま残されるのですが、嬉しいことに彼女の眼ははっきりと良くなつており、さらにもっと良くなつてくれるように願っています。

ミス・ストークスも、まだ十分体力はありませんがだいぶ良くなっています。彼女はミス・バーバーが休暇中の神戸の幼稚園の担当になっています。

幸いなことにリチャード師は、松山で学校の仕事をもう一年続けることができることになり、教会での働きも続けることができます。そしてその働きは素晴らしくうまくいって

ます。

他の人が休暇の間、臨時の応援に來た方々はうまく落ち着きました。ミス・ドウリツは松蔭女学校で頑張っておられるし、ミス・サウダーは男子校での仕事だけでなく種々な小さなことを手伝つて下さる素晴らしい宝です。私達がこの三人全員を得られたことは好運なことで、彼女らはS・P・Gの削減による困難を緩和してくれています。とりあえず今のところはのことですが……。

日本のS・P・Gから援助をうけているもうひとつの伝道地方部(南東京)は、私達よりももっと強い打撃をうけているのです。彼らの宣教師の一人は十七年前にオーストラリアからきて、彼の生活と働きは、その時からオーストラリアの教会の援助をうけているのです。ランベス会議から帰った主教から、彼はオーストラリアの絶望的な財政事情により全ての補助金は数ヶ月以内に止められると知らされました。その上彼はメラネシアの補佐主教に任命されていた同僚司祭をつい最近失ったのです。皆さんの祈りの中に、南東京地方部と主教のための祈りも加えてあげて下さい。

私達はシスター達のために、彼女達の家と棟続きの隣の家の一階の二部屋を譲り受けるように手配することができました。そこで彼女たちは引越す必要なく、より大きな宿舎を得ることができたわけで、直ちに三人のシスターをそこに住ま

わせる準備ができました。もし、希望どおり増員できるならばのことですが……。今年の初めにこられたシスター・テオドラは、シスター・エレノア・フランセスとしばらくの間こちらにおられます。

いつも皆さんに感謝している友である
在神戸主教 中バジル

書簡 第22号

一九三一年(昭6)八月十七日

日本・神戸・四の宮 ザ・ファーズにて

シベリヤ經由

私の友人ご一同様

この手紙を書いている今が、一年中で一番暑いときです。アレソ司祭と私は今、神戸に近い山の中の小さな教会のそばのバンガローにいます。この小さな教会で、私は定期的に聖餐式を執行しておりますが、それは主日ではありません。主日にはここにいないからです。時には、この定期的なものの以外に、週に一、二度聖餐式を執行することもあります。この前の手紙にも書きましたように、アレソ司祭は真合の伝道所を管理しており、暑い夏でも日々多忙のようです。とはいえ、彼は今週は、日本本土の北の島、北海道に休暇ででかけることになっております。

ストロング司祭は、帰英前の三日間を私たちとともに過ごしました。間もなく皆さんは彼とお会いになることでしょう。私が体験したような楽しい毎日を、彼も故国で過ごすことと思います。ストロング司祭は私にとって、一番最初の同労者でした。神戸で二年間ともに働いた後、下関に赴任しました。

の二人は夏以降も引き続きトレーニングを受けます。他のものはトレーニングを終えました。

ということは、岡山には今は婦人伝道師は誰もいないということですが、来月、須磨の聖ヨハネ教会から広瀬婦人伝道師が岡山に赴任することになっております。須磨には近々トレーニングを終えた者の中から誰かが赴任するはずですが、聖ヨハネ教会にはもっと難しい問題があります。

神戸の中心教会である「聖ミカエル教会」の牧師は二十五年もの間、信徒奉侍者、執事、司祭としてここで働きました。この最初の教会は焼け、今は二代目のものですが、今年でヨベルの年を迎える神戸の聖公会諸教会の中で一番歴史のある教会で、彼はそこで教会の年の半分にあたる年月を過ごしたということでもあります。彼は聖ミカエル教会での働きを辞任しました。年をとり、ここでの働きは負担が多すぎるというております。でも彼は、牧師としての働きを完全にやめたいといっているわけではありません。四国西部の町、大洲に赴任する予定です。

聖ミカエル教会の方々の意見を聞いてから、この牧師に八代司祭を任命するつもりでおります。そして、いま大洲にいます司祭を須磨に派遣しようと思っております。

八代司祭は聖ミカエル教会にとってはまだ若いということがあり、加えて、同教会には神戸の中心教会として、郊外に

下関では多くの困難に出会ったようですが、勇気と忍耐をもってよき働きをしてくれました。ある人は、来日する新しい宣教師は、ストロング司祭が来日五年間にしたような働きは(日本語が難しく)できないだろうといっております。

私はストロング、アレソの両司祭は今や立派な働きをしてくれているということを皆さん方に知っていただきたいと願っているにすぎないのです。婦人宣教師のことをいっているではありません。

いま休暇で帰国中の者から、皆さんに大歓迎をされたというのを先月聞き、とても嬉しく思いました。10月14日に、チャーチ・ハウスで開催される集いが盛会でありますように。休暇中に、代って礼拝を守ってくれる人がいないということもあって、神戸市内の六教会を順番にまわって礼拝を守るために、私は、毎主日神戸に帰っております。こうすることによって、司祭たちに少なくとも二週間以内の休暇を与えることができます。

最近、聖務に関していくつかの動きがありましたし、近々異動も予定しております。すでにお知らせしたように、ゲエイル司祭は夏の初めに二週間の休暇をとりました。彼の後任には、日本人のベテラン司祭である牧野司祭が淡路島の教会から赴任しました。ボウルズ、ホームズの両婦人伝道師が、岡山から姫路のゲエイル司祭のいた牧師館に移りました。こ

移っていく人々に対して憩いの場とならなければならぬということがあります。どうぞ、今、そして働きを始める秋にかけて八代司祭をおぼえてお祈り下さい。就任式は聖ミカエル及び諸天使日の次の主日に執り行う予定です。

ミッシェン・フィールド新聞(S.P.G.の月刊紙)の8月号に出てくるリチャード師の書いた記事を読んでいたきたいのです。彼の本来の働きは、松山の高等学校で英語を教えることなのですが、教会でもよい働きをしてきております。これについては何度か報告をしました。

この記事の中で、リチャード師は「松山」の土地柄及び教会の発展について詳しく書いております。これは六ヶ月も前に書かれたものですが、その後更に発展を続けております。私は婦任以来、松山では十一名の者に按手を授けました。リチャード師は彼自身の考えもあって、松山では絶対に責任者にはなりません。彼自身もいつているように、松山というところは、教会の立場からすれば大洲のパリッシュです。それが先月、大洲から分離して聖アンデレ教会会衆として、借家の二階で礼拝をまもっております。

かれらは教会の土地購入のための積み立てを始めました。こういった動きは、リチャード師の離日後、後任者を来春までに派遣する必要があるということでもあります。今のところどうすればいいか私にはわかりません。よき方法が与えられ

るようお祈りください。

先日「高知の教会」の教会委員と高知に新教会を建築する問題について、長時間話し合いました。来月定礎の予定です。私は高知の教会のためのフェローシップ・ファンドはほとんどこないのではないかと案じております。故国の皆さんがこの問題に直接関心をお持ちだとは思っていないからです。もし「主教自由資金」に援助がいただけるならば、最も急を要すると判断するものに使うようにということであろうと理解したいと思っております。

ともあれ、今秋は教会建築に援助をするという約束はしないつもりです。教会建築計画が次々と、私が考えている以上に早いペースで出てきているからです。アレン司祭が一年以上上司牧している「葺合」地区は、中心部に聖ミカエル教会のある細長い町の東部地区にあります。この細長い町の西半分はほとんど建物がちました。ですが、東部地区の海沿いの部分はどうしようもない貧困地区です。でもこの東半分の地域にも、徐々に建物が建ち始めております。

松蔭女学校の土地を購入した二年前、この付近は全くのあきちでした。今では土地の半分以上に家がたっております。葺合地区の聖公会信徒は、新たに改宗し、転入入籍する者により僅かながら増えております。彼らは、早い機会に自分たちの教会を建てるんだと一生懸命になっております。数年前

から建築資金積み立てをしており、土地はすでに購入しました。自由に使える牧師館はその奥の部分にできており、二階が礼拝堂として使われております。前の部分は植木屋さんに貸しており、樹木や灌木が植えられております。近いうちに移転して欲しい旨を伝え、了承してくれるかどうか心配をしておりました。(英国と同じように、ここでも借用者の権利があるからです)しかし、植木屋は9月末日までに明け渡すと約束してくれました。9月27日に定礎式をすることになっております。

高知か葺合か、どちらが先に完成するかわかりません。私はいっしょに聖パウロの名によって、もう一つは聖ペテロの名において捧げたらと思っておりますが、まだ決っておりません。面教会ともに借金をせず自己資金でということは無理でしょう。できれば借金はしたくないのですが。

年間の財務報告(この手紙と一緒に、そうでなければこの手紙がお手許に届いてから、遠からず受け取られると思いますが)で、一部では私が英国にいた時代のものも含めて、これまでの過去六年間の総計をお知らせしようと思っておりますが、それをしないまま、今の時点で面教会に敢えて「計画を進めてほしい」というべきではないでしょう。どこにいても、皆お金には困っております。

来年はフェローシップの私たちに對する財政援助は難しい

年になるだろうと思います。とはいえ、今までと同様、皆さん方は一生懸命に下さるであろうと私は確信しております、いつも感謝しております。

神戸は、高く連なる山々と、海との間に沢山の人が集まっている町です。そして沢山の川が流れております。ふだんは静かな流れですが、台風襲来の後など激流となります。この川の一つは、葺合と聖ミカエル教会のパリッシュとの境界線となっており、いま鉄筋コンクリートでふたをし、視界から消えつつあります。ロンドンのフリート通りの地下を流れるフリート川のようになっております。このようにして数年、地下を流れていた町の中央にある川の水が、6月初めの台風により路面に吹き出してきました。それによってメイ・ンストリートの一つが崩壊しましたが、近頃やっと補修を終えました。この台風に襲われた夜、私の住いの前の大きな藤の木、つるばらの柵がものすごい音をたてて倒れました。藤の木も、つるばらも木の方は無事で、いま新芽が成長しております。これは嬉しいことです。

松山のリチャード師の後任を派遣するにあたり難しいのは、お金の問題ではなくて人材不足という点にあります。S・P・Gからの婦人宣教師に代る人、過去四年間のミス・ポールズ、ミス・ホームズの働きを補ってくれる四人の婦人伝道師はおります。しかし男性の場合が人材不足で、私が神戸に帰任以

来トレーニングを受けているもので、それを終えたものはまだ一人もおりません。

一番最初の人、ヨハネ古田は肺病の疑いで倒れたということとおぼえておられるでしょう。その後、彼は非常によくなくなり、五ヶ月前、私が帰任した時彼の希望を入れて私の秘書にしました。以来いい働きをしております。

彼に次ぐ二人のものは、今夏一ヶ月の実習につきました。

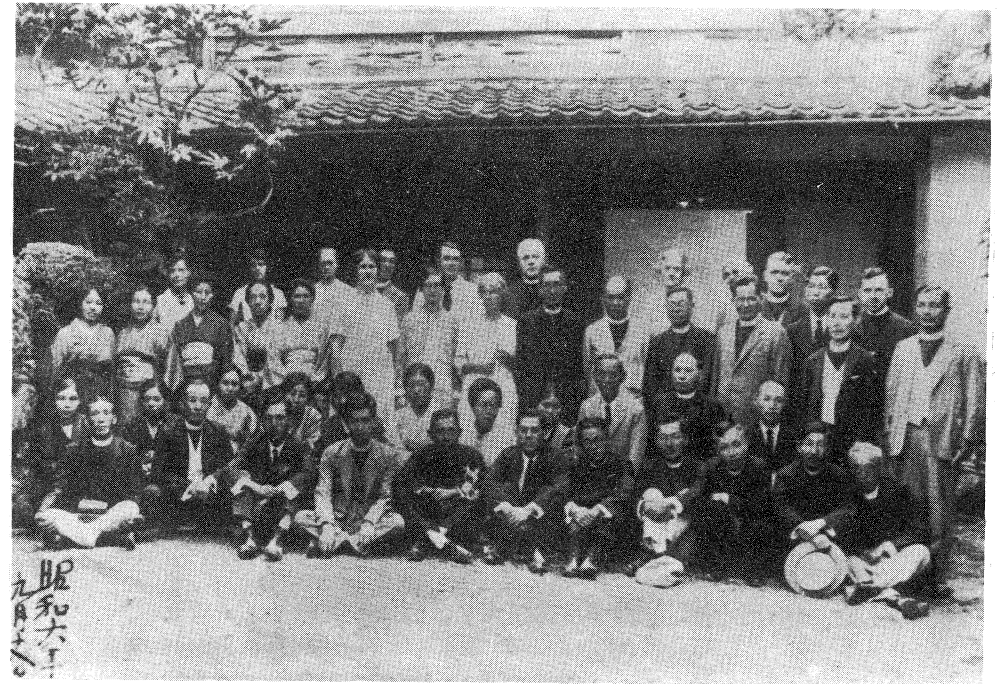
ヨハネ末好は下関で、もう一人のステパノ袴田は御影で、それぞれ牧師たちが休暇をとっている間奉仕をしております。神学校で一人はもう二年、一人は三年学びます。

地方部(註:教区)内のC・M・Sの伝道地では婦人伝道師は足りませんが、そこを若い男性が上手に補っております。このうち二人は来年接手を受けます。

この手紙を受け取られた皆さん方に、特にご加禱願いたいたことがいくつか9月に予定されております。

9月13日の日曜日に二人の新婦人伝道師に認可状を授与します。須磨の聖ヨハネ教会で執り行う予定です。翌14日は奈良で地方部会を開催します。16日の朝までの予定です。引き続き、同じ場所で聖職及び男女の伝道師のための夏期学校を開催します。これは18日朝までの予定です。二人の受按候補者はその後すぐ私とともに神戸にもどりトリートをしします。これには許される聖職は全て参加します。

- (Fr. Pickard-Cambridge, C.O.) 50, 51
 r リチャード (Fr. Richards, W. A.)
 76, 77, 81, 86, 98, 103, 106, 108
 ロジャース (Fr. Rogers) 99
 「境港」 51, 72
 サンドース (Miss Sanders, Ella K.)
 65, 91, 96, 97
 サウダース (Miss Saunders, Hilda)
 98, 104
 s スコット (Fr. Scott, John Joseph)
 72, 82, 88, 97
 ショウ (Fr. Shaw, Ronald D. M.) 27
 「下関」 18, 22, 27, 34, 45, 53,
 61, 71, 94, 96, 103
 松蔭女学校 29, 33, 38, 59, 65, 69,
 70, 74, 79, 84, 86, 96
 スミス (Miss Smith, Eva Burgh)
 8, 32, 55, 98, 103
 ストークス (Miss Stokes, K. S. E.)
 34, 39, 49, 58, 86, 92,
 94, 97, 98, 103
 ストランクス (Fr. Stranks)
 53, 62, 67, 86, 103
 ストロング (Fr. Storong, George N.)
 8, 12, 15, 22, 23, 28, 29, 31, 36,
 40, 44, 46, 48, 53, 54, 56, 61, 62,
 63, 64, 66, 68, 71, 87, 93, 94, 96,
 98, 100, 101, 103, 105
 末好 (時信) 108
 「須磨」 9, 16, 17, 23, 39, 80
 須磨聖ヨハネ教会
 57, 93, 94, 101, 102, 106
- 「洲本」 51
 真光 51
 t 「高浜」 14
 「高松」 87
 テオドラ (Sr. Theodora) 104
 「徳島」 15, 51
 トンクス (Fr. Tonks) 101
 「東京」 4, 29
 「宇部」 87, 94
 ボールズ (Miss Voules, Jessie E.)
 31, 32, 38, 46, 49, 52, 61,
 65, 88, 92, 105, 108
 w ウォーカー (Mr. Walker)
 8, 32, 38, 55, 64
 ウォルトン (Fr. Walton) 28, 99
 ワッツ (Fr. Watts, Frederick)
 19, 32, 56, 64, 78, 82
 ウェストン (Fr. Weston, F.) 16, 28
 ウイルソン (Fr. Wilson, W.W.) 23, 28
 ウイルソン前大統領夫人 80
 ウォージントン (Miss Worthington H)
 46, 103
 y 「山口」 21, 22, 76
 山内 (豊吉・長老) 46
 八代 (欽之允・司祭) 46
 八代 (斌助・主教)
 9, 33, 43, 47, 53, 58, 75, 80,
 81, 87, 98, 103, 106
 「米子」 27, 72, 50, 82
 吉本 (バルナバ・司祭) 77, 82



【奈良での教役者修養会。1931年9月】

按手は聖職按手節の19日の土曜日の早朝行います。司祭按手を受けんとするステパノ片山と、執事按手を受けんとするパウロ古本の二人を皆さんのお祈りのうちにおぼえて下さい。土曜日の按手は、他の聖職をそれに参加させることができます。皆一人で教会を守っており、日曜日に按手することはできないのです。残りのもう二つの主日には新教会の定礎を行います。

皆さんにもう一つお祈りをしていただきたいことがあります。私が神戸に帰任する前から、日本のエピファニー修女会の修道院長をしていたエディス・コンスタンス修女が、聖霊降臨節にトルロー修女会の霊母に選ばれたことに関してです。日本で彼女は必要なのですが、日本での働きをよく理解できる人が故国で霊母になるということは素晴らしいことです。一人または二人の修女の応援来日が予想されます。

いつも皆さんに感謝している友である
 在神戸主教 卍バシル

【追伸】 按手式の日の夕方より、葺合の教会では伝道集会をするということを忘れておりました。どうぞお祈りのうちにおぼえて下さい。

人名・地名・教会名索引

- a 栗飯原(ヨハネ、亀一) 24,27,75,88
「明石」87
秋田(哲三・司祭)9
アレン(Fr.Allen, Eric)
38,43,44,48,53,54,62,64,
66,68,71,73,86,105,107
アーノルド(Fr.Arnold, Ernest H.)
..... 38,101
「淡路島」 51, 93, 105
b バーバー(Miss Barber, Doris I.)
... 8,23,56,68,86,98,103
ベイリス(Miss Baylis, Enid M.)
..... 47,49,55,86
ベキングラム(Fr.Beckingham) ... 7,99
ブレイス(Mr.Blyth, Ormond) ... 26,27
ブライドル(Fr.Bridle, George A.)
... 5,12,23,31,40,41,47,48
ブラック・ホーキンス
(Fr.Black-Hawkins) ... 7
バーミンガム(Fr.Birmingham) ... 32
c ケイス(Case, Dorothy) ... 19,24,32
コンスタンス修女(Constance, Edit-
..... 109
クーパー(Fr.Cooper, William S)101
カル(Miss Cull, Adde H.)
..... 47,55,67,68
d ドウリット(Miss Druitt, Isabel M.)
..... 99,104
e エッセン(Miss Essen, Mabel E.)
..... 8,55,99,103
エピファニー修女会
28,42,55,76,95,104,109
f フォード(Fr.Ford) 62
フォード(Rev.Ford, John C.) ... 54
フォスター(Foster, Canon) 22
フォス(Bp.Foss, Hugh J.) ... 40,51
フォックスレイ(Fr.Foxley, Charles)
..... 16,39
フランセス(Sr.Frances C.Eleanor)
..... 47,49,55,104
「葺合」 57,86,102,105,109
「福山」46
古本(正夫・司祭)109
古田(武夫) ... 70,75,82,88,93,108
g ゲイル(Fr.Gale, William H.)
... 10,16,22,23,28,93,103,105
ジェミル(Fr.Gemmil, William C.) 4
ゴールドスミス(Fr.Goldsmith A. G.)
..... 7,31
ゴールドスミス夫人 8,10,31
グロスター卿(Duke of Gloucester)
..... 70,74
h 袴田(観一) 108
「浜田」36,51,72
ヘーズレット(Bp.Heaslett, Samuel)
..... 16
「姫路」9,16,23,46
「広島」 46
広瀬(なおみ) 106
広瀬(サムエル・司祭) 93
ホームズ(Miss Holmes, Mary)
31,32,39,46,49,52,53,61,
65,88,92,105,108
ホン(Hong, Moses) 19

- ホーズ(Fr.Hose) 88
ハント(Fr.Hunt) 34
ヒュー補佐主教(Hugh)34
ヒューズ(Miss Hughes) 8
i 板野執事47
j ジョンソン(Mrs.Johnson) 67,91,97
ジョンソン(Miss Johnson)67
k カーカム(Mr.Kirkham, Ernest) ...56
賀川(豊彦)82
覚前(信三・司祭)33,56
覚前(政吉・司祭) 56
片山(ヨハネ・執事) 83
片山(民治郎・司祭)109
「京都」35
「熊本」16
「京城」12
ケネディー(Fr.Kennedy, F.W.C.) 90
ケニオン(Miss Kennion, Jessie O.)
18,22,34,45,48,53,61,67,
68,75,83,86,87,94,98,103
ケッテウエル(Fr.Kettlewell, Fred)
16,23,28,43,45,57,69,73,
83,86,88
「呉」 9,18,24,46,83
小池(耕造・司祭) 37
「神戸」 ...20,27,28,30,32,39,42,54,
55,96,101,108
昇天教会 25,56
「高知」50,102,107
小林(貞治郎・伝道師) 15
l ローレンス(Miss Lawrence, M.)
.....46,67
リー(Bp.Lea, Arthur) 4
リー(Miss Lea, Leonora E.)
..... 32,55,56
m 牧野(与三郎・司祭)105
マン(Bp.Mann, John Charles) ... 52
マルコ(Bp.Mark) 97
メアリー(Sr.Mary, Edith)56
「益田」 36,51
「松江」51
松井(米太郎・主教) 58
「松山」 14,76,81,86,94,98,106
ミカエル教会55,106
「御影」45
「宮島」44
モーゼ(Fr.Morse)67
元田(作之進・主教) 58
n 永野(武二郎・司祭) 51
「長浜」13
ナッシュ(Miss Nash, Elizabeth) 72
「名塩」73
ネトルトン(Miss Nettleton, I.) 47
o 小穴(藤雄・司祭)3
「大洲」 13,52,76,80
緒方(政枝・婦人伝道師) 53,58,75,86
「岡山」 31,38,46,60,61,66,88,106
「隠岐島」 37,72
p パーカー(Miss Parker, Alice)
..... 8,56,68,69
パロット(Mr.Parrott)56
パターソン(Miss Paterson) 95
ピアース(Mr.Pearce, Humphrey) 62
ピカード・ケンブリッジ

ご協力に感謝。

翻訳奉仕

八代欽一主教 1, 2号 信岡章人司祭 7, 8号
 古本(純)司祭 5, 6号 原 寛 司祭 9, 10号
 覚前信三司祭 13号 秋山義孝司祭 14号
 中道政昭司祭 17, 18号
 西川正文司祭 3, 4, 11, 12, 15, 16, 21号
 佐藤真一司祭 19, 20, 21号

ワープロ印刷原稿、索引作製 佐藤芳子

神戸教区歴史編纂委員会

顧問 八代欽一主教

○ 佐藤真一司祭

西川正文司祭

林普佐夫司祭

西海雅彦聖職候補生

The Fellowship Letters (上)

非売品

1985年10月10日 初版発行

発行者 日本聖公会神戸教区
 歴史編纂委員会

印刷所 高知・関西印刷

発行所 日本聖公会神戸教区

写真資料について……

原本には写真は掲載されていません。教区資料から、関係
 教会・学校のご好意で文中に以下の写真を挿入できました。

頁	所蔵
1【バジル主教 (左)1932年 高知聖パウロで。(右)年代不詳]	教区
12【京城大聖堂]	教区
14【スコット師夫妻の送別会。徳島で1927年2月]	徳島
17【姫路顕栄教会の会衆、中央に牧野与三郎師。1938年頃]	姫路
33【主教と神戸地方部の聖職方。1927年]	八代家
45【ゴールドスミス師(左端)1925年11月 須磨寺で]	教区
50【牧杖を持たれた主教]	教区
54【聖ミカエル教会 1893年献堂、1945年夏焼失]	教区
57【シーメンズ・ミッションの働き人達、(前列中央)ゴールドスミス師]	教区
60【婦人宣教師と婦人伝道師。1924年]	教区
63【有馬での教役者修養会]	教区
66【当時の聖オーガスチン教会]	教区
67【下関のストロング師、一人おいてミス・ホームズ。1938年頃]	下関
69【中央にミス・パーカー。1924年]	教区
75【グロスター卿による松蔭の定礎式。1929年]	松蔭
78【リチャード師と家族。松山で1932年]	松山
89【昭和初期の松蔭の女生徒達]	教区
93【須磨聖ヨハネ教会の献堂式。1926年10月24日]	須磨
109【奈良での教役者修養会。1931年9月]	教区